

鹿島宗二郎著

# 動乱の 毛沢東

至誠堂



## 〈著者紹介〉

鹿島宗二郎 (かしま そうじろう)

1904年 東京生まれ。東京商科大学卒。

中国の実態は最近、文化大革命が起こるまで、まったく知られていなかったと同然であった。人民共和国成立以来、これほど交流の盛んだった日本が、実は中国社会の本当の姿をなにも知らなかったというのは、いわば、中国を見聞きしていたことが、すべて皮相な見方でしかなく、なにも分析されていなかったということである。いわば、印象批評でしかなかった。そういう中で鹿島氏は、中国社会と経済を分析し、民族性を考え、中国に関するあらゆるファクターを分析するという立場を堅持して来た貴重なシノロークのひとりである。もちろん、学問の研究には思想的立場が重大な影響を与える。しかし、氏の場合、その思想的立場はその学問的成果と、20年にもわたる中国での生活から得たものの上に立っている。印象批評が跋扈する中で終始、一貫した研究をつづけるのは並大抵のことではない。文化大革命以来、こんどはその反対に、中国をまったく悪くいうことが、知識人の証しであるような風潮もある。その中でもやはり真実は追求されねばならない。本書はそういう面で画期的なものであろう。

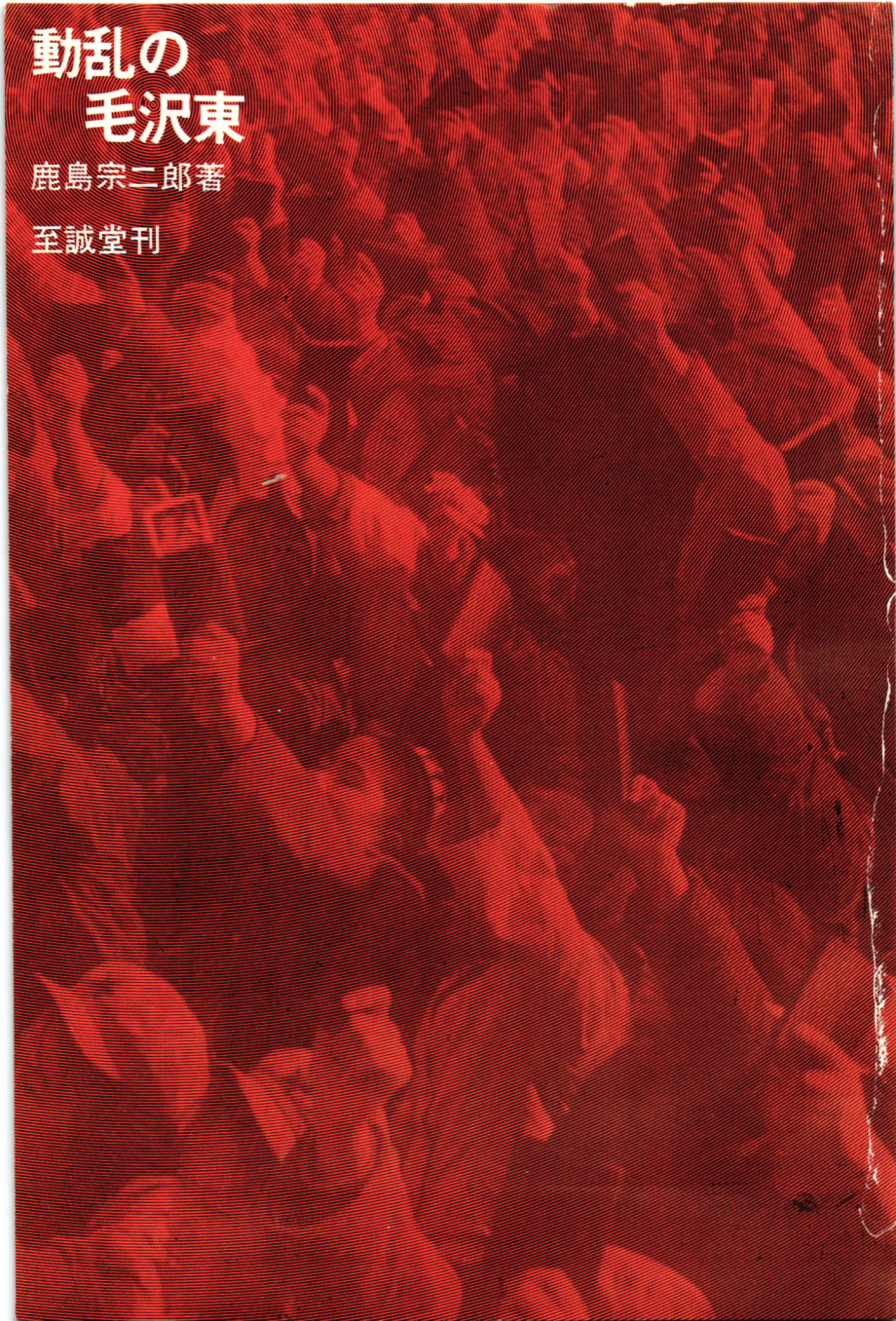
## 主要著訳書

『上海無辺』『中国革命の百八人』  
『毛沢東における人間学』『中国のことばとこころ』(至誠堂) H・アイザックス著『中国革命の悲劇』  
上・下 (至誠堂)

# 動乱の 毛沢東

鹿島宗二郎著

至誠堂刊



の行動や政策に焦点をあてた。とくに文化大革命にいたるまでの党内の葛藤は、中国自身のみではなくそのなかで発表された文献によって証明しつつ、できるだけ写實的にえがいてみた。

一九五八年、かれの理想から生まれた人民公社化運動は破竹の勢いですすみ、七億の中国人のほとんどをそのなかに包含するまでになったが、人間の経済本能を精神力によっておきかえようとしたこの制度は、中国の労働者・農民の強いレジスタンスによって徐々に崩壊し、いまではその内容はかれ本来の理想から、遠いものになっている。これにたいするかれ一流のまきかえしが文化大革命の基調なのである。それがどう発展するかは今後の問題であるが、すくなくともそのなかにおける毛沢東の位置づけは本書のなかで示唆されている。

昭和四十二年四月

杉並区高円寺の偶居にて

鹿島 宗二郎

目次

はしがき

第一章 運命の分岐点

——一九五八、九年——

一 人民公社の真実

二 腹心の反対

三 かけひき

四 三・三制

五 八中全会

第二章 革命の風土と熱風

一 湖南人かたぎ

二 桃園の義盟——劉と毛

一  
二  
一〇  
二〇  
三九  
四〇  
五  
五  
五七

三	党内外からの圧迫	六六
四	コミンテルンと毛沢東	七六
五	農民組織は進む	八一
六	李立三路線の崩壊	九〇
第三章 苦難の時代		九五

一	中華思想	九六
二	周恩来、毛沢東の実権を奪う	一〇五
三	朱徳と南昌暴動	一一四
四	ソヴェトの土地改革	一二三
五	苦痛経済	一三一
六	長征のきっかけ	一三六
七	遵義会議と八・一宣言	一四一
第四章 勝利への街道		一四九
一	延安時代のはじまり	一五〇

二	毛沢東の恋愛……………	一五五
三	国共の秘密交渉……………	一六三
四	西安事件から国共再合作へ……………	一六六
五	中国の英雄時代……………	一七六
六	抗戦中の土地問題……………	一八四
七	「蔣介石よ去れ」……………	一八九

## 第五章 毛沢東政権の内側……………一九七

一	ななが中華人民共和国を創り出したか……………	一九八
二	あるひとりの革命家……………	二〇三
三	「隣り組」組織の活用……………	二一一
四	すべては国家へ……………	二二〇
五	高崗事件……………	二三九
六	百家争鳴……………	二三七

第六章 文化大革命 …………… 二四五

一 中国のネップ時代…………… 二四六

二 文化大革命…………… 二五七



第一章 運命の分岐点

——一九五八、九年——

## 一 人民公社の真実

運命というものは、平凡な人間には気まぐれなものであるが、細心で大胆な乗り手には、従順な馬のようにいつも素直に身をまかせせるものである。だが乗り手がそれに慣れて、あまりに無理なたづなさばきをすると、たちまちもちまへの驛馬の気性をあらわして、乗り手をふりおとす。

一九五八年まで、毛沢東の人生は危機と冒険の連続だったが、運命はどんな苦しいときでも、かれを笑顔でむかえてくれた。そのためにはいつも革命の勝利についてゆるぎない確信をもっているかのようにだった。彼の追従者たちは、そんなかれをみるだけで、身うちに勇気がふるいおこるのを感じたものだった。毛沢東自身も、革命家はどんな場合にも前途に希望をもたなければならぬ、といひ、これを「革命的樂觀主義」とよんでいた。

だが、この一九五八年という年になってかれははじめて、国家の経済は人間を動かすようには思うようにならぬことを痛感したのだ。どうやら彼の運命は、もちまへの驛馬の気性をあらわして、その乗り手をふりおとしにかかったかみにみえた。

ことのはじまりは「人民公社」である。そもそも毛沢東の考え方は単純直截で、だれにでも否定できないような「大道理」をつみかさねて、それを卑近な実例や比喩でふみかためながら、自分の予定した結論にまでもっていくのが特徴である。フルシチョフは、こんなことをいったことがある。「毛沢東のいうことは人間は歩行するにはまず左足の前に右足をだし、しかるのち、さらに右足の前に左足を出さなければならぬ、というようなものだ。」毛が「人民公社」を考え出したのも、この持ちまへの楽観主義と単純直截の発想からだ。

毛沢東は、中国の社会主義建設についてこう考えた。中国を社会主義国にするには、大いに工業をおこななければならない。その資金をソ連が出してくれないかぎり、中国は農業の生産物を外国に売って、それを捻出するよりほかに方法はない。といっても中国の農業はおくられていて現状では大した輸出もできない。農業生産を革命的に増加させるにはどうしたらよいか。それには農業の機械化をおこない、人力と土地を、もっと能率的に使用する必要がある。だが、中国工業の現状からみれば、農業の機械化にはながい時間がかかる。その間、中国は手をこまねいていられない。中国の唯一の財産ともいえるべき豊富な人力を大動員して大いに水利事業をおこし、土地の改良によってできるだけ農

業増産をおこなわなければいけない。中国の農業は、旱魃と洪水さえ防げれば、それである程度は豊作は保証される。それゆえ水利事業はとても重要だ。こう考えたかれは、国民をこの線に沿って動かしはじめたのだ。

一九四九年から十年間に、この国でおこなわれた水利工事の量は、パナマ運河を四五〇本分掘ったのと同じだといわれている。しかもこの土木工事は、パナマ運河の建設とはちがって、もつことシヤベルの海戦術にたよるほかはなかった。一九五七年の冬から五八年の春にかけて、中国が水利事業に投下した労働力は、人口一億人以上に達した。いくら中国とはいえ、全国の農村で、農業生産に直接使用される労働力が不足してきたのも無理はない。農村では老人や婦人、子供までが、農業生産の主要なでない手になった。婦人たちはもはやめいめいの家庭のなかで、炊事や洗濯などをやっているわけにはいかなかった。農村では、共同で集団食堂、託児所、幼稚園、洗濯所をつくり、家庭の雑務から婦人を解放し、その労働力を生産に向けるという現象がおこった。こうして治水工事の中心だった河南省あたりでは、すでに数個の高級合作社（部落）が合体し、「人民公社」にちかいものがつくられるようになってきた。高級合作社時代には農民は各自の家のまわりなどの小さな畑（これを自留地という）は自分のものにとっておき、そこでできたものは自分の家で補助食料にあてていたが、人民公社となるとそんなものまで一切公社に提出して自分の田畑というものはほとんどなくなった。

「公社」というのは、中国語では共同社会ということである。人民公社とは、人民の自治的な共同

社会を意味する。公式の英訳も、ピープルズコミュニティ人民公社といつている。

もともと中国の農村には、昔から自治の共同社会の伝統が多分にのこっていた。この国の皇帝は、きわめて家父長的であり、みずから「民の父母」をもって任じていた。だが、農民たちは、充分に生活能力がある大きなせがれのようなものだった。父や母にはお小使い（税金）をあげるから、それ以上自分たちの生活には介入してもらいたくないという考え方である。かれらはその長老の指導のもとに、自分たちの村のことはすべて国の力をたよらず、自分たちの自治でやってきた。それゆえ中国のことわざに、「フオスレンナリリヤオサヤン老百姓納了糧、ヒエンシツツフアイツ便是自在王」（百姓は税さえおさめてしまえば、あとは自由きままな王様だ）というのがある。この大陸に無数に遍在する農村はそれぞれが小さな王国であり、それぞれがミクロコスモス微宇宙を形成していたのだ。

農民はたとえばその地方の河川が氾濫しそうになり、自分たちの農作物が流される危険がせまれば、一村総出で、治水工事にあたった。そしてもしもこの協同作業に加わらないような反社会的なものがあれば、村の慣習法によって私刑が加えられた。農村はこうしてかれらだけで秩序をたもってきた。

だが、こういう農村共同体の習慣が多分にのこっている中国の農村と、国家権力が最大限に介入してくる「人民公社」とは、まったく別個のものだった。後者は昔でいうなれば、農村全体の労働力が皇帝政府に徴発された状態にひとしいものである。もちろん人民政府は「人民のもの」だという毛沢東の考え方からすれば、それは国家の徴発ではない。人民が共同の目的を自覚して自分のために働いて

いることになる。努力の結果は、やがて自分にかえってくるのであるから、文句をいうすじあいではない。それゆえ一切をあげて公社のために働け、それは結局自分の利益になるのだ。これが人民公社のうたい文句になったのは当然のことだ。「人々レンレンクウエイウオウ為我、我クオウクウエイレンレン為人々」——つまり各自が自分のために働く観念をすて、人びとのために働く観念をもつこと、こうして中国人全体が、私心をすてて、いわゆる共産主義の人間になれば、中国に共産主義が実現するのは、決して遠い将来ではない。毛沢東はこう考えた。

もしも河南省でおこなわれているこの制度を全国化することができたならば、そして七億の人口が全部このように組織化されたならば、中国はたちどころに富強の国家となるにちがいない。七億の人口、これこそ世界中どこの国にもない巨大な財源である。これをフルに活用できる制度、しかもそれに軍事訓練をあたえれば中国そのものが巨大な兵営となる——。

かれはこのとき、思わずひざをたたいた。「人民公社好！」。ときに一九五八年八月、これはまさに鶴の一声だった。この八月中に、全国農業戸数の三〇・四％が人民公社に組織された。そしてその翌九月には、九八％、十二月には九九・一％、いうなれば、中国のほとんどすべての農業人口は、二万六千余の「人民公社」という名の兵営に組織されてしまったのだ。

だが、パール・バックの『大地』にえがかれているように、中国の農民にとって、土地はまさに生命そのものだ。その土地を、中国の農民の誰がいったい「自発的」に公社にひきわたすであろうか。

自分の手にのこったわずかな自留地は、それがわずかなるがゆえますます執着はつよくなる。人間がわずかの期間に、一切の「私」をすてて「公」につく、共産主義的人間にかわることができると考えられるであろうか。

当時の実際の事情は、中国人の十人のうち九人までがそれに参加したがいなかったという。そこで党幹部が農村にはいつてきて、農民大会をひらき、人民公社に参加しながらないのは、毛主席に反対する反革命分子だときめつけた。そればかりか今後個人で農業をやるなら、どんな税金がかかるか、そのとき思いしれと申しわたした。農民はこれでは「自発的」に参加を申しこまないわけにはいかなかった。こういう「自発性」（中国ではこれを「自願」といつていたが）の実体はあとからだんだんわかってきて、公然と批判されるようになった。だがその頃には全国の人民公社化はほぼ完成していたのである。

もちろん毛沢東自身は、党幹部がこんな方法で無理やりに農民を公社にひきいれているとは考えてもみなかった。専制政治のなかでは、最高権力者の命令は、各階層を通過するごとにきびしさが加わり、人民に接触する最下部まで達したときにはひどく圧力が加わるものである。かれ自身農民にたいして底ぬけの善意をもっているだけに、これがわからなかった。かれの取り巻きたちもまたかれの意にそわない真実については報告しながらなかった。

ひとつ実例をあげて説明しておこう。一九五八年八月四日毛沢東が河北省徐水県の公社を視察した

とき、随行の徐水県党委員会書記の張国忠は、その秋の收穫予想高を六十万トンと報告した。そのとき両者の間に交された次の問答を、それから間もなくおこつた食糧饑饉を頭にうかべながら、よんでみると、英明な専制君主が、なぜ愚昧な君主にしたてあげられるかがよくわかる。

そのとき毛沢東はこういった。

「そんなにたくさんの食糧を！ 県の人口は三十一万、みんなで食いきれるかね。そんなにたくさんの食糧をどうする気かね」

「あまつた食糧は機械と交換します」  
すると毛沢東は、

「ここだけが食糧が多いのではないよ。どこもかしこも食糧は多くなっている。機械と交換するといつても、誰も食糧はいらないというだろう」

「わたくしたちはイモでアルコールをつくります」

「そりやどこの県でもアルコールをつくっている。そんなにたくさんのアルコールはどこでも使いきれないだろう。アハハハッ！」

張書記も笑いにつりこまれながら、

「実のところ、私はただどうすれば多く食糧をつくることができるか、ただそれだけを考えています」



毛沢東はすかさず、

「実のところ食糧の多いのはやはりいいことだ。うんととれたら、国も食糧がいらなくなる。誰もほしがらない。そしたら社員たちでうんと食べるさ、一日に五回めしを食ってもかまわないよ」

これは同年八月十一日の人民日報にのった、毛主席の徐水県訪問記の一部でなる。当時毛沢東は真剣にこう考えていたらしい。全中国を人民公社化すれば、農村はどこも増産で、国民はすべて一日五回めしを食っても、まだ食糧があまって始末にこまるようになるというのだ。なんとという天真らんまんさであろうか。

だが真実はどんな偉人にもおもねらなかった。それから一年もたたないうちに、人民は五たびのめしが食べられるどころか、手のひらいっぱいの小麦粉が、一日の糧になったのである。当時ロンドン大学のユーキン教授は、中国民衆のとっているカロリー量を、一日一千二百カロリーと推定している。

(日本人の、昭和四〇年の摂取量は二三五三カロリー、西欧は三〇〇〇カロリー)そして一日一千二百カロリーの食物を毎日とっていると、かならず体重がへってきて、次第に衰弱死していくものだといった。事実そのころ、中国各地の農村では、水腫病による死亡率が激増していた。毛沢東は共産主義社会は天国であり、人民公社は天梯(天にのぼる梯子)だといったが、梯子は天国に達しないうちに崩壊しはじめ、人民はそのまま地獄におちつつあった。

いったいどうしてそんなことになったのであろうか。中国の歴史はじまって以来の自然の災害、早

害、水害、これに食糧饑饉の責任の一切を負わせるのは容易なことであった。だが、人民公社化運動がはじまると同時に自然災害がはじまり、人民公社化運動が緩和すると同時に自然災害もおさまるという奇妙な因果関係は、それでは説明できなかったのだ。

## 二 腹心の反対

その年一九五八年から五九年にかけては、華北の方では雨が少なく、華南の方では大雨がふった。華南では河が氾濫し、大洪水となった。これは「北旱南洪<sup>ペイハツナンホン</sup>」といって、中国ではよくある現象だが、その年の被害はとくにひどかった。農民は自分のものにならないと、いれを真剣にまもりぬこうとしなかつたからである。かれらの多くは、人民公社という新しい制度に反ばつて、働いても働かなくとも食事が保証されるのならば、要領よくやればよい、と考えるようになった。だれがいいでしたか「幹不干一斤半<sup>カンフ不干イチヤンバン</sup>」（働こうと働くまいと一斤半にはありつける）という歌がはやった。一斤半とは、そのころ農民ひとりのうける配給量である。党幹部の間では、こんなことをしていたら、中国はどうにもならなくなると、新しい制度に反対意見をもつものが多かった。だがだれも、面とむかつて毛にたいして反対するものはなかつた。毛沢東ははじめから反対の多いことは覚悟のうえだった。

「人民公社運動のような全国的な大運動に大きな困難のあることくらいは、はじめから覚悟してい

る。だからこそ、それをのりきるためには、がむしゃらな大衆運動が必要なのだ。」

かれは周囲のものに、こういって激励をあたえてはいたものの、その反対論者の中心に彭徳懐がいるといふ報告をうけたとき、はじめて事態の容易ならざること気づいた。彼は、彭が重厚で、人のしり馬にのる男ではない、それだけに自分がいったんこうと考えたら、人がなんといっても、てこでも動かないことをよく知っている。中国では、湖南省人のことを驢子りゅうず（ろば、がんこもの）とあざけているが、彭は毛とは同郷も同郷、湖南省湘潭県の「驢子」なのだ。

毛沢東は彭徳懐が朝鮮戦争でアメリカ軍と戦った経験から、軍隊は兵士の士気だけではたたかえない、どうしても近代兵器と近代戦術に通じた軍隊が必要だという意見をもってかえったことはよく知っていた。もちろん中国軍は朝鮮戦争ではアメリカ軍とよく闘った。だがその善戦は、数百万の中国人の流血によってである。圧倒的なアメリカ軍の物量には、中国人は自分たちの身体しかぶつけるものがなかったのだ。彭徳懐ははじめて経験した近代戦争と同胞の流血の異常な体験から彼なりに視野をひろげていた。「人よりも武器」だが、それはあきらかに、毛沢東の「武器よりも人」という考え方への真向からの挑戦であった。それだけでもゆるせないのに、彭徳懐はその考えをおしひろげ、経済面における人海戦術、人民公社運動にも反対しだしたというのである。これではもう放っておけなかった。

毛沢東にはいろいろすぐれた才能がある。そのひとつは、人を知り、おのれを知る才能である。こ

んなことがあった。国民党と共産党が合作して北伐をやっていた一九二五―二七年のいわゆる国共合作時代にかれは国民党の宣伝部長代理（部長は汪精衛だったが、汪は毛に一切をまかせきりだった）をやっていたことがある。そのとき同室の沈雁氷（茅盾）、蕭楚女、易礼容と一緒に忌憚のない人物批評をやっていた。毛沢東は、楚女は大衆を煽動することはできるが、教育することはできない。雁氷は大衆を教育することはできるが、組織することはできない。易礼容は組織することはできるが、指導の才能にかけている、といった。そこでみんなが、そういう君はどうなのかというと、かれは平然として、自分は大衆を組織したうえ、それを領導することができる、と涼しい顔でいったという。かれは大衆を組織し領導できる人物はそうざらにいないと思っていた。そして彭徳懐はそのような人物の人だと信じていたのだ。

彭徳懐はその経歴が示すように一流の軍人であると同時に、また一流の政治家でもあった。

毛は彭徳懐が人民公社に反対する以上、かれに同調するものがかなり多いことを覚悟しなければならなかった。案の定、同じ湖南省出身で彭と半生をともしにしてきた総参謀長黄克誠、抗日戦争中、華北のゲリラ戦で活動し、建国以来ずっと湖南省の行政にあたっていた湖南省第一書記周小舟、モスクワで軍事訓練をうけ八路軍の副参謀長をつとめた湖南生まれの鉄道部長滕代遠、江西ソヴェト時代に王明、秦邦憲とともに、毛と党委員長の地位をはりあったことのある張聞天（中央委でソ連大使をやったこともある）などが、かれの側にたっているといううわさがつたえられた。

それに陳雲、鄧小平、彭真らの態度もはっきりしていない。劉少奇と周恩来は、ともかく人民公社をやってみて、その反応をみることにしましょう、といってくれたが、かれらが確信をもっているとは考えられない。もしも彭徳懐らの反対運動が勢いにのれば、これらのなかからも同調者がでるとみななければならないまい。それゆえどんな手段をめぐらしても、今のうちにかれの反対を押しつぶさなければならぬ。運動は加速度をもってひろがれば、もう手がつけられなくなる。こう考えたと毛沢東は、時間を一刻も空費できないと思った。かれはすべて勝敗のわれ目は、刹那の断にあることを長い経験からよく知っていた。

毛沢東が彭徳懐を自宅にまねき、真正面からむきあったのは、西北風が都大路に黄塵をまきあげはじめたその年の十月のなかばであった。

彭徳懐は、故郷の湘潭にかえっていたのを電話でよびよせられたので、いささかはらをたてていた。

なぜよびつけられたのか、理由はよくわかっている。今日は激論になるかもしれないと思った。そのときの覚悟はもうできていた。一九二八年から戦場で、ともに肩をならべて闘ってきた相手の性格はわかりすぎるほどわかっていたのだ。

かれはときには、毛沢東のなかにまったく性格のちがう二人の人間が住んでいるのではないかとさえ思っていた。その一人は、残忍で我欲がつよく、いったん目をつけたものはどんなことをしても

手にいれなければやまない、我執のつよい、世俗的な人物だった。もうひとり、それとは反対に、思いやりが深く、ひたすら理想の追求によるこびを感じる、清教徒のような人物であった。

この二人は、ふだんは毛沢東という人間の内部でじっくり調和し、お互いにおぎない合っているが、ときとしては両者がぶつかりあって、外部に破たんをあらわす。そんなときの毛沢東は別人のように、おこりっぽく、残忍な人間にかわってしまふ。

毛にこういう性格を感じているのは、かれだけではなかった。ある人はこの二つの要素を忍レと狼ヲという文字で表現してこういつている。忍は「辱を忍び羞を包む」ことだ。毛沢東は、相手の力が強くて勝目がないときは、その下に屈服し、不満の気持を腹におさめて、だまって自分の力を養う。だが、自分が相手より強くなったとみると、がぜん攻勢に転じ、相手が同志であろうとなんであろうと、とことんまでやっつけて昔のうらみをはらす。これが「忍」から「狼」への転化だ。(周鯨文『風暴十年』)

ある人というのは、民主同盟(中国の民主政党的ひとつである)の秘書長周鯨文で、この東北生まれのジャーナリストは、さらに、「忍の工夫がやれる政治家は、その性格のうちに陰柔なものがある。それゆえにこそ狼のほうが、人に気づかれずにすむ。王明ワンミン(後出、一九三〇年代毛沢東と対立した中国共産党主席)は性急で本心をすぐ外に露出する性格であった。毛沢東はこれに反し、陰柔の性格だ」とつけ加えている。

毛の家族関係をよく知っている人なら、おそらく即座に、権力への我執の強さは父親からで、理想への献身は母親ゆずりだというであろう。かれの父毛仁生は、貧農から金をためて富農になったと、毛沢東はスノーに語っているが、この話はすこぶるまゆづばいものである。いったい中国の貧農が、地主に地代をはらい五人の家族を養いながら、土地を買う金などためられるものではない。この国では、地代がべらぼうに高いのに、農作物と労働報酬はひどく安いのだ。毛仁生は農業の方は家族にまかせて、自分は米の商売に身をいれ、儲けた金で高利貸をやっていたのだ。

かれは原始蓄積時代の資本家の特徴として、貧農や雇人、つまり自分の目下のものにはものすごく苛酷な主人であった。これに反し、かれの母親は、目下のものにもやさしい、信心ぶかい仏教徒だった。その名を文其美という地主階級出身のこの母について、毛沢東自身はこうかたっている。

「私の母はやさしい女で、寛大で情け深く、いつでも持っているものをわけ与えました。母は貧乏人を憐れみ、かれらが饑饉のあいだに米を乞いにくれば、よく与えていました。けれども父のいるときはそうすることはできませんでした。父は慈善には不賛成で、私たちはこの問題について、家のなかで何度も争いました」(E・スノウ『中国の赤い星』)

家庭のなかの争議では、家族はいつも母のまわりにあつまって、父と抗争した。かれの性格の矛盾は、おそらくかれの身内にある父母の遺伝因子の対立からきたものであろう。毛の若い頃、かれの周囲によく青年たちがあつまったのは、かれに、かれの母の「寛大で情け深く、いつももっているもの

を分けあたえる」性格がつよくあらわれていたからにちがいない。だがときには支配欲のつよい毛仁生が顔をだした。そんなとき毛沢東はまったく別人のようになる。かれが権力の座につくようになってからは父親の性格がだんだんつよくあらわれてきたようだ。

彭徳懷は毛沢東が最近非常におこりつぽくなっていることを知っていた。おそらく毛自身も経済がかれの命令通りに動かないことに腹をたてていたのだろう、と思っていた。しかし彭はそんなことは少しも気にならなかった。今彼の目の前に坐っている男は、ほかの人には「毛主席」かもしれないが、かれにとってはやはり「老毛」(老は親友、同志の呼称)だったのだ。かれは人民公社についての自分の行動を知っているだけに、頭からどなられることは覚悟していた。

だが毛沢東がいかにまさりげなくきりだしたのは、台湾問題だった。言葉もいつも通りの親しげな口調だった。

「老彭、君は国民党軍のなかにも、昔なじみが多いから、ひとつ君の名前でこういうものを発表してもらいたいんだ！」

明らかに毛が自分で書いたとみられる原稿紙が、彭の前におかれた。「再び台湾同胞に告ぐる書」という題名が目にはいる。それはお互いに同じ中国人だ、ふるい感情をすててこの際もういちど国共合作しようじゃないかという内容だった。

彭は毛がまた例の手を使うなと思った。「敵のまわりをとりまいて、隙があつたらすぐ突っこめ、



その一撃で一カ所が突破できたら、そこを全面的に攻撃しろ」毛はこの手をよくつかった。かれははじめは決して相手にほんとうの目標を示さなかった。彭がこれにだまって署名することは、なんの変わつもないことである。だが、それには明らかにうらがあつた。彭はこう考えた。自分が人民公社について、反対していることが知れわたっている今日、もしこれに署名すれば、かれは毛と妥協して、反対論をひっこめてしまったととられる。そうなれば黄克誠や周小舟は、もはや自分についてはこない。これは「再び台湾同胞に告ぐる書」ではなく、実はそれを「国民に告ぐる書」なのだ。そんなものに署名できるもんか。だが署名しなければ、君は蔣介石に義理のわるいすじでもあるのか、とすぐつっこんでくるにちがいない。

彭徳懐はどうとう問題をこちらからきり出さなければならなくなつたと思つた。緒戦はあきらかに毛のペースで戦わざるをえなくなつた。彭はおだやかな口調でいつた。「その問題についてお答えする前に、もっと重要な問題について、私の意見をきいていただきたいのです。」かれはこう前おきし、充分言葉に気をつけながら、人民公社運動についての自分の考えをはなしだした。

農民たちはいま、家畜や農具が人民公社に「没収」されると考えている。なかには大急ぎで自分の家の豚や鶏を殺してたべているものもある。人民公社がどんなものかが農民にわからないうちに、公社化はどんどんすすめられている。したがって、こういうことになるのは当然なのだ。現状ではまだ人民公社は時期尚早だ。軍隊で兵士ばかり大ぜい集めても、武器がゆきわたらなければ、力に

はならない。生産もそれと同じだ。農業機械もないのに、耕地面積ばかり大きくひろげても無意味ではないか。軍隊組織は兵器によって、構造も大きさもちがってくる。農業生産もそれと同じだ。組織ばかり大きく広げても、それに配する農業機械や器具がなかったら、かえって生産をおとしてしまう。「こんなことはすぐにおやめください。こんなことをしていると、あなたにとっても大へんことになりませよ。」

この最後の言葉は、毛沢東には「これはお前の命とりになるぞ」と、警告するかのように聞えた。さっと毛の顔色が変わった。劉少奇や周恩来ならば、同じことをいうにしても、もっとうまい言葉がえらべたはずである。だが子供のときから坑夫、土方の仲間にはいり、そのまま軍人の社会で成長した一本調子なこの將軍には、たとえその気持はあっても、表現の言葉がみつからない。これがかれのせいいっぱいという言葉だった。毛沢東のなかの毛仁生が激怒した。かれの顔色は変ったが、言葉はかえっていいいになった。どうやらかれの身内のなかで文其美が毛仁生をとめようとしがみついている様子だった。

「貴方が軍隊のことで言われたから、私も軍隊のことでお話ししましょう。戦争では武器はたしかに重要なものです。だが勝敗を決するものは人であって、武器ではないのです。こんなことはお互いがこれまでやってきた、革命戦争の実践が、何百回となく証明しているじゃないですか。農業生産はおっしゃるとおり、もちろん戦争です。ここでは土地や農業機械や、種子、肥料が武器なのです。だが

これらの武器を手にとって戦っているのは、農民じゃないですか。つまり私の言いたいのは、武器よりも人間ということですよ。私はこんどの旅行で、同じような生産条件をもつ人民公社や、生産隊と、もうひとつの人民公社、生産隊のあいだで、農民の自覚の程度がちがうと、生産の上に乗ったくちがった結果があらわれている実例をたくさん見えています。あんたは現状、現状というが、これも現状なんです。人民公社というのは、結局こういう農民の自覚を高める制度なんだ。いったいどこに反対することがあるんだ！」

毛沢東の言葉はだんだん乱暴になってきた。毛仁生が文其美の手をはらいのけて、あばれだしたらしい。

「君は現状とか客観条件とか言っているが、現状には色々あるよ。たくさんある現状のなかから、どういふ現状をえらびだすか、それは、結局主観の問題なんだ。君自身のイデオロギーの問題なんだ。現状がこうだからとでもできないとなげてしまうのは、人間の主観的能动性を無視した考え方なんだ。現状のなかに人民公社をうけいれないものがあつたら、どうしたら、うけいれさせることができるか。まずそれをさがすことがわれわれの問題じゃないか。そんな努力もしないで、人民公社が現状では早すぎるなどという君の階級性をうたがいたくなるよ。」

彭徳懐はだまってしまった。だが決して納得したわけではない。毛沢東がこういうふうにはると、だれがなんと言おうとも耳をかさないことをよく知っていたからだ。ただ心のなかでは、なんど

となくつぶやいていた。

「君に農民の現状や、ほんとの気持ちなどがわかるもんか。旅行したさきさきで、君が出会った農民の話を、そのままにうけとっていたら、君はいまにとんでもないことになるぞ。」

### 三 かけひき

毛沢東は、勢力関係について、もぢまへの敏感さで、彭徳懐の追放をただちに党議にかけることをさせた。人民公社にたいする公然たる反対者は、彭徳懐一派だけかもしれないが、潜在的反対者は決して少なくあるまい。党議にかけて、意見をたたかわすことになれば、劉少奇、鄧小平、彭真、陳雲などもどう変わるかわからない。全般の状況がそうなれば、周恩来の態度もあやしくなる。かれらが合流すれば大へんなことだ。それをさけるためには、事前に彭徳懐の声望をおとしておいて、かれだけを孤立化させなければいけないと思った。

それから間もなく、「反右傾派闘争」という名の大衆運動が、鳴物いりで展開された。これはあとで説明する「百家争鳴」につづいておこった「反右派闘争」につづく運動だった。しかし内容は少しちがう。反右派闘争は党外のインテリを対象としたが、これは党内の「大躍進」反対派を対象にして彭いた。この運動の場合は、だれが右傾派の中心人物であるかは、大衆には知らされなかった。それが

徳懐だとわかれば、それでなくても人民公社運動に反対している兵士や農民が勢いづいて、かえってやぶへびになると考えたからであろう。しかし黨員のあいだには、彭徳懐をこっぴどく中傷したパンフレットがひそかに配布された。

これは重要な文献であるから、さきに出所を明らかにしておこう。一九六〇年の六月、二人の中国人が逃亡して、台湾の国民政府側に保護を求めてきた。ひとりはカイロ駐在「新華社」社員チヤンケエイリンの姜桂林、もうひとりは雲南国境からラオスに逃亡してきた昆明军区思茅辺防部隊政治指導員ツンチイム宋大樓で、いずれも中国共産党の中級幹部だった。かれらの話によると、この頃（五八年）党内ではしばしば学習会議がひらかれ、彭徳懐反対キャンペーンがひろくおこなわれたという。そこでつかわれた、毛が自分で書いたというパンフレットが、この『彭徳懐の六つの面皮をひっぱがせ』である。内容はつぎのように憎悪の感情がむき出しになったものだった。

一 彭は「平江暴動」ピンチヤンをおこした革命家だというが、本質は日和見主義の投機者だ。かれはもともと皇帝思想をもっていたが、国民党にいたのでは、その野望が達せられないのを知って、共産党に走ったのだ。われわれはまずかれのこの革命家皮をひっぱがそう！

二 彭は延安をまもりぬいた「功臣皮」グンチンをしている。だが延安防衛の成功は毛主席の指揮があったればこそで、それがなかったなら、かれはとっくに国民党軍にとらえられていたのだ。それにもかかわらずかれは恬として恥をしらず、功臣皮グンチンをしている。

三 彭は朝鮮戦争では「国際英雄皮<sup>づも</sup>」をしていた。だが朝鮮戦争の戦略は、すべて毛主席がたてられたものである。かれはただそのなかで動いたにすぎない。

四 彭は金門砲撃の「猛将皮<sup>づも</sup>」をしている。だが金門砲撃のときにはかれはまったく前線にでなかつた。あの砲撃は毛主席みずから指揮をとつたものである。それにもかかわらず、国際的にはかれがこの戦線を指揮した猛将のように考えられている。この真相を明らかにし、かれの「猛将皮<sup>づも</sup>」をひっぱがそう！

五 かれは金門戦争の最中、「国防部長彭德懷」の名義で、「台湾同胞に告ぐるの書」を発表し、軍人であるとともに、ひとかどの政治家皮<sup>づも</sup>をしていた。だがこの文章は毛主席みずから起草されたもので、かれはまったくあずかりしらないものだ。この政治家皮<sup>づも</sup>をかれからひっぱがそう！

六 彭にはもうひとつ「刻苦皮<sup>づも</sup>」がある。かれはまだ結婚もせず、質素な生活をおくっているといわれている。これは馮玉祥（クリスチャン・ジエネラルといわれ国民革命の時兵士と同じ質素な生活をした）の場合と同じように、まったくでたらめだ。かれは結婚してはいないが、丁玲（スターリン賞作家）と関係している。生活は表面は質素だが、裏にまわればぜいたくのかぎりをつくしている。彼のこの刻苦皮<sup>づも</sup>をひっぱがそう！

ここに書かれていることは、ふるくからかれをよく知っているものには、すぐに根も葉もないでたらめであることがわかる。だがかれをよく知らない、新しい党員をまどわせるには充分である。たと

え全部でないまでも、大部分は真実だと思わせるものがあつたからだ。なかでも傑作は「政治家皮<sup>づら</sup>」だ。

「台湾同胞に告ぐるの書」は、毛沢東が自分で書いて、勝手に国防部長彭徳懐の名で発表しておいて、こんどはそれを逆用して、彭徳懐の鉄面皮を証明する材料としたのだ。幾度となく危地から自分をすくってくれた同郷の友にたいして、こういう卑劣な手段をもちいることに、かれは、はたしてうしろめたさを感じなかつたであろうか。

かれは以前から彭徳懐が、自分と同じように大衆をひきつける不思議な力の持主であることをよく知っていた。朱徳などはこの点では問題ではない。劉少奇や周恩来にも、もちろんその周囲に人を集める力はある。しかし、かれらには、かれらのためにいつでも死のうという人はいない。彭にはそれがあるのだ。彭は劉や周とちがつて親分的なところがあり、この人と一緒なら死んでもよいという、強い共感を周囲の人にいだかせるものがあつた。それにプラス反骨である。これはあぶない。

こういう男は、自分がしっかり把握できるあいだは貴重な武器だが、把握できないとわかれば、すぐ破壊してしまった方がよい。この強力な爆発物は、自然発火するおそれがあるばかりでなく、もしもかれの権威にいどむもの手にわたれば、大へんな事態になる。毛はそれゆえ彭をすぐ捕殺するか、それが不可能なら、少なくともその政治的生命だけはうばっておかなければ、安心できない。それに毛沢東は湖南人の執念ぶかさをよく知っていたので、彭をやつつけるなら、蛇のなま殺しでな

く、徹底的にやっつけなければならぬとおもった。こうして昔からの親友にたいする「悪らつ」と形容したいような人身攻撃がはじまったのだ。

毛沢東の彭徳懐排撃にはもうひとつの目的があった。かれは劉少奇、周恩来、陳雲、彭真、鄧小平らが、真正面から自分には反対しないが、人民公社について、自分のイメージを、すこしずつこわそうとしていることに気づいていた。かれらは、彭徳懐がよく直言してくれたと、心ひそかに拍手をおくっているのではないか。こういうときには、自分に反抗した彭を、みんなのみせしめに、こっぴどく罰し、かれらをふるえあがらせておく必要がある。この必要の前には、人情などは問題ではない。それが階級闘争の法則なのだ。

これが毛の、彭にたいするひどいしうち、のうらにあつた思惑だつたかもしれない。だが権力闘争でもみぬかれて、狡猾さに見がきのかかっている劉少奇、その他の党首脳者は、彭の直情径行とはちがつた彼らなりの闘争方法を知っていた。かれらは毛が、はたからどんなに言つても、人民公社のイメージを改めようとしなないので、正面からぶつかるとはしなかつた。かれらは実践の面で少しづつその内容をかえていき、結局、毛のイメージとは別個のものにつくりあげようとしたのだ。

毛沢東の弱点は、数字のはいつた経済問題だつた。子供のときから数学と外国語は苦手だつたらしい。かれといっしょに長沙の第一師範学校で、学生生活をともにした蕭瑜（本名肅旭東、湖南省湘郷生



まれ、ジュネーブ中国国際図書館長は、「かれは勉強家だったが、課目のなかで人びとにひけをとらないのは、作文だけで、英語や数学はさっぱりだった。」（蕭瑜著『毛沢東と私は乞食だった』）と言っている。かれらは毛のこの弱点につけこんだ。人民公社制を、おおせのとおり実行いたしました、ところが、こういう結果があらわれましたから、ここをこう直し、あそこを改めなければなりませんと、具体的問題で少しずつ、自分たちの方向に手直しを加えていった。

だいたい毛沢東のイメージどおりの人民公社制を決議したのは、一九五八年八月、北戴河で開催された党政治局拡大会議だった。だがそれが同年十一月の鄭州会議をへて、十二月の武漢の六中全会の決議になると、人民公社のありようは、毛沢東の考えた原形とはまるでかわったものになってしまった。

その席上、劉少奇、周恩来、彭真、鄧小平など、党の実務にあかるい人びとが、各地方から集まった人民公社の実状にまつわる悲観的なデータをつきつけて、毛沢東のイメージを根本的にくつがえしてしまったのだ。

毛沢東の考えた人民公社は、なによりもまずだれもが食べられるということを主眼においた。これは毛沢東自身気づいていないかもしれないが、おそらくかれが若いときにおさめた儒教の影響がはたらいっていたにちがいない。孔子も孟子も堯、舜という、伝説の聖王に託して「先王の道」ということを、為政者の理想として説いている。「堯心を天下に存し、一民の饑ゆるあらば、則ち曰く、これ我

これを饑えしめたるなり、一民の寒ゆるものあらば、則ち曰く、我これを寒えしめたるなり、一民罪あらば則ち曰く、我これを陥れたるなりと。」（『説苑君道』）これが儒教の伝統的な理想社会であった。

毛沢東の第一師範学校時代の恩師であり岳父でもある楊昌濟（楊懷中）は宋明の理学の泰斗であった。宋明理学はいろいろな流派があるが、その特徴はみな自分の心のなかには宇宙があり、理（宇宙の真理）があるから私慾を去ってその理につくことが天地の大道理を実現するゆえんだと説いていることである。その代表的な学者のひとり陸象山（一一三九—一九二二）はこういつている。

「四方上下を宇といい、往古來今を宙という。宇宙はすなわちこれが吾が心、吾が心はすなわちこれ宇宙。千万世の前に聖人出ずるあるもこの心を同じくしこの理を同じくす……。」

毛沢東思想ではこの「理」が「公」となり、「私」心はどんな場合にも「公」に従属しなければならず、「私」は「公」のために犠牲となるべきものと考えられている。

王陽明（一四七二年—一五二八年）になると「理」の上になつた理想社会がきわめて具体的にえがかれるようになった。かれはいう。

「私欲功利の念のない人間の集団では、自他遠近の区別がなく、みな親子兄弟の親愛感をもち、天下は一家の如く、同心一徳で異見異習がない。徳行を務めて知見を争わず、各目の能力と性質に応じて、職業仕事を分担する。地位は平等で上下の差別がなく、立身出世を願わず、生涯好む仕事に従事

し、全体のために奉仕して自己の利益を求めることがない。」

王陽明はこの理想社会は学問を改革し己私功利の念を去ることによって実現できると考えた。これは社会主義教育によって「破私立公」(破<sup>ボ</sup>私<sup>シ</sup>立<sup>リ</sup>公<sup>コウ</sup>) (一切の私心をさつて公、すなわち社会に奉仕する) すれば、共産主義社会ができるという毛沢東の考え方となんとよく似ていることであろうか。こういう毛沢東には労働の分量に応じて報酬を払う社会主義の賃銀原則がいかに物質的に、いかにも「ブルジョアの」に見えたのも無理はない。

中国でもしもソ連のような賃金原則がおこなわれれば、一方では暖衣飽食する人びとがあるかと思うと一方では働いても食えない人びとが街<sup>ちまた</sup>にみちあふれる。そうなれば中国ではまた革命をおこなうければならない。中国には中国のやり方がある。それが「一民の饑ゆるもの、一民の寒<sup>ひや</sup>ゆるもの」もないようにする人民公社制度なのだとかれは考えた。それゆえ当初の人民公社の賃金制度では、労働の分量にかかわらず、実物で支給する部分が八割で、賃金として貨幣で支払う部分はわずか二割にすぎなかった。それは労働の分量の多寡にかかわらず、人びとは一定の生活を保証されたが、その半面、どんなに努力しても各人の衣食住の内容はほとんど変わらないということになれば普通の人間ははたらかなくなる。

それゆえ人間をはたらかせるためには、かれらを教育して、私心をすて社会のために献身する、共産主義的人格をつくりださなければならぬ。つまり生産を増加するためには物質的な刺激<sup>インセンティブ</sup>にたよ

らず精神的な刺激にたよれ、というのが、毛沢東思想をつらぬくふとい線だった。いかにも毛沢東らしい楽観主義である。これにたいして劉少奇、彭真、陳雲などをもっと現実的な考えをもっていた。かれらは、人間というものは簡単に共産主義の人間にかわるものではないと考えた。ソ連の経験を尊重して、人間が共産主義的性格をもつためには、まず社会主義によって物質の豊富な世界を経過しなければならぬ。それまではやはり能力に応じて分配する物質的インセンティブによらなければ生産は増加しない。生産が増加しなければ、共産主義への道はかえって遠くなるのではないかと主張した。毛沢東はかならずしもかれらの説に屈服したわけではないが、現実には生産が低下しているデータをつきつけられ、かれらにおしきられてしまった。その結果、六中全会で通過した「人民公社のいくつかの問題についての決議」はこううたっている。

「共産主義の原則は、『各人はその能力に応じて働き、その必要に応じて分配されることである』……しかしこれは社会の生産物がきわめて豊富になって、はじめて実現することができるのだ。その条件がないのに、労働に応じて分配するという原則を否定するならば、たちまちひとびとの労働意欲をさまたげ、生産の発展に不利となり、社会の生産物の増加に不利となり、社会主義の実現に不利となるであろう。」

これはあきらかに劉少奇側の考え方であり、歴然たる毛沢東の敗北だった。とうとうこの会議では彭德懷追放は提案できず、「面皮」をはがれたものは、かえって毛沢東の方だった。

四 三・三制

この六中全会における事実上の敗北が、毛沢東にひどい屈辱感をあたえたであろうことはこれまでも充分考えられたが、その輪郭がどんなものかは、ただ想像の範囲をでなかった。ところが一九六七年の一月五日、北京にあらわれた壁新聞の報道で、はしなくもこういうことがわかった。

「毛沢東は昨年十月二十四日の党中央の情報交換会議で、『一九五八年末武昌で開かれた第六回中央委員会総会は不満だったが、会議の水準が高すぎて、私としてはどうしようもなかった』と述べ、五九年いらいいままで鄧小平総書記は、私になにも相談せず、かれのところは、独立王国になっていると怒りをぶちまけた。」

この報道は、すでに公開されている諸事実からみて、おそらく真実であろう。「この会議の水準が高すぎて、私にはどうしようもなかった」というかれのこの言葉はひじょうに面白い。六中全会で、劉少奇、彭真、鄧小平などが、毛のにが手の数字をあげながら、やんわりと、しかし有無をいわさず毛沢東に、譲歩をせまったありさまが目につかぶようだ。毛沢東はこの会議に不満だったかもしれないが、実のところ劉少奇らは、だれひとりとして、毛沢東の政治的失脚をのぞんではいなかった。かれが国民のあいだに保持している声望は、やはりかれら全体にとって貴重な財産だった。

現実的なかれらは、いま中国共産党が国民のあいだにどんなに評判がわるいかをよく知っている。一年前の一九五七年、「百花斉放」でわずか二カ月間ではあったが、自由な言論が許されたとき共産党の横暴にたいする非難の声がたかくあがった。そのうえにいま「大躍進」の失敗から民衆の間に不平がみちみちていた。毛沢東の声望という支柱を失ったとしたら、中国共産党は国民の不満の圧力で、倒れてしまうおそれもあった。だからかれらは、彭徳懷には同情できるが、同調はしなかったのだ。かれらはただ、毛沢東を、人民公社とともに「たなあげ」にすること、それもたかい神棚に祭りあげてしまうことだけを考えていた。

もともと毛沢東は、ある意味でははじめから「生き神様」だった。中国共産党では、どういうグループが優勢になっても、その勝利を固めるためには、かれの護符をいただくことが絶対に必要だった。いふならば、毛沢東はすでに、かつての日本の天皇のような存在となっていた。ただそれとちがうところは、毛は政治の実権からはなれて、おとなしく祭りあげられていることに決して満足せず、大いに発言し、率先指導したがることである。ともかく全国民、とくに血の気の多い青年層にとって、は生き神様なのだから、その一言一句が追隨者には至上命令となり、しばしば常軌を逸した大衆運動をひきおこし政治局面にあらしをまきおこす。大躍進運動、人民公社化運動の暴走もそれだったのだ。

劉少奇らが六中全会で、一番心をくだいたのはこの点だ。いわゆる「三・三制」という毛沢東の理想をことさらにこの決議の中に入れたのは、こういう配慮からであった。その決議文はこう言っている。

「ここ幾年かのあいだに、いまの農作物の作付面積を次第に減らし、たとえば三分の一前後にして、残りの土地の一部は休ませ、牧草や緑肥作物を植え、他の一部の土地には植樹や造林をおこない、貯水池をつくって水を貯わえ、平地や、山上、水面には、いずれも色とりどりの観賞植物を大々的に植え、大地を園林化するよう努力すべきだ。

こうすれば、一つには農地で大いに水を節約し、肥料を節約し、労働を節約することができるばかりでなく、地力を大々的にますことになり、二つには山水草木の利を大いに興し、農業、林業、畜産業、副業、漁業の総合経営を大々的に発展させることができる。三つには、自然の環境を改造して全中国を美化することができる。」

なんのことはない、中世ヨーロッパで行なわれた「三圃農法」のアイデアである。肥料のたりない中世の農業は、耕地を三つにわけ、それを順ぐりに小麦、休耕、豆類の順序で植えつけていた。小麦耕作で失った地力を休耕と、豆類の栽培で回復させるという方法だ。人口が少なく、土地のありあまた中世ヨーロッパならともかく、現在十六億畝といわれている全国の耕地をフルに活用しても、食料生産が間に合わないというこの国が、「ここ数年間で」三分の一の作付けで、食料が間に合うようになるというのである。

ここでこのような非科学的なアイデアを六中全会で採用するにいたった中国の事情をちよつと説明しよう。

中国では建国と同時に土地改革が全面的におこなわれ、貧農は、山海関以南ではひとりあたり三畝、日本の二反弱ゴクくらいゴクの土地をわけてもらった。いくら中国の農民でも、二反弱の農地だけを耕やしていたのでは食べてゆけない。そこで毛沢東は、農民たちに土地を合せて合作社をつくらせ、農業機械を使用させて、節約した労働力を他の産業にふりむけようとした。このアイデアは、理論としてはまったく正しいのだが、問題は中国の工業力である。合作社をつくったのはいいが、それに配する機械力がなければ、合作化の意味はない。農民を合作社に組織すれば、個人経営の場合よりも、生産意欲が減少することも考えられる。それゆえ農業合作化のテンポについては、一九五二年から党内で、二つの見解が対立した。

一つの派は、農業合作化は機械化と歩調を合わせなければ無意味だと主張した。これは劉少奇が中心で、その当時、かれとはりあっていた高崗も、かれと同じ主張だった。それにたいして、機械化よりもまず合作がさきである。機械生産をまっけて、合作化をおこたれば、その間に農村には資本主義が復活する。ともかく合作、合作とせきたてたのは、いうまでもなく毛沢東だった。このときはまだ、なにもかも「ソ連一辺倒」の時代であり、そのソ連が、この問題では劉少奇、高崗と同じ意見であることがわかったので、毛沢東はやむをえず自分の意見を撤回した。その結果、ソ連の経験をとりにて、十八年の年月をかけて、合作社を完成するという気のながいプランがたてられた。

だが、それでひっこんでいる毛沢東ではない。かれは党会議では自分の主張が通らないとみると、



こんどはあらゆる機会と自分の声望を利用して、かげから合作化をあおりたてた。これをだれが制止できようか。

そのために、気ながにやるはずの農村合作化はだんだん気みじかになってきた。毛沢東の意向を知った農村の若い党幹部たち——そのころの紅衛兵と思えばよい——は、農民をおどしつけて、無理やりに合作社に参加させはじめた。どんな方法がとられたかは、一九五三年一月二十一日の人民日報のつぎの記事にあきらかである。

「河北省大名五区提上村の岳鳳山合作社で、社員の増加運動をおこしたとき、村の幹部は農民をあつめて、『合作社に参加したくないというやつは、地主、富農、資産階級の道を行こうとしているものだ』とどなりつけた。」

こういうゆきすぎは、表面では批判をうけたが、実際には、そうでもしなければ人が集まらなかったからだ。その結果、内容のない、有名無実な合作社がやたらに増加した。劉少奇や党の農村工作部長鄧子恢などは、これは所定の方針に反し、合作化があまりに早すぎるとして、一九五五年七月、全国の合作社の三分の一、約二十万を解散させようとせまった。

これをだまってみている毛沢東ではない。かれはただちに、自ら党規と慣例を無視して、各省市地区委員会書記会議を召集し、その席上で、声を荒げて党中央を攻撃した。

「いま、ソ連の経験をとりにいれて、合作社のテンポをおくらせようとしているものは教条主義者で

ある。かれらは纏足した婦人のように、よちよち歩くばかりで、前門の狼をおそれ、後門の虎をおそれて右往左往している。」

この一喝で、党内の風向きはいっぺんに変わってしまった。さすがに劉少奇はどうにもならなかったが、当面の責任者鄧子恢はやめさせられた。こんどの紅衛兵さわぎで、劉少奇はこの事件について、こう自己批判させられている。

「一九五五年鄧子恢同志が農業合作社を二十万減少させる計画を提出したが、私は党中央会議の責任者でありながら、それに反対せず、事実上かれの計画を認可しました。」ここにあわれをとどめたのは鄧子恢で、かれはただ党中央の議決を執行しただけで、やめさせられてしまった。中国共産党は、黨員一千七百万を擁しながら、党の決定をまったく無視した毛の横がみやぶりの前にただ平身低頭するだけだった。その結果、合作社の数が急増したばかりでなくその組織も高級化した。一九五五年上半期、全国にわずか四つしかなかった高級合作社は、翌五六年末には、全農家の八七・八%までが、それに組織されてしまったのだ。その間農民にたいして、どんな強制的な方法がとられたかは想像にあまりがある。ともかく農民を、無理やりに合作社のなかにおしこむやりかたに、反対するものは、うむをいわさず「右派」にされてしまった。

この農業合作化を急いだ毛沢東の考え方のなかには、生産関係をまず政治的に変革し、生産力の向上をあとからそれに追いつかせようとするマルクス主義の理論を逆行した考え方があったようだ。マ

ルクス主義理論では社会の物質的生産力が発達してきて、一定の段階に達すると、その生産力がそのなかで活動していた生産関係と矛盾し、そこではじめて従来の生産関係——所有関係が社会発展の障害となるので、人間がそれを改めざるをえなくなるわけである。これを農業合作化の問題にあてはめてみると、農業の機械化がすすんでくれば、耕地のせまい個人経営農や初級合作社では採算が合わなくなるから、そこではじめて高級合作社とか国营農業とかいうような形態が考えられるわけである。劉少奇の考え方がまさにそれなのだ。

毛沢東の方は生産力の発達が政治を動かす原動力であることを認めない、政治こそ生産力を発展させる原動力だと考えている。そのためにかれは政治指導第一主義（政治掛帥）ということを出した。経済法則からみてとてもできそうもない生産命令でも、政治指導によって大衆の力を結集することができれば可能になる。いふなれば、政治教育——毛沢東思想の徹底化——こそあらゆる問題を解決する鍵だという考え方は、このころから形成されつつあったのだ。

毛沢東は、一九五七年急テンポな農業合作化に成功した勢いをかりて、こんどは農業生産を急速に増加させようとした。合作社がこのように飛躍したのに、農業生産の方はいっこうに飛躍しないのは、はなはだ不都合である。これは右傾保守思想のサボタージュではないか。合作社の幹部たちはこゝういわれてしきりに上部機関からせめたてられた。もちろんかれらは農業生産をあげるためにあらゆる手をうった。ともかく実績があがらなければ「反党分子」として清算されるかもしれないから気が

気ではなかった。

そのうちにだれかが、「深耕密植」という農産増収の革命的方法があるととなえだした。それは、土を三尺も深くほって、稲を土がみえないほどに密植すると、一反歩あたり四百石の収穫があるというのだ。ご承知のように、米作日本一の反当り収穫は六石台であるが、その六十六倍もとれるというのであるから、各地で争ってこの方法を実験した。ともかく「大を好み功を喜ぶ」時代だったから、たちまち全国各地から勝報があがった。たとえば広西省環江では、一畝あたり十三万四百斤(反収五百三十六石)、湖北省麻県では一・一八畝から十一万八千斤(反収四百石)というように。

多少でも合理的にものを考えるひとには、到底信じられる数字ではないが、これにたいしていささかでもうたがいをいだくものは、中国では右傾分子となり、反党分子といわれる、となると話は別である。そんなことはデマだという人はとやかかくいうまゝに、人民日報の次の記事をみたほうがよい。

「一部の富農、中農、老農、少数の科学技術者は、『高度密植するとムダになるものが非常に多くなる』『高度密植は草はのびるが粒は育たない』と言ひ、いたるところで痛い点をほじくり出し、苦心して高度密植を否定しようとしている。……若干の保守派は『高度密植は失敗すること疑いない』とみている。いまや促進派と促退派とは鋭い闘いをおこなっている。」(一九五八年十月十五日人民日報)

馮平論文

そのころ日本から現地にのりこんだ大学教授や新聞記者まで、「これは世界農業の一大発見だ」とさ

わぎだした。そのころ出版された日中友好協会、全日本農民組合連合会の共同編集になるパンフレット、「中国農業の大増産」には、湖北省麻県の現地で、ほんとにその奇跡をまのあたりに見たという、ある大学教授の談話が写真入りでのつている。

「その稲の上へのぼって足ぶみしてもビクともしないのです。これにはおどろきました。一坪あたりの株数はどうかと思って見ても、よく見わけられないくらいギッシリなんです。収量はどうかという、この一・一八華畝で十一万八千斤（粳）、粳摺歩合を七・八%として、玄米に換算し、一華畝が日本の六・七畝だから、反あたりになおすと約四百石ということになります。この收穫高ですが、何しろ大変な出来なんです。各方面からたくさん參觀者がきて、みんなの目で見ている目の前で、刈り取って計ったというのですから、まちがいのない信じてよい数字です。」

当時日本でさえ、こういう宣伝が大手をふっていたくらいであるから、中国の有様は想像にかたかない。こういう宦官の中国皇帝への奏上文のような報告が、全国各地から毛沢東のもとにわんさと集まったのであるから、かれの本来の革命的樂觀主義はいやおうなくふくれあがらざるをえない。毛沢東は、これはまさに農業の画期的革命だ。これこそ中国が全世界に打ちあげた衛<sup>スターニク</sup>星だ。（これから「衛星田」という言葉がうまれた）これを広い面積で採用するならば、作付面積はいまの三分の一にしても、食糧生産は七億の人口を養ってなお十分あまりが出る。のこった三分の二を休耕地や花園にしつらえ、全国土を公園のようにすることもできると考えた。これが「大面積高産田方式」「三・三制」と

よばれるものであった。

この夢のような毛沢東の理想をのせた「深耕密植」の方は結末はどうなったであろうか。これが成功していけば、あるいは「大躍進」も成功したかもしれない。ところが、どうしたことか、それはいつの間にか、この世から姿を消してしまい、日本はもちろん、中国でも誰ひとりそれを口にするものがいなくなつた。それもそのはず、世界史はじまって以来の大豊収をあげたといういわゆる「衛星田」なるものは、もともと存在しなかつたのだ。それは、ただ大豊収の数字を発表しただけで、その実収はなく、なかにはほかの田の穂をつけた株までひとつの田にもちこんで密植のさまをつくるという手のこんだ詐術までやって、数字をつくり出したものもあつた。

一九六二年大陸の食糧饑饉で中国から香港に多くの難民が流れこんできたが、そのなかに、広東省連興人民公社の下級幹部がいた。かれは当時六万斤の大豊収をあげたと大きく宣伝されたこの公社の衛星田についてこうかたっている。

「連興は広東省北部の山間にあつて、土地はやせており、交通も不便だつた。当時上級の党委員は単位面積当たりの生産量をどこまでも引きあげて農村の『保守思想』を打破しなければならぬと強調した。そして、広東省内では、たんに珠江のデルタ地帯で一万斤の米がとれるばかりでなく、北部の山間地帯でも同じようにできるのだ、と説いた。そこで、連興でも重点試験区がつけられ、数十畝を、それぞれ三、四尺も掘りおこしてから三尺の深さまで肥料を入れ、百斤の種子をまいた。(中国

のふるくからの慣習は一畝当たり五斤ないし八斤)。穂はらみの時期が近づくと、数千の人びとを動員して数十畝の試験田のなかから、よく成長した穂株を選んで一畝の田に集中して密植した。さて取りいれる段になると、また穂をはらんでいない株さえ株数につけくわえて六万斤という宣伝数字をでっちあげたのである。」

そのほかにも「十万斤実験用」と宣伝した「衛星田」の実際収穫高をしらべてみたら、一畝あたりわずか三百四十八斤半しかなかったという笑話もある。ともかく白髪三千丈の国柄だけに、うそも八百をはるかに上まわっていた。

だがどうしてこんなことが毛沢東のような聡明な指導者の耳に達しなかったのか。ここに毛沢東の悲劇のひとつの原因がある。それは中国の絶対権力者が群臣や民衆からうける伝統的な皮肉な復讐ともいえよう。むかし秦の宦官趙高が自分の権力のほどをためそうとして、二世皇帝の前で鹿を指して馬といったが、居ならば朝臣はだれひとりとして真実を奏上するものはなかった。皇帝は文字どおり群臣に「馬鹿」にされたのである。時代はちがってもこの理屈は同じだ。毛沢東が彭徳懐のような親友の直言者を遠ざけてしまったのでは、もはや一千七百万の黨員は、ひとりしてかれに真実を告げようとはしなかったのだ。

もしも、劉少奇、周恩来、鄧小平、彭真などの合理的な頭脳が、ほんとにこんな馬鹿馬鹿しいことと信じていたら、中国はもっと前に亡んでいたであろう。

ではかれらはなぜ「三・三制」を六中全会の決議のなかに入れたのであろうか。こういう場合、「面從後言」（権力者からの命令には、ともかく目の前ではおとなしく従い、あとで批判する）は中国人の美德とさえいえる。かれらにはそれについて各自それぞれ、多少ずつちがった思惑があったにちがいない。だが、そこには共通のひとつの考えがあった。それは、かれらがこの会議すなわち六中全会で毛主席の政策の基本的な部分をひっこめさせた以上、かれに、できるだけ礼儀正しく、「面子」をあたえなければいけないということであった。

## 五 八中全会

六中全会では劉少奇が毛沢東にかわって、国家主席に就任することがほぼ確定した。だがそれが正式発表されたのは、翌一九五九年四月である。それから四カ月後には中国共産党八中全会が廬山に召集された。

この八カ月間に中国の経済情勢は、日一日と悪化してきた。毛沢東の大躍進の政策にもっとも手きびしい批判を加えたものは、彭徳懷ではなく六億の農民たちであった。農民たちは、起床ラッパともにおきて、トラックに乗せられ、農場にはこぼれ、九時間十時間とはたらかせられる。そのうえ、収穫物にたいしては自分が直接処分権をもっていないとなると、身をいれて労働する気になれない。



農民は毛沢東の考えているような、私欲から超越した人間でないことをサボタージュによって証明した。「草荒」といって、畑に雑草をはやし放題にする惰農の現象は、いたるところにおこってきた。

円陽県の第一書記宋亜欣というひとが、県下の人民公社を視察してあるき、その視察記を、一九六〇年七月二十七日の人民日報にのせているが、それにはこう書いている。「隣りの大貢大隊に行くと、晚稻は追肥不足のため、苗が黄色くなっており、除草機を一度もおした様子はなく、棉田には棉と草が一緒にのびており、田の中ではたらいっている人はいくらもない。ある田などは、乾ききって、土がひからびているが、誰も水をやっている様子はなく、雑草はのび放題だった」これは全国的な現象で、この日の人民日報は、社説「迅速に草荒を消滅せよ」のなかで、全耕地の二〇%にあたる約三億畝が草荒だと言っている。

この「草荒現象」は、すでに五九年からはじまっていた。それがためこの年の食糧生産目標は五億二千五百万トンと予定されていたが、八中全会でそれを一挙に二億二千五百万トンと半分以下にひきさげてしまった。

どこの国でも、自国の主食農産物の生産目標をたてるが、その額について倍額以上の見込みちがい、なんと三億トンの見込みちがいをやった例はない。こんなことはまず世界史はじまって以来のことであろう。「三・三制」の天国は、この「三億トン」の爆弾で、いっぺんに消しとんでしまった。六中全会できめた「少なく植えて高い生産高をあげ、多く収穫する」プラン（いわゆる「大面積高産田

運動」は、もちろんこの会議ではげしい批判をうけた。

この論争で誰がどういうことを言ったかはわからないが、少なくとも毛沢東が防衛側に、劉少奇、鄧小平らが攻撃側にたったこと、そしておそらく周恩来が調停にたって、ひとつの妥協ができたことは、その決議から想像される。ともかく八中全会できまったのは、大面積高産田方式もひきつづき実施するが、それだけをたよりにせず、同時に食糧の出来るところはどこにも植え、広く作付けして、多く収穫することを全国的に推進するという方針だった。これを「二本足であるくリヤンヤオトウイツォール（两条腿走路）」の方針といった。

だが実際には、「少種多収セウシュウオウツウ」（少なく植えて多く収穫）の左あしは一向に使われず、もっぱら「多種多収フオンドウケン」（多く植えて多く収穫せよ）の右あし一本でびよんびよんとんでいたことがわかる。まもなく毛沢東自身が「三・三制」の理想は、自分とりやめだという弱音をはくようになった。一九六〇年七月十九日の人民日報で、右傾派として批判されていた鄧子恢が、それみたことかとばかりこう言明している。「最近毛沢東主席は、次のような新しい指令をだされた。『少なく植え高い生産をあげ、多く収穫するという計画は、一定時期になれば実現できるが、この十年内に全面的にこれを実施することも、全国の大部分で実施することもできない……この三年間は多く植えることに極力つとめなければならぬ。当面数年間の方針は、広く植えて薄く取入れるやりかたと、少なく植えて多くとりいれる多収穫豊産田を同時にすすめよ』」

毛沢東にとってこの会議は、政権をとって以来、一番つらい会議だったろう。たんにかれの理想がくずれたことを大ぜいの前で承諾せざるをえなかったばかりではない。彼の考えた経済政策が国民からボイコットされたことを現実によって思いしらされたからである。

こうみてくると、八中全会はいかにも毛沢東が敗北をみとめたように見える。だが情勢がどんなに自分に不利であっても、反撃の足場を確保しないで後退するわけではない。

毛沢東はこの会議で、強硬な反対論をしりぞけて、強引に彭徳懐、黄克誠らの肅清を承認させてしまった。彭徳懐は誰よりもさきに大躍進のまちがいを指摘して、それに反対しつづけていた。そして事態はいまやかれらの警告してきた通りに発展してきたのである。それなのに、ことここにいたって、かれらを罷免するのはおかしななしだ。

毛はなぜこのように彭徳懐を目的かたきにしたのであろうか。これは毛の性格を知る上に考えなければならぬ問題だ。経済問題では底なしの楽天主義を発揮している毛沢東ではあるが、政治的な計算にはおどろくべき敏感さをもっていた。かれは彭徳懐が自分と同クラスの軍人であり政治家であることを知っている。この彭がもし劉少奇らと一緒になれば、そこにどんな局面が展開するかわからなかった。かれは頑強にその罷免を主張したのである。

劉少奇、鄧小平ら党中央の立場としては、この罷免は認めるわけにはいかなかった。とくに劉少奇はなにごとにもすじをとおす方であったから、これに極力反対した。劉の低いが、力のこもった声

が、順々と理をといて行く。中共委員の大多数は、彭に同情していたので、大勢はむしろ劉にかたむいた。このとき毛沢東の昂奮した、かん高い声が列席の中央委員らをどなりつけた。

「諸君らがもし彭徳懐の側にたつならば、私はもう一度井崗山にのぼらなきゃならない。だが私は、諸君らがかならず私についてくることを確信している。」

この一言で会場は、劉自身をふくめて、沈黙してしまった。劉はいまさらながらこの男のもっている不思議な威圧を感じた。と同時に、劉少奇はかれの持論の「党内民主主義」というものはかなさど、そのうえにのっている国家主席という自分の地位のたよりなさを思い知らされた。

八中全会でこうして名をすてて実をとったのはむしろ毛沢東の方だといえる。少なくとも軍の把握という点からいえば、毛沢東の立場は微動だもしていない。もともと「政権は銃剣でつくられる」という考えをもっていたかれのことであるから、現在劉少奇を国家主席とした以上、軍隊だけはかれの手にしっかりとにぎっていなければならないと考えたにちがいない。かれが彭徳懐を追放して、林彪をそのあとにすえることを、あれほど強く主張した理由はこれなのだ。

経済問題や党組織問題では、毛沢東よりはるかにすぐれた劉少奇ではあったが、権力闘争のかけひきでは毛の足もとにもよれなかった。

政治算術におけるこの二人の頭脳の相違をもうひとつ実例でしめしておきたい。それは中国の権力機構の秘密を明らかにし、毛の「文化大革命」を一応成功させた主要な理由のひとつを解明するから

だ。

中国の憲法によると、国家主席は人民代表大会の決定にもとづいて政令を公布し、行政機構の首脳者の任免をおこない、国防委員会主席、最高國務會議々長をかねて、対外的に中華人民共和國を代表する。こうならべると非常に大きな権限をもっているようにみえるが、実際はそんなものではない。国防委員会というのは、内容の空虚な軍の諮問機関にすぎない。軍の実権を握っているのは国防部の方で、これは國務院に属し、党中央軍事委員会の指揮のもとにおかれている。この委員会には總參謀部、總政治部、總後勤部、各兵種司令部などが従属しているほんとの実力機関だ。それゆえ党中央軍事委員会主席毛沢東と、国家国防委員会々長劉少奇は、名前だけではわからないが、軍にたいするにらみという点では、大変な相違がある。しかしもしも彭德懷が国防部長の地位にあったとすれば、話はちがう。

かれは副主席として、この二つの機関に同時に参加するから、劉少奇はかれを通じて軍を動かすことができたのだ。これに反し国防部長が林彪となると、劉の国防委員会主席という地位はまったく無意味なものだった。

実はこの関係が「文化大革命」直前までつづいていた。試みに、これらの軍事機構を構成するメンバーの顔ぶれをあげてみよう。

国家国防委員会

主席 劉少奇

副主席 林彪（國務院國防部長）

賀竜、鄧小平、聶榮臻、羅瑞卿、張治中、蔡廷鍇、劉伯承、陳毅、徐向前、葉劍英、程潜、傅作義

党中央軍事委員会

主席 毛沢東

副主席 林彪、賀竜、聶榮臻

常務委員 劉伯承、徐向前、葉劍英

秘書長 羅瑞卿

副秘書長 蕭華

国家国防委員会は、委員の数こそ多いが、半分は張治中、蔡廷鍇、程潜、傅作義など国民党軍隊からねがえたもので、その他のものはみな軍事委員会の委員が兼ねている。このなかの林彪、羅瑞卿を彭德懷、黄克誠とおきかえてみると、劉少奇の軍にたいする立場はまったくかわってくる。この観

点からみると、八中全会で彭徳懷を失ってしまったことは、今日文化大革命をふせげなかった大きな原因であることがはっきりわかる。

もうひとつ言っておきたいことがある。

八中全会以前に、劉がもしも毛の暴走をとめ、その横紙やぶりに制肘を加えようとすれば、かれは「全国人民代表大会常任委員会委員長」という地位を利用するという手もあった。中国憲法の規定によると、全国人民代表大会は国家最高の権力機関であり、党の政策はすべて、人民代表大会の承認をうけなければならぬ建て前になっている。そして人民代表大会が開かれなるときには、常務委員会がその代行をしている。劉はその気になれば、この規定と地位を利用できたのである。実際にもそうした例があった。一九五六年一月、毛沢東は「一九五六年より一九六七年にわたる全国農業發展綱要」草案を、中央委員会にかけて、強引に通過させようとした。このプランの内容は例によって、たとえばこの十二年間に黄河以北の土地毎畝あたり平均の糧食年間收穫量を一五〇斤から四〇〇斤に引きあげるといような現実からかけはなれたものだったから、劉は全国人民代表大会で、修正に修正を加え、ついに正式には通過させなかった。それゆえ劉少奇の人民代表委員会常務委員会委員長という地位は、けっして無意味なものではなかった。毛沢東は劉少奇に国家主席の地位をあたえるところに、人民代表大会の方の地位を朱徳に譲らせてしまった。朱徳は劉少奇とはちがいが、たとえかれの政策に反対するにしても、この地位を、劉少奇のように効果的に使うことはできないことを毛はよく知ってい

た。

こうして一九五九年九月、彭德懷国防部部长、黄克誠総参謀長、洪学智総後勤部長、周小舟湖南省第一書記の解任が正式に発表された。

このほか滕代遠鉄道部長は解任の発表はないが、このときから姿を消し、呂正操副部長がかれの代理をするようになった。

こうみてくると、八中全会のかけひきで、名をすてて実をとったのはやはり毛沢東であった。かれは劉がもし自分の後継者として、自分に忠実であることを示さなければ、いつでもお前をやめさせることができるぞ、ということをし、このような権力配置のなかに示しながら、ゆうゆう花道をひきさがっていったのだ。

このとき姿を消した人たちは、ほとんどが湖南生まれで、革命のそもそものはじめから、毛沢東と肩をならべて戦ってきた人びとであった。おそらく彼らの感慨はこの詩詞のようなものであろう。

### 長安の道

人に衣なく

馬に草なし

何ぞ帰り来って



山中に老いざる。

(願況)

第二章 革命の風土と熱風

## 一 湖南人かたぎ

湖南省は昔の楚の国である。秦朝末期に項羽を出し、太平天国の乱では洪秀全の片腕だった翼王石達開をだしたところだ。昔「楚に三家族あれば晋を征服できる」といわれたほどこの人は頑強で有名だった。一口に湖南は「六水三山一耕地」といわれ、水が六分、山が三分、あとの一分が耕地である。耕地は肥沃ではあるが、これといった物産はない。そこで湖南にはこんな民謡がある。

湖南よ、湖南

お前は中国のまんなかになりながら

これといった名産はない

ただ意気を重んじ生命を軽んずる英雄を生む

かれらの血戦につぐ血戦で

湖南人の鮮血は

紅い花とさいている

ここの青年たちには、三国志や水滸伝の世界がいまだにのこっていた。毛自身も自伝のなかで、それを少しもかくしていない。かれが一九二五年によんだ「沁園春—長沙」の詩詞にも、この気分は十分うかがわれる。

寒秋にひとり立てば、湘江北のかたを流る。

橘子州みかんじょうのほとり、みよ、万山紅くれなゐあまねく、層林そうりんことごとく染むるを

漫江碧あかくして透すきとおり、百舸ひゃくかは流れを争う。

鷹たかは長空ながそらを撃はき、魚いさなは浅底ひるぼろに翔ひらる。——

万類ばんるいは霜天しもぞらに自由じゆうを競あう。

張寥閣ちやうかくよ、蒼茫そうぼうの大地だいちに問え、誰か浮沈うきしんを主しゅどる？

百侶ひゃくりょを携たえて、重遊じゆうし、往昔わかしよ崢嶸しやうりやうの歲月しげきしげきを憶おもう。

あたかも同どう学の少年せうねん、風華ふうか正茂せいぼうし、

書生の意気いぎは芳猷ほうゆうをふるいしりぞく、

江山きやうしんを指さし文字もじを激揚げきやうし、

当年の万戸侯を糞土となす。

曾つて記するや否や、

中流急水に到つて、浪は飛舟をすぐるを。

内容は、昔友達とよく遊びにいった湘江のほとりにきて、天地の悠久、宏大さを思いながら、歴史上の人物をくそみに批評しあつて、お互いに気炎をあげていた同窓生たちはいまどうしているだろうといっているだけのことだが、そこには、不思議なほど、明治維新の志士たちの感慨に似たものが感じられる。それは儒教でやしなわれた君子のエリート意識と、「乃公いはずんば」という使命感である。薩摩や長州の下級武士は、明治維新のなかに自分たちの活路を見出した。かれらは薩摩とか、長州とかせまい封建的な藩国のなかで、家柄や格式などの制限にくくりつけられる人生をきらつた。明治維新という大きな舞台はかれらにとって個人的「出世」の道でもあつたのだ。

毛の自伝をよむと、かれが革命運動に参加したのは、プロレタリア階級意識の目覚めというよりも、祖国を腐蝕させている現在の支配機構をくつがえして、亡国の危機から救うとともに、そこに自分の将来をひらこうという願望がはつきりうかがわれる。いうなれば、かれにおいては革命と個人の生活が混然と一致していた。それだけに、革命のなかに、かれ自身の権力機構をつくることは、同時に革命の推進でもあるというつよい自信がもてたのだ。これはひとり毛沢東だけではない。かれの周囲にあつまっていた、湖南の青年たちすべてについていえることである。

日本でも郷党からひとりえらいものがでるとその周囲にはよく郷里の青年があつまるものだが、中国ではとくにその傾向はつよい。言葉の地方差が大きい中国では出身地がちがうとまったく言語が通じない。広東人、北京人、上海人、福建人、湖南人の間では共通の国語がはなせないかぎり、会話は半分も意味が通じないのだ。こういう環境から同郷人がえらい指導者を中心として一党派を形成するのはきわめて自然なことである。

そのうえ湖南人は昔から封鎖的で、中国人の間でも団結心はとくに強烈である。湖南の文人は自分たちの性格をお前は「お前の陽関道を行け、おれはおれの丸木橋を行く」(「ニリョウニリケンクワンダウオウリョウオウ 獨木橋トムノキヤシ」)という言葉であらわしている。陽関道というのは中国本土と西域に通ずる陽関という関所を通る道である。その道を行けば当時の国際社会と通ずることができるかもしれないが、おれは、たとえ一本橋の危険をおかしても自分の道をゆくつもりだというのが湖南人の気魄だ。湖南人のこのような気魄をうまく扱えば感激して命すら投げ出すが、いったんこじれると始末におえない。中国ではこれを湖南人の「逆毛ニイマ」(つむじまがり)といっている。毛沢東はいわば湖南の代表的な「逆毛」なのだ。

こういうことからいえば、毛の領導する共産主義運動のなかにできたかれの権力機構に湖南人が多く吸収されたのは当然ななりゆきである。これが中国共産党の「湖南閥」とか「大湖南主義」とかいわれる現象なのだ。この現象を数字の上からみてみよう。

一九五九年の中国共産党中央委員会九四名の委員のうち、湖南省出身者は二六名(二八%)である。さらに中央政治局委員二五名のうち湖南人は七名(二八%)、中央書記処一〇名のうち湖南人は三名(三〇%)である。

全国人民代表大会常務委員会の委員長は朱徳で四川省人であるが、副委員長五名のうち二名(四〇%)は湖南人、國務院の大臣級五名のうち一六名(三〇%)、国防委員会三〇名の委員中一二名(四〇%)、中將以上の軍人二八名中一名(四〇%)が湖南出身者なのだ。こうあげてみると「大湖南主義」の实体は一層はつきりする。

しかし毛沢東が湖南人を多く重用した理由はただ、かれとの個人的歴史的なつながりから湖南人に信頼できる人物が多かったからだ。その証拠には彭徳懐、黄克誠、滕代遠のような有力な湖南人でも信頼できなくなればどしどしかれの権力機構から追放し、そのあとがまに信頼のできる他省人をすえる。たとえば林彪、羅瑞卿のような人がそれだ。その年のおわりに林彪の国防部長、羅瑞卿の総参謀長が発表されている。

林彪は一九〇八年の湖北省生まれ、羅は林よりひとつ上の七年の四川省生まれである。かれらはいずれも黄埔軍官学校の学生から、北伐(一九二六―二七年国共合作の国民党軍は軍閥を倒すために北上する)に参加し、国共の分裂とともに紅軍に参加し、毛沢東の傘下にはいった。

湖北と湖南とは昔は今よりもっと大きくひろがっていた洞庭湖の両岸に隣りあって、湖北省

を雲沢、湖南省を夢沢とよんでいた。孟浩然の希代の名聯といわれるものに「気は蒸す雲夢の沢、波は憾とかす岳陽城」というのがあるが、この雲夢の沢というのがそれで、湖北湖南をひとつの国のようにみているのだ。人物の気風も風土もよく似ており、武漢と長沙の文化的なつながりも密接で、言葉もほとんど同じである。それに重要なことはこの二つの省は一九二五、六年に同じようにはげしい農民運動を経験している。こういう関係から湖北でも中国共産主義運動に多くの有名な活動家を出している。たとえば林彪、渾代英、董必武、林育南、項英、徐海東等多士多彩である。「大湖南主義」を大きな意味にとればこれらの湖北人もそのなかにふくまれよう。そうなれば中国共産党の権力機構における湖南人の比重は非常に大きなものになる。その頂点にたつ大ボスの存在が毛沢東であり、大番頭の存在が劉少奇だったのだ。

## 二 桃園の義盟——劉と毛

劉少奇は人民公社の問題がおこるまでは、毛沢東とこれと違って意見の対立したことはなかった。毛沢東は農民運動、劉少奇は労働運動と、活動の分野はちがってはいたが、党の重大な戦略問題では、不思議に意見があった。党内の決定的な派閥闘争では、劉はつねに毛の側に立って、戦ってきたのだ。外部でよく、劉少奇は国際派、毛沢東、周恩来は国粹派などといわれていたので、筆者はかつ



てかれらの双方をよく知っている張国燾に兩人の関係をきいたことがある。そのとき張国燾はずばりと、「劉少奇は毛沢東の子分ですよ」（劉少奇は毛沢東的人）といったことが、いまでも記憶にのこっている。

この二人のそもその出会いは、中国共産党の成立よりも、もっと前のことだ。劉は一八九八年、毛沢東は一八九三年生まれである。したがって劉は毛沢東よりは五つ年下だ。かれの郷里は湖南省寧郷県南塘公塘で生家は貧農ではなく富農だった。南塘は毛の故郷湘潭県韶山村とは山ひとつへだてたところである。かれは長沙の湖南第一師範を卒業後、一九一九年の五・四運動のときから鄧中夏（中国労働組合運動の開祖的人物）をたすけて「工人十人団」を組織した。翌一九二〇年の八月にはウオイチンスキーの肝いりで中国共産主義青年団が上海に成立したが、かれはもちろんこの組織に参加した。それゆえ、共産主義運動では毛沢東よりもはるかに先輩だった。その当時かれはウオイチンスキーの夫人からロシア語をならい、二一年の春モスクワに行きクトベ（東方労働大学）に入学した。同級には任弼時、蕭勁光、羅亦農、彭述之などがいた。一年後には再び故国にかえり、すぐに中国共産党中央労働組合書記部にはいった。その年の九月五日李立三につれられて長沙の土工組合成立大会に参加した。かれが毛沢東を知ったのはこの時からである。毛沢東はそのときすでに湖南師範学校の恩師楊昌濟（字は懐中）の娘、楊開輝と結婚し、長沙に新家庭をもっていた。毛は長沙の党代表であり、学生運動の指導者として知られていた。劉少奇はよくこの新婚家庭をたずね、その家にとまって毛と語り

あかしたものである。

毛沢東はこれよりさき二一年七月、長沙社会主義青年団の代表として、上海で行なわれた中国共産党創立大会に参加した。この大会の召集者は、北京大学の教授だった陳独秀と李大釗だが、この二人はともにこの大会には出席しなかった。かれらにかわって議長役をつとめたのは、五・四運動で有名になった北京大学の学生張国燾だった。

中国共産党創立大会の開会地点は多くの文献では、フランス租界貝勒路の博文女子中学だとされている。だがその会議に出席した周仏海と陳公博が書きのこした手記をみると、会議が実際に行なわれた場所は、同じ貝勒路ではあるが、李漢俊の家の二階だったということがわかる。(陳・周、回憶録合編) それに参加した各地代表は、次の十三人だった。

長沙代表 毛沢東、何叔衡

漢口代表 包惠僧、陳潭秋

湖北代表 董必武

北京代表 張国燾、劉仁静

濟南代表 王尽美、鄧恩銘

広東代表 陳公博

日本留学生代表 周仏海

これにコミンテルンからきたウオイチンスキーとマリンの二人が加わった。かれらのほとんどがおたがいはじめて顔を合わせたのだから、疑心暗鬼からくるいやなこともかなりあったらしい。

この会場はフランス租界警察の搜索をうけたので、周仏海の発案で、中途から会場を嘉興にうつすことになった。

嘉興は上海から汽車で約一時間半ばかりの風光明媚なところである。そこには杭州の西湖によく似た、南湖という小さな湖があつて、遊客はそれに日本の屋形船に似た画舫をうかべてあそぶ。かれらはこの遊客をよそおつて、この画舫をかり、その上で創立大会をおわつた。折から大雨沛然とふり出し、大急ぎで党の綱領と組織方針を通過せよと叫びかいてある。こうして「中国共産党は、烟雨茫茫波にゆられる孤舟のなかで成立した」のである。

この創立大会にあつたものの多くは、大学出身のインテリで、実践活動の経験をつんだものはほとんどいない。このなかにあつて毛沢東は、すでに一九一七年から「新民学会」を組織し、その会員の大多数を、社会主義青年団にいられた。新民学会の会員はほぼ百名であつた。上海の中国共産党創立大会にあつた各地代表が代表する全党員の数は約五十名と公表されているから、毛の代表する長沙支部はなかでもっとも有力なものだつた。それにもかかわらずこの代表大会にあつたインテリたちは、田舎者然とした毛をあまり重要視していなかつたようである。毛の方でも、かれらにたいして、なんとなくなつたよりなさを感じたもようだ。この旅行から、長沙にかへつたかれは、気

のおけない、湖南師範の同窓蕭瑜にこうかたっている。

「陳独秀はあまりにも学者的で、みかけもブルジョア的だ。李大釗の方が指導者として適當だと思うが、なにしろソ連が陳独秀を推しているから……。」

毛は李大釗には北京大学の図書館にいた頃世話になったことがある。陳独秀はかれのマルクス主義への開眼をたすけてくれた人である。だが、どういいうわけか後者については毛はなじめないものがあったようだ。その理由はわからないが、おそらくかれの都会才子的なところに反撥したのであろう。かれが、上海であった大学教授や文筆家の共産主義者についても、かれとしては同じような感じをもっていたようである。それにもかかわらずかれは、かれらとともに中国共産党はつくらなければならぬと決心したのだ。その心境を蕭瑜にこうかたっている。

「集まったのは、みんな相当な連中なんだ。高等教育をうけて、日本語や英語のわかる人もおおい。みんな中国を改造するには、まず自分たちがその中心にならなければならぬと考えている。その考えを具体化したものが、つまり中国共産党なのだ。こまかい宣伝方式や活動はこれから決めることになったけど、大すじとしては、まず労働階級や学生間に共産主義をひろめることが第一、第二は党の財政的な基礎を固めることで、そのために第三インターナショナルに入るようになった。」

もしも実際がこの言葉通りであったとすれば、初期の中国共産党は共産主義者の組織というよりも中国の現状改革を目標としてともかく運動を展開しようという愛国者の集まりといえよう。かれらは

ただ方便として国際プロレタリアート運動に参加しようとしていたようだ。そこでは、プロレタリア・イデオロギーや世界革命の問題があまり真剣には討論されなかったようだ。もしもそこでマルクス主義の基本問題が討論されたとすればこの成立大会は脱落者が続出して、あるいは成立しなかったかもしれない。

ともかく、こうして成立した中国共産党の黨員総数は約五十人、大部分は学生や大学教授などのインテリで、プロレタリア出身の黨員というものはほとんどいなかった。ウオイチンスキーやマリンは、これではいけない、党は今後大いに労働運動をおこして、プロレタリア出身の黨員をどしどし参加させなければいけないといった。そこで大会の終了後、ただちに合法的にプロレタリア組織運動を行なう「中国労働組合書記部」を上海に設け、鄧中夏を主任とし、各地に支部を設けることになった。湖南支部主任は毛沢東、武漢支部主任は林育南だった。この林育南という人は、その弟の林育英とともに、湖北の古い共産黨員で、林彪の叔父にあたる人だ。林彪の叔父にあたる人だ。林彪が少年の頃に共産主義にはしった背景には、こういう家庭の事情があったのであろう。

当時は第一次大戦後のデモクラシーと自由の空気が世界中にみなぎっていた時代だったので、中国の労働組合運動は急速に発展し、各地にストライキの波がおこった。そのなかでとくに大きかったのは香港の海員ストライキだった。これは労働者側の大勝利となり、組合がみとめられたばかりでなく賃銀は大幅にひきあげられた。この争議にたいして全国的な同情ストライキがおこった。これはもち

るん自然発生的なものではなく、そのなかに共産党の「中国労働組合」のたゆみない活動があったからである。

党創立大会がおわるとすぐ、毛沢東は長沙にかえって、正式に党湖南支部を成立させ、湘区党委員会議の地位についた。湘区のなかには湖南省ばかりでなく、江西省の安源地区までふくまれている。安源地区には、萍郷炭坑その他の炭坑があり、坑夫たちは安源炭坑労働組合を結成していた。その指導者が劉少奇だった。一九二二年ここでもストライキの高潮をむかえ、萍郷炭坑、水口山鉛坑、長沙市土建業の労働者の間でストライキがおこった。劉は毛とともに、その共同指導にあたった。

萍郷ストはこれを皮きりに、参加人員八十七万にたいする、中国最初の全国ゼネストに発展した。この過程において劉少奇の名はあまねく知られ、一九二五年のメーデーに広州でひらかれた第二回全国労働大会で、中華全国総工会が組織されると、劉はその副委員長にえらばれた。委員長はあとでてくる李立三である。

この月の終わり、すなわち五月三十日に、いわゆる「五・三〇」事件がおこった。それは日本の紡績工場で、日本人の職工監督が中国人女工をなぐり殺したことから、学生と労働者が抗議の示威運動をおこしたが、それを鎮圧しようとした英国租界警察官が発砲命令をだしたために、十二名の犠牲者を出した事件である。

このとき劉少奇はただちに広州から上海にとんで、この運動の直接指導にあたった。抗議運動はた

ちまち全国にひろがり、約四十万人の労働者が抗議ストライキにたちあがった。劉少奇はこの機会をとらえて、上海の学生連合会、総工会、総商会、救国団体をひとつの統一機関に組織した。それがのちの抗日民族統一戦線のヒナ型となった「上海商工業連合会」である。

毛沢東も「中国労働組合」湖南支部主任として劉とともに安源炭坑や長沙土建労働組合のストライキを指導し、とくに長沙のストライキではかれ自身土建労働者代表をつれて省公署との交渉にあたった。一九二二年かれが総幹事をやっている湖南全省工団連合会傘下の組合はわずか一〇いくつしかなかったが翌二三年には二、三〇に増大した。

この間毛沢東は二二年七月杭州で開催された党中央の二全大会にも出席せず、五月に広州で開催された「第一回全国労働会議」にもまた翌二三年同地で行なわれた中国共産党三全大会にも参加しなかった。

なにがかれをこのように党中央からひきはなし湖南に固着させたのであろうか。ひとつの理由はかれが党中央の都会インテリ的なアトモスフェアにはじめからその合わないものを感じ、かれらにたよっていたのでは中国革命はできそうもないと考えたことであろう。そのことはまたかれを「国共合作」に近づけた大きな理由とも考えられる。だがそれよりもっと大きな理由はかれら党中央が中国革命の原動力としておさわぎしていたプロレタリアートよりも、かれは中国の農民により大きな評価をあたえていたからではあるまいか。

かれは長沙の労働組合運動でかなりの成功をおさめたにもかかわらず、それについての著書や論文はほとんど書いていない。またその期間はみじかく、かつ間もなく農民問題の方に熱中してしまった。ロバート・ペインは毛沢東のプロレタリアートにたいするこの奇妙な冷淡さについてこうのべている。

「マルクス主義理論は『革命の前衛』が『目覚めたるプロレタリアート』でなければならぬと要求する。そしていまはじめてかれは湖南の小工業都市を知るようになった。農民のことは一時放棄されていた。それはかれがもはや農民に興味をいだかなくなったからではなくて——かれら農民がマルクス主義の理論のなかにその場所をもたなかったためである。」(ロバート・ペイン『毛沢東』)

農民はマルクス主義理論のなかではその場所をもたなかったかもしれないが、中国の伝統的革命的理論のなかでは革命の原動力であり、歴史の推進力であった。それにこの分野はかれの生活や、かれが学んだ中国史や、少年時代によんだ稗史小説のなかでもなじみふかい世界であった。かれは都会の労働組合運動を体験すると間もなく、中国革命の本すじはやはり農民運動だと再確認したにちがいない。かれは一九二五年湖南の農民運動に専念するようになり、翌二六年には国民党から金を出してもらい、広州に農民運動講習所を開いて、農民運動の闘士を養成した。またその翌一九二七年には有名な「湖南農民運動考察報告」(一九二七年三月)という名論文をかいている。

こうして毛と劉の二人の活動分野は一方は都市、一方は農村と、截然と区別され、組織的な連絡も



とだえ勝ちになってしまった。そのままいけば、中共内の派閥鬭争と離合集散のはげしい環境のなかで、二人はわかれわかれになってしまったであろう。その二人をかたく結びつけたものはなんであるか。

ある人びとは、かれらは知り合った当時から肝胆相てらし、「桃園の義盟」のように、かたくむすばれていたからだと説明する。だが階級鬭争の世界における友情のよろさを知っている人びとは、おそらくそういう説明では満足しまい。それを後章でくわしく説明しよう。本章は「水滸伝」の言葉をかれば、ここで「欲知後事如何、且聽下回分解」(あとはいかのおたのしみ)ということにした。

### 三 党内外からの圧迫

歴史のなかにはときとして偶然の要素が大きな結果をうむことがある。ナポレオンはアウステルリッツの会戦で、ロシア皇帝アレキサンダー一世とオーストリア皇帝フランシス二世の連合軍に、味方の右翼をつかせ、その間に敵の中央軍をつくという戦術の妙を発揮して大勝利をおさめた。その戦術は、前日の陣中会議では意見が二つにわかれて容易にきまらなかった、そのとき、それまでだまりこくっていたベルナドット元帥が突然たちあがり、決然としてこの戦術に賛成した。ナポレオンは凡将

と考えていたこの男の、意外な発言にうごかされて、この戦術に一決した。実をいうと、ベルナドット自身どっちがよいかわからなかったのだ。ただ小便がつまって、どうにももちきれなくなっていたので大声でわめいたわけだ。

前おきがなくなつたが、毛沢東と劉少奇をむすびつけた歴史の偶然は、李立三という人物の抬頭だった。李立三もまた湖南省醴陵県の人である。湖南中学に学んだというが、一八九六年生れであるから、劉少奇よりも二年先輩にあたる。かれはこの頃から毛沢東と交渉があつた。毛沢東が長沙にいたとき、新聞に革命の同志を求める広告を出したところ、それにたいする回答が三通半きたという。「半」というのは、毛沢東によるとこういうことだ。

「いわゆる『半分』の答は、李立三という名前のどっちつかずの青年からでした。李は私のいうことといっさいに耳をかたむけ、それから自分では別にはっきりした提案もせず行つてしまいました。そして私たちの友人関係は發展しませんでした。」(スノー『中国の赤い星』)

友人関係が發展しないどころか、両者の間には極度の憎悪さえ發展した。かれの口調でもわかるように、毛沢東は李立三にたいして、はじめから虫のすかないやつだという感じをもつたらしい。どうしてかといわれるとこまるが、おそらく「はっきりしない」男だという第一印象が原因であろう。だいたい共産主義者は理性的にものを考える半面、非常に感情がつよく、いったんこうと思ひこむと、「客観的分析」からではなく、その感情、つまりにくしみを合理化する理論をたてる傾向がある。い

やこれはかならずしも共産主義者にかぎったことではない。人間という動物の弱点かもしれない。野性動物なら、すぐ噛みつくところを、人間、とくにインテリとなると、あいつが嫌いなのはこれこれの理由からだ、もっともらしい理由をたてなければ気がすまないのだ。

だが実際には李立三はなかなかの人物だった。かれが共産主義運動に関係したのは、フランスのパリである。一九二〇年頃、第一次欧州大戦で労働力の不足したフランスに、中国から学生をおくり、アルバイトをさせながら勉強させようという「勤工儉学運動」がおこった。これに応募した中国の苦学生は非常に多かった。李立三もそのひとりで、一九二一年「留仏勤労学生」としてフランスに渡った。留仏学生たちの間には、「勤工儉学会」という組織がつけられていたが、李はそこで周恩来、蔡和森、趙世炎、陳延年、李富春、李維漢、王若飛、陳毅などをかたらって、中国少年共産団——中国共産党フランス支部——を結成した。学生たちはなれぬ外国の留學生生活が非常に苦しかったので、少年共産団を中心に北京政府に向って、生活維持を要求する運動がおこった。李はこの運動の指導者だったのだ。フランス政府は北京政府の意をうけて、この運動全体に弾圧を加え、李をはじめ百八人の中国留學生を国外追放処分にしてしまった。李は追放された学生の多くとともに上海で下船し、そこに澎湃としておこっていた労働運動の指導にあたることになった。

この頃の中国の労働条件はお話にならぬものだった。労働時間は一日十二時間から十四時間が普通であり、なかには十六時間に及ぶものもあった。賃銀は、一時間あたり平均米ドル換算で八セントと

いう低さだった。それゆえ労働組合運動はたちまち全中国の労働者の間にひろがり、それとともに、その指導にあたった李立三の名も全国に知られるようになった。有名な「五・三〇」事件ののち、かれは中国代表としてモスクワの世界労働大会に出席したが、モスクワでは「中国のレーニン」としてもてはやされた。

かれが帰国した一九二七年には国共関係はすでに険悪となっていた。その年の四月には、スターリンが最後まで信じきっていた国民党右派の蒋介石が革命を裏切り、上海で共産黨員や総工会の組合幹部の大量虐殺をはじめた。だがスターリンは国民党の左派が武漢政府をつくっているかぎり、共産党は国民党との合作をすててはいけなと指令した。しかしその左派の汪精衛も七月になると、蒋介石と同じように共産党を追放しだした。これから国共分裂時代である。

これで一番こまった立場におかれたのはスターリンだった。もともとソ連国内ではスターリン反対派、とくにトロツキーが、当初から国民党はかならず革命を裏切るから国共合作には深入りするなと警告していたのだからどうにもひっこみがかなくなってしまう。スターリンは結局失敗の全責任を中国共産党総書記陳独秀におわせて事態を拾収しようとした。この工作でうかびあがったのが李立三である。

李はコミンテルン代表からその指令をうけると、さっそく八月七日緊急会議をひらいた。この会議では李立三、瞿秋白、周恩来、毛沢東らが連合して、陳独秀を日和見主義者として批判した。かれは

コミンテルンの命令にそむいて、農民運動の激化をおさえようとしたというのが主な理由である。

陳独秀らはこれにたいして、一九二九年十二月十日「全党同志に告げる書」を発表して反駁した。その前置きに、

「親愛なる同志諸君。私は一九二〇年同志諸君の驥尾に付して本党を創立して以来、コミンテルンの指導者スターリン、ジノヴィエフ等の機會主義的政策を忠実に執行し、中国革命を悲惨な恥ずべき失敗にたちいたらしめた。刻苦精勵してなお功績挙げずといえども、私は『至らぬところあらば咎は私ひとりにある』というような妙な自誇的口吻で過去の誤謬と失敗から自分を除外しようなどとは思わない。いかなるとき、いかなる同志が私の過去の機會主義的誤謬を指摘しても、私は甘んじてこれを受けるつもりだ」と、いさぎよく自分の罪を認めた。だがそれと同時にいったい自分をはじめ、中国共産党をこういう方向に指導したのはだれか、と開き直った。そして「主義の誤謬を犯し、農民運動をおさえようとしたのはスターリン、ジノヴィエフ、おまえたちではないか」と、かれらを共犯者として告発したのだ。

これはスターリンのいたるところをついた。事実その通りで、スターリンは農民暴動が地主出身者の多い国民党軍將校の士気をみだすことをおそれてそれをおさえてきたのである。スターリンはこんどはその反動で、当時革命が退潮期にあったにもかかわわらず中国共産党をして農村では農民蜂起、都市ではストライキに力をいれさせることにした。そこで、党中央は、毛沢東を、当時長沙周辺でお

こつていた農民暴動の指導のために派遣した。これが毛の運命の転機で、これから毛沢東の農民運動における経験がものをいうようになってきた。

だが、「秋収暴動」として知られるその暴動は失敗におわつた。かれはそのとき党中央の許可もえないで土地没収、ソヴェト樹立のスローガンをかかげたといつて、はげしく批判された。毛は「湖南農民運動考察」をかけた頃から中国では、農民の土地没収と農村ソヴェトの建設が必要だという見解をもつていた。それゆえ一九二七年八月二十日（かれが長沙の現地についてから一週間か十日ぐらいあ）と党中央委員会にこういう手紙を書いている。

「湖南にきた同志のひとりだが、コミンテルンから労働者、農民、兵士のソヴェトの即時設立を命じた指令がきたと教えてくれました。これをきいたとき私は、うれしさのあまりとびあがりました。客観的には中国は、ずっと前に一九一七年に達していたのです。しかし以前にはすべての人が、われわれは一九〇五年の位置にいるのだと主張していました。これはとても重大なあやまりでした……」（スチュアート・シユラム『毛沢東』）

ここで一九〇五年というのはロシアで共産党の勢力がまだよわく革命が成熟していなかったことを指している。これをみれば、かれは国共分裂以前すでにトロツキーと同じように中国革命が土地没収にふみきるべきだという意見をもつていたことがわかる。毛はおそらく自分ではそれを意識しなかつたであろうが、実際には、スターリンの指導に正反対の見解をもつていたので、かれの行動がしばし

ば党中央の指令と衝突し、党中央から迫害されたほんとの原因はここにあるのだ。

かれは秋収暴動の農民兵をつれて、国民党軍と戦いながら湖南省を南へ南へと移動し、さいごに井岡山にたどりついた。その当時の事情を自伝ではこういつている。

「秋収暴動の綱領は、中央委員会の承認をうけておらず、また第一軍はかなりひどい損害をうけ、都市側の目で見れば、この運動は失敗の運命にあるとみなされたために中央委員会は断乎として私を排斥しました。私は政治局からおい出され、また前敵委員会の職も剝奪されました。湖南省委員会も『鉄砲運動』（「匪賊の運動」）といって私たちを攻撃しました。

それにもかかわらず私たちは、自分らが正しい方針にしたがっていることを確信し、われわれの部隊を井岡山に集結しました。その後の事件はわれわれの正しいことを充分に証明しました。」

党中央委員会の意見がどうであろうと、党規約などにかまわず、自分が正しいと信ずればあくまで反対する。これが毛沢東だ。といたいところだが、それではあまりにかれの人物を単純化しすぎる。たしかにかれは「湖南農民運動考察報告」をかいた当時からスターリン——陳独秀の政策、すなわち農民暴動を国共合作のために犠牲にする政策に反対だったのだが、それにもかかわらず、かれは、党中央—スターリンに正面から反対したことはなかった。かれは実行できない指令をうけると実践面ではその指令をサボって出来るだけ自分の主張通りにやってきた。つまりかれはどんなに正しい戦いでも、勝つ公算のない戦いはやらない主義なのだ。いや、言葉をかえていえば、正義の戦いはかな

らず勝つ、だがそれには相手の力量をよく計算して、戦うに手段をもってしなければならぬと考えていたのだ。

自伝でものべているように、毛は湖南省前敵委員会委員長（前敵委員会、国民党軍と直接戦っている地区委員会の委員長）の職をとり消された。そんなことにくじけるかではない。かれは井岡山を含む湖南省江西省境に散在している党組織をあつめて、「辺区特別委員会」というものを自分でつくり、その書記長の資格で活動していた。湖南省委員会は、それを認めるとかみとめないとかいつていたが、すでにできてしまったものを、あえて取消すこともないという主張がでて、一応その成立を認めることになった。

湖南省党委は、そうしておいてこんどはそれを毛沢東の手から実権をうばいとることを考え、楊開明というものを正式にその書記長代理として派遣した。楊は省委の内命をうけて、辺区委員会を湖南省党委の管轄下のもとにおこうといひだした。毛沢東はかれの提案をききいれなかったばかりか、かれを追いかえしてしまった。党委はまた新手を考えた。こんどは譚震林を書記代理として辺区におくりこみ、毛沢東の指導権に制肘を加えようとしたのである。

共産黨員の間では「党」の権威というものは絶対だ。この大義名分は、個人の信用よりもはるかに大きな影響力をもつ。党の影響下にある大衆は、党中央が批判しているとすると、それが正しいか否かをとわず、ともかくそれに従う。それゆえこの年の十月行なわれた、辺区の委員の選挙では、十九人



の委員中譚震林が第一位で当選したのにたいし、その地区の創立者毛沢東はやっと第十五位で委員の椅子を辛うじて維持するといふ始末だった。

党中央とその意をうけた湖南省党委は、それで毛沢東いじめをうちきったわけではない。かれらは上級機関として、毛沢東の軍事行動を指揮する権限をもっていた。省党部はこれを利用し、毛沢東に井崗山をすてて、湖南省南部に根拠地をうつすように命令した。毛は井崗山にとどまりたいと要求したが、省党部はゆるさなかった。かれらは、毛は「勢力保存主義者」であり、革命の立場に違反すると批判した。井崗山の軍隊のなかには湖南人が多かったので、故郷にかえりたい一心から、省党部とともに湖南南部への移駐を希望するものがすくなくなかった。このように内外からの圧迫をうけた毛沢東は、一九二八年七月井崗山からその主力部隊を、湖南南部に進発させた。このとき井崗山にのこしたのは、以前からここにいた土匪の領袖袁文才、王佐の改編部隊だけであった。手薄を知った国民党軍はたちまち四方から井崗山を攻撃し、十数日でその周辺をことごとく攻略してしまったのだ。

毛沢東は、このまま湖南にはいつては、井崗山との連絡をたたれると思ったので、翌二十九年その軍隊の一部をつれて広西西部に逃げた。案の定、湖南南部に向った部隊は湖南の榔県で国民党の苑石生部隊に捕捉され壊滅的な打撃をうけた。毛沢東は湖南省党委員会の命令にしたがえば、こうなると考えていたのだが、湖南進駐のの損害があまりにも大きかったので、さすがのかれも、党中央への報告のなかに、内心のいかりをこうぶちまけている。

「われわれはかような頑固な指令をうけた。われわれはそれに従わなければ規律違反に問われるので、明らかに失敗とわかっていたことに従ったまでである。」

だが党中央は、やっとの思いで井岡山ににげこんだ、敗残の毛沢東にたいして、救援の手をさしなべなかった。井岡山では負傷兵は医薬も栄養食もなく、どんどん死んでいった。兵士が死亡しても新兵の補充はえられなかった。士気はますますおとろえ、国民党軍の封鎖はますます嚴重になった。このときもしも毛沢東に救援があたえられなかったら、かれの運命はそれでおしまいだったかも知れない。そして、そのとき彼を救ってくれたのが、誰あるう、彭徳懐だったのだ。

彭は一九二八年六月、「平江」<sup>ピニンチャン</sup>でおこった、暴動を鎮圧するために、国民党からそこに派遣されたが、このチャンスをつかんで湖南省委の特派員藤代遠とはかり、かれの装備のよい正規軍部隊全員をひきつれて井岡山にはいったのだ。そのために井岡山を包囲していた国民党軍の内部には、動揺がこり、羅炳輝、董振党、趙博生が、それぞれの部隊をひきつれて紅軍に投じた。このときから紅軍の総数は三万人に達し、国民党は手が出なくなったのである。いな、国民党ばかりではない、毛沢東をはじめていた党中央も、もはやかれをどうすることもできなくなった。

かれはこの過程で味方のなかにも敵がいること、正義を通すためにはまず権力をにぎらなければならぬこと、そしてそのためには、外部の敵はもちろん、味方内部の敵ともはげしく闘争しなければならぬことを肝に銘じた。敵にたいする憎悪、味方にたいする愛情の、はげしいコントラストは、もと

もと湖南人の特徴であるが、それはかれにいてますますつよくあらわれてきた。

#### 四 コミンテルンと毛沢東

スターリンはしばしば革命は輸出しないといっていた。革命はその国の革命条件が熟したとき、その国の共産党と革命的民衆がおこすもので、ソ連はそれに関与する意思はないというのだ。ほんとうにそうであろうか。言葉をかえていえば、ある国の共産党がほんとに自主的であり、民族的でありうるであろうか。これは大きな疑問だ。少なくともソ連と中国共産党の関係を科学的に考察した学者、たとえばハロルド・アイザックスのかいた『中国革命の悲劇』などをよめば、当時スターリンが自分の権力維持の都合やソ連の「家庭の事情」から中国革命につよく干渉し、その方向をあやまらせた実例にはいくらでもお目にかかれる。ここではそのうちの二、三顯著なものをおここう。

スターリンは中国革命失敗の責任を、陳独秀に負わせることには成功したが、ソヴェト国内の政敵トロッキー派はそんなことでは黙らなかつた。スターリンはかれらに対処するためにも、中国革命における自分の指導の正しさを証明する必要があつた。そこで考えたのは中国共産党に暴動をおこさせ、大きな都市を占領させることである。コミンテルン駐華代表のロミナーゼ——この人は中国では尼古ラニコラというペンネームで活動していた——とハインツ・ノイマンは、早速その実行かたを季立三や瞿秋白

にはかった。その結果が南昌暴動、広州暴動となったのである。平地に波瀾をおこすという言葉があるが、そこには暴動の条件もなく、それが勝利におわる条件は何一つなかった。ただそこにあったのは、是が非でも暴動をおこせという上からの命令、すなわちスターリンの国外からの命令だったのだ。

この二つの暴動はすべて失敗、それにつづいた「秋収暴動」もまた失敗、スターリンは業をにやして、李立三ら中国共産党の指導者をモスクワによびあつめた。こうして一九二八年の夏、中共六大会はモスクワでひらかれた。

この会議は中共の過去の失敗を再検討し、その上にたつて今後の方針をきめたが、それにはいままでも毛沢東が主張し、コミンテルンおよび党中央からくそみそにいわれてきた農民の武装暴動が、全面的に採用された。だがその決議文はきわめてあいまい、中国の実情からみて、どうとも解釈できる部分がたくさんあった。

李立三、周恩来、向忠発らがその方針をもって、再び中国にかえてきたのは、一九二八年も終わろうとする頃だった。それからの三カ年間、名義上の中共総書記は向忠発だったが、事実上党をひきずりまわしたのはやはり李立三だった。

そもそも中国共産党史のなかで誤謬のかたまりのようにいわれている、李立三路線というものも、決して李立三だけの創作ではない。全部が全部コミンテルンの創作といえないまでも、両者の合作であったことはまちがいない。まず李立三路線をおし出した情勢からはじめよう。

国共合作の失敗以来、中国の大、中都市は、完全に国民党の支配下にはいつた。共産党は都会では、国民党の白色テロのために身うごきができなかった。ある調査によると、一九二七年の四月から十二月までに、中共関係者として処刑されたものは三七、九八五名、翌二八年一月―八月には二七、六九九人、三〇年には総数一四万人が死刑または獄中で病死している。これは大体公表されたものだけを集計したものであるが、実際にはおそらくもっと膨大な数になるであろう。労働組合は国民党系の幹部が組織した組合だけがゆるされた。労働者たちのほとんどが共産党に関係するのをこわがっていた。労働者がストをやっていると、共産党員が指導にをかけて行くと、「あなたがたのお話はごもつともなのですが、私たちにはとても実行できません。私たちは、ただちよつとだけ賃銀をあげてもらって、職を失わなければ、それで充分なんです」と追いかえされてしまった。(これは一九二八年七月二十五日の中共中央委員会で報告)

あきらかに革命は退潮期にはいつていた。このときコミンテルンから中国共産党にあたえられた方針は、労働ソヴェトの樹立だったのだ。ソヴェトといつても毛沢東が江西省につくった遊撃隊の根拠地ではなく、国民党勢力圏内の大、中都市に、労働ソヴェト政権を建てろというのである。

中国におけるソヴェト樹立ということは、トロツキーによって、国共分裂前、革命の高潮期からとなえられてきた。スターリンは、中国革命の担当者は国民党であるから、いまソヴェトを樹立することは、国民党をよわめることになるといつて反対していた。ソヴェトの樹立は、その時代ならば成功

の可能性は充分にあった。いな、その初歩的なものではすでに実際に出現していた。毛沢東の「湖南農民運動考察報告」をみると、湖南の農村では、貧民の農民協会が、農村の政権をとり、行政を行なっていたことがわかる。

だがいまとなって、都会が国民党の完全な支配下にあるとき、そのなかにどうしてソヴェトがつくられるだろうか。ともかくそれはスターリンの命令だった。それがどんなに中国の実状に適しないものでも、李立三はそれを実行しなければならなかった。

だが「蘇維特<sup>ソヴェト</sup>の樹立」というスローガンでは、労働者は一向に動かなかった。宣伝の不足で中国の労働者には蘇維特<sup>ソヴェト</sup>という言葉もよくわからなかった。なかには蘇維特は、蘇は姓、名は維特特という人名だとかんがえ、「そのお方はいつここにこられますか」と質問したのもあったという。

党は労働者のこのような無関心にたいする対策として、ソヴェト樹立のスローガンをうけいれる自分たちの労働組合をつくろうとした。合法的労働組合、かれらのいわゆる「白色組合」に対して、非合法の赤色組合の建設である。これは名前は赤色組合だが、実質は第二組合的で合法的組合の労働者のすべてを敵側にまわすことだった。労働組合は資本家と交渉し、労働者の日常利益をまもってこそ存在の理由がある。非合法の政治主義だけでたっている労働組合では、その本来の任務はたせない。その労働組合員であることがわかれば処刑されるような危険な赤色組合には、ちゃんとした職場をもった組織労働者はだれひとりはいらうとしない。したがって赤色労働組合にはいるものは、共産

黨員か、未組織のなかばすてばち気分のルンペン労働者ばかりだった。それについては、中共の有名な組合指導者項英さえ「赤色組合は完全に大衆の外がわに組織された」といつていた。

この当時の上海の労働運動の指導責任者は劉少奇だった。スターリン指令にせきたてられていた李立三は「上海にソヴェトが樹立された」と報告するために、劉少奇にたいし是が非でも上海の市電労働者の間にストライキをおこせと命じた。

ストライキの条件がまだ熟していないことを知っていた劉は、党中央の再考をうながしたのだが、それはききいれられなかった。かれは一方ではその命令に服従し、他方それと同時に党中央に批判書を提出した。

毛沢東は井崗山で、この劉の行動をきいて、「かれこそもっとも強靱な党性をもつ模範黨員だ」と激賞した。爾来党内では、「火伏型党性」という言葉がはやったという。「火伏」とはかまたきのこととで、この当時から劉少奇のつかっていたペンネームである。劉は抗日戦争中、北方局書記として活動するかたわら、新華日報に論文を書いていたが、そのときもやはりこのペンネームをつかっていた。現実を無視した党中央の命令にてこずっていた毛沢東は、同じ立場にあった劉の行動に、よほど感動したらしい。

一九三二年李立三を追放して党書記になった陳紹禹、秦邦憲一派から、劉が労働運動失敗——事实上は李立三の失敗なのだが——の責任者として、はげしく批判されたとき、毛沢東は極力かれを擁護

した。そのために劉は処分をまぬがれたのである。こうして両者の間には桃園の義盟からすすんで、いつの間にか党中央にたいして暗黙の攻守同盟がむすばれたのである。

## 五 農民組織は進む

都市の労働運動の完全な失敗は、中国共産党の性格にも重大な影響をあたえた。白色テロをのがれて、紅軍に加わったインテリゲンチヤや労働者もあったが、その数はごくかぎられていた。そのためにソヴェト樹立運動は、はじめからプロレタリアートに期待することができず、農民への依存度がますますつよくなった。このことは毛沢東の思想の奥底にあった伝統的農民革命への信仰をますます強固なものにした。

もちろん農民の革命的情熱も一九二六、七年当時とはくらべものにならないほど低調になっていたが、農村には農民が立ちあがらなければならぬとせつばつまった問題がたくさんあった。第一に、農民暴動のおこった地方では、帰ってきた地主たちの、残酷な復讐がすではじまっている。耕作農民はなにかの形で農民協会に關係していたから、たとえいま迫害をうけていないものも、いつかは復讐されるとかんがえて、戦々競々の毎日をおくっていた。かれらは地主の迫害が身にせまれば、いやでもたちあがらなければならなかった。それゆえ紅軍がかれの村の付近にきたといううわさがつたわ



ると、かれらのなかの幾人かは、村をすてて紅軍に参加した。

それでなくとも中国の農村には、農民暴動に自然発火する原因は、ごまんとあった。耕地も農具も少ない中国の農家では、家父長は子供たちが大きくなっても分けてやる土地はない。そんな「田分け」たことをすれば、家族全員がくえなくなる。それゆえ家父長は子供たちが成長し、妻をめとつても、その妻と子ども一家の労働力として使用する。中国では都会の工業が未発達であるから、農業以外に農村のあまった労働力を吸収し「燃焼」させるところがない。子供たちは父の家からとび出しても働くところがないから、どんな卑屈な思いをしても家にしがみついて家父長のもとに金銭報酬のない労働をつづけなければならぬ。それゆえ家族制度の内側は、そと目で考えられるような愛情にみちたものではなかつた。康有為（毛沢東が青年時代に尊敬していた清朝末期の改革論者）が「大同書」のなかで、「その門外を視れば太和蒸蒸、その門内をたたけば怨氣、盈溢、けだし凡そ家あればよくまぬかるなし」といつているように、不平と憎しみが渦をまいていたのだ。

この家族制度のなやみは毛沢東自身、少年時代に身をもって体験していた。毛は農村の青年たちに、紅軍に参加すれば土地や食物をあたえるし、かがやかしい未来までも保証すると約束すれば、かれらは共産党に革命的エネルギーを提供してくれることをよく知っていた。ただ農村には家父長にたいする絶対服従の道徳と、有力な家父長たちがつくっている長老の政権があつて、青年たちはその権威に服している。この農村の権威さえ破壊してしまえば、青年たちはこちらのものだ、というのがか

れの考えだった。

もともと中国の農村は昔から国家の警察力でおさめられてきたのではない。中国にはその警察力を全国の農村に及ぼすほど有力な政府はいまだかつてなかった。国民党もその例外ではない。そこで国民党政権の権力の及ばない山岳地帯に、梁山伯のような根拠地をつくり、革命のエネルギーをたくわえ、農村を次第に革命化してゆきながら、革命の高潮期をまつ。ひとたび高潮期がくれば、国民党の都市を包囲し、攻略する。これこそ中国の伝統的な革命様式にも合致する戦略ではなからうか。

だが農民は土地や農具をわけてもらおうと、革命にたいして急に熱意を失う弱点がある。それにたいしては太平天国の洪秀全がキリスト教まがいの理想をあたえて、農民を最後までひきずったように、かれらに共産主義の理想をあたえて社会主義建設にひきこんでゆけばよいではないか。もちろん労働者がどんな党にはいつてきて、党がプロレタリアートの党になることは理想的だが、それができない以上、党の中心を意志強固な共産主義者でかため、共産主義教育によって農民、兵士を訓育してゆくほかはない——。毛沢東は都会からきりはなされた井岡山という環境のなかで、次第にこういう考えをかためていった。この考えのなかには、おそらくかれが子供のときによんだ水滸伝のロマンティズムがおりこまれていたのだろう。

井岡山にはもともとこの地方の土匪の親方袁文方、王佐の一団がいた。毛沢東はまずかれらを紅軍に編入した。かれらは少なくとも毛がそばにいるかぎりには立派な紅軍だった。あとから参加した兵士

のなかにもならずものが多かった。毛沢東は社会からはじきだされた農村のあぶれもの、中国語で「地痞テイピ」といわれるものの革命性を重要視した。それゆえ党中央にはかれのことを「地痞主義者」とよぶものもあつた。この字句通りかどうかは自信はないが、西郷隆盛は「命もいらぬ、名もいらぬものは始末にこまるものなり、だがこの始末にこまるものならでは国の大事を共にしがたきものなり」といったと記憶している。毛沢東も革命をやるものはこのような心境のものでなければいけないと思つていたにちがいない。かれはどんな人間でも政治教育によつて改造することができるとかたく信じていた。人間の意志は人間の環境をかえることができるというのが、かれのあらゆる分野において一貫した信念だった。かれが後年、このことについてよくひきあいに出した人物は、匪賊から紅軍の模範となつた賀竜將軍のことである。

賀竜は一八八七年湖南省大庸県に生まれた。毛よりは四つ年下である。かれは十六歳のとき、湖南省西部の大飢饉に遭遇した。そのとき農民は食べるものもないというのに、軍閥は普通の年と同じような、たかい税金をとりたてていた。若くて感受性のつよい賀竜は、仲間数人をかたらつて、隣村の軍警屯所を襲ひ、そこにあつた小銃四十挺をうばつて、山ににげこんだ。それからかれの土匪としての生活がはじまる。

その頃農民は税金がはらえないと、腰まで水につかる水牢にいれられた。誰かがかれのために金を都合しないかぎり、その生命は保証されなかつた。そのため農民はしばしば「典妻」といつて女房を

質にいられて税金を支払う金をつくつたのだ。かような環境のもとに税金のおさめられない農民たちはなかばすてばちになって、賀竜の土匪軍に加わつた。一九二二年にはかれの土匪団は一万人にふくれあがり、湖南、河南、貴州の三省を流動し、行く先きざきで地主や税吏を殺戮した。これらの地方では、土豪劣紳はかれの名をきくだけで戦慄した。湖南省政府は、武力ではかれを到底討伐できないと知つたので、一九一八年かれを、湘西鎮守使兼湖南省防軍師長に任命し、かれの部隊を省軍に収編した。

北伐のとき、賀竜はその部隊をつれて国民革命軍に参加し、第四軍の指揮をうけることになつた。

この第四軍は共産党の勢力のつよいことで有名な軍隊で、その指揮官は、のちに広東暴動を指揮した葉挺だつた。賀竜が共産主義がなにかを知つたのは、このときからである。一九二七年七月国共分裂となつたとき、葉挺は賀竜をつれて南昌にはしり、八月一日朱徳らとそこで暴動をおこした。これが八月一日の南昌暴動だ。

この暴動は共産党中央部から派遣された周恩来の命令で行なわれたもので、事前の準備はなにもなかった。案の定暴動は見事に失敗し、叛乱軍は南に敗走した。賀竜軍は汕頭付近まできたが、そこに待ちうけていた国民党軍によって、潰滅的な打撃をうけ、かれは命からがら香港にのがれた。

やがてかれは、ソ連顧問アトリフスキーと一緒に香港から上海へ、上海から漢口をへて、かれの地盤のある湖南省西部に潜入した。虎はふたたびもとの広野にかへつたのだ。かれはここで、工農紅軍

第三軍を組織し、彼自身の力で湖南、湖北西部の辺疆に新たな遊撃根拠地を開いた。それは間もなく湘鄂西ソヴェト区として知られるようになった。湘とは湖南、鄂とは湖北のこと、したがって湘鄂西地区とは湖南・湖北西部地区ということである。

賀竜は天性磊落で、かれが兵士にあたる訓辞のなかでも「他媽的」<sup>こんちやくしやう</sup>とか、「忘八蛋」<sup>ばんかやう</sup>というような言葉がしょっちゅうとび出す。兵士たちはこういうかれを愛し、「賀老总」<sup>かっおつぜん</sup>（賀のおん大将）という愛称でよんでいた。

抗日戦争中山西で、日本軍に討伐され、食べ物がなくなったとき、副官が畑から南瓜をとってきて、かれに食べさせたところ、かれは、どこから買ってきたとききたのだした。副官が、農夫がにげていないから、金を払わずにきたといったら、かれは色をなしてこういった。「ばかやろう！ 日本軍に敗けてもとりかえしがつくが、人民にすてられたら俺たちはおしまいだ。」

人生の半分を匪賊としておくれた人が、このように成長したのは、やはり毛沢東の精神教育の力といえよう。

毛沢東の権力機構のなかには、よくいえばこういう英雄豪傑、悪くいえば、社会構成からはみ出した「ルンペン・プロレタリア」的要素があつまっていたことは、毛沢東共産党の性格を次第に変えていった。とくに都市プロレタリアートの参加が非常に減少し、やがてそれがほとんどなくなってしまうという環境のなかでは、その影響は決定的だった。毛沢東はこれらの分子をかれの意志に従わせ

るために、たえず精神教育をほどこし、各自の思想検査を行なっていなければ安心できなかった。そのために党全体が毛沢東思想、つまりかれ個人の思想体系の線に沿って理解された「マルクス主義」に支配されるようになってきた。

政治教育では毛沢東自身兵士に訓話した。若いときに宋明の理学を教えられ「知ったことはかならず行なえる。知って行なえないのはまだほんとうに知らないのだ」（王陽明）と信じていたかれは、兵士たちにたいしてその実践を要求した。だが政治教育はそれだけではない。紅軍の各「団」「營」「連」のなかから「兵士委員会」がえらばれて、戦闘のあい間に兵士たちに毛沢東の訓話にもとづいた実践教育を行なった。「營」以下には兵士委員会のかわりに、「党代表」の政治指導員がおかれた。兵士委員会と政治指導員は兵士の日常利益を代表し、兵士の苦情をとりあげた。それによって横暴な将校が抑制され、兵士の不平不満が解消された。

どんな部隊にも「党代表」を配属して、政治教育を行なう、いわゆる「党代表」制度は、紅軍の特徴であった。毛沢東は軍隊の最下級単位「連」の党代表こそ党活動の基本だと考えていた。かれはこの当時書いた「井崗山の闘争」（一九二八年十一月二十五日発表）のなかでこういつている。

「一つの連の党代表がよければ、その連は比較的健全である。連長は政治のうえでは、党代表ほど大きな作用をもつことは容易ではない。」

当時は戦闘につぐ戦闘で、下級幹部の死傷が多く、戦闘経験をつんだ匪賊や敵方の俘虏を二、三カ

月で味方の連長にする場合が往々にあった。したがって、連長よりもむしろ党代表の方が兵にたいする影響力がつよかったのだ。

井岡山では、今日入隊した兵士も、その翌日国民党軍の攻撃をうければ、武器をとって戦わなければならなかった。軍事訓練のために特別の時間をさく余裕などはなかった。こういう戦闘のなかに、政治指導員はつかのまを見出し、政治教育をやっていたのだから、その苦心は大へんなものだった。やっと予定の訓練をすませたと思つたその瞬間に、国民党軍の砲弾がおちて、受訓兵士の大半がやられてしまうような場合もあった。ときには戦況が逼迫し、指導官まで前線にでて戦わなければならなくなり、訓練が中断されてしまう場合もあった。

だが政治教育の本源が毛沢東であるかぎり、兵士たちは党やマルクス主義に忠実な兵士ではなく、毛沢東がマルクス主義と考へたものだけしか受けいれない兵士となっていく傾向があつた。

李立三は毛沢東の周辺におこつてゐる、このような発展に無関心ではいられた。プロレタリアートが指導しない共産党は、かれには非常な異端だと思われた。そこで一九二八年十一月党中央は、農民運動のプロレタリア化（「クレンゼン化工人化」）を主張し、プロレタリア指導のない「農民的心理」は、革命を完全な破壊にみちびくと警告した。

これにたいして毛沢東は、中国人のよくやる「ようけんじやうしていんたがう陽奉陰違」つまり表向きは先方のいうことをみとめ、うらではこつちの思う通りにやろうとした。かれは一九二九年四月五日党中央にこう回答して

いる。

「党中央のいうように、党が『プロレタリア的基礎』をもたなければならぬということには、賛成であります。たしかに都会の闘争を放棄し、農民ゲリラに耽溺することはまちがいであります。」

だが、と、その手紙は、こうつづいている。

「われわれの意見では——もしも党のメンバーがこういう意見をもっているとすれば——農民の力が労働者の指導権を圧倒し、革命にマイナスになるからと考えて、その発展をおそれることもまちがいであります。半植民地中国の革命は、農民闘争から労働者の指導をうばってしまえば失敗するでしょう、だが農民闘争が発展して、農民の力が労働者よりも強力になったからといって失敗することはありません。」(『シユラム毛沢東』)

実に巧妙な論法である。毛は李立三の一撃をうけながしながら、たくみに相手に反撃を加え、農村で自由にふるまう権利を獲得してしまった。そればかりではない。農民運動がよくなるのがそんなに心配なら、お前たちはそれを圧倒するほどに労働運動を強化したらよいではないかと開き直っているのだ。

こうして都会のプロレタリアート運動が、手もあしもでないとき、井岡山では、マルクス主義の旗のもとに、党、軍の「毛沢東化」がつづけられていた。



## 六 李立三路線の崩壊

中国共産党中央部は都会における党活動の停滞につれて、毛沢東のやっているゲリラ活動が、次第に党の主要な活動になってきたことを感じた。そしてかれらはこう考えていた。毛の農民遊撃隊は本質的にはプロレタリアートの運動ではなく、ルンペン・プロレタリアート運動だ。たとえ農村ゲリラ活動が農村でどんなに発展しても、それだけで、国民党政権がたおせるものではない。いな、このまま発展していけば中国共産党そのものも、プロレタリア党ではなく、農民とルンペン・プロレタリアの党になってしまう。しかしいまは毛沢東のゲリラ活動以外に運動らしい運動がないとすれば、その本質を変えて行かなければならない。これがスターリンや李立三のなやみであった。

事実その頃中国共産党内におけるプロレタリア分子の比率はだんだんひくくなっていった。これはすでに中共の機関誌紅旗でも、公然と論ぜられており、それによるとその比率は、一九二八年にはまだ一〇パーセントであったが、二九年には三〇、三〇年には二パーセントと、さがってゆくばかりだった。中国共産党が都市プロレタリアートからはなれて農村革命に依存するようになっていけば、中国革命はこれからさきどうなるか。この問題について一九三〇年三月、李立三はこう書いている。

「農村は支配階級の四肢であり、都会はその頭脳であり、心臓である。もしわれわれが、頭脳と心

臓をきるならば、かれらは死をまぬかれない。だがわれわれがかれらの手足をきりおとしても、かれらはかならずしも死ぬとはかぎらない。」

コミンテルンもこれと同じような考え方で、毛沢東の農民ゲリラ活動がどんなに発達しても、それは中国革命にとっては副<sup>サイドカレント</sup>流にすぎないという意見だった。つまりコミンテルンも、李三立も、ソヴエトの樹立は重要なことだが、それは山村のなかにたてても大した意味はない、都会にたててこそはじめて意義があると考えていたのだ。

大都會を占領するには、外部から農村遊撃隊が攻撃すると同時に、内部から共産党が呼応して、蜂起しなければならぬ。現在都會内部の共産党勢力が、ほとんどゼロになっているときに、外部から、装備のわるい農民ゲリラ隊が攻撃しても、成功するはずはないのだ。だがスターリンは、中国共産党にそれをやらせようとした。

スターリンは一九二七年国共分裂直後、革命退潮期はすぐにおさまり、まもなく、再び革命の高潮期がやってくると考えた。それゆえ一九二九年、蔣介石、馮玉祥、閻錫山の間に、新たな軍閥闘争がはじまるうとしたとき、コミンテルン執行委員会から、中国共産党中央にあてて、次のような指令がとんだ。

「これこそ新しい革命の波の開始<sup>イニシヤルポイント</sup>点である。いまこそ党は、あらゆる軍閥の勢力を破壊しなければならぬ……『軍閥戦争を階級的内戦に転化せよ』『地主ブルジョア<sup>ブルジョア</sup>の連合の勢力を顛覆せよ!』

かくの如きがいまや党の主要にして緊急なスローガンとならなければならぬ。」（一九二九年十月十日書簡）

こういうふうには、コミンテルンから尻をたたかれると、もともと楽天主義者の李立三は、いやがうえにもほりきらざるをえない。一九三〇年五月蔣介石と馮玉祥の間に戦争がおこると、これこそ革命の高潮、いまこそ中国共産党が、国民党政権を打倒するときであり、同時にこれをきっかけに、全世界の革命がはじまるときだと考えた。かれは早速、この見透しをもとにして、「新たな革命の波と一省または数省における勝利」という、有名な決議（一九三〇年六月）をつくりあげた。それは中国革命が世界革命に発展する以上、中共はコミンテルンに請うて、ソ連から満洲に出兵させ、対日戦争を宣戦し、世界大戦をおこし、もって世界革命を完成しよう、というすばらしい構想だった。夢ものがたりにしても規模は大きい。しかし当時のスターリンは、ソ連一国の安全のためなら、中国共産党くらい、よろこんで犠牲にするが、中国革命のために世界大戦の危険をおかそうなどは夢にもかんがえていなかった。それゆえ李立三はあとでコミンテルンのマヌイルスキーから、「極端な地方主義」（ハイタテイフアンシウイ）有害の地方主義だと批判された。もっとも李はロシア人を、「狭い民族主義的偏見」だとやりかえしている。スチュワート・シユラムは、李の考えのなかには、あきらかにかれの「中華思想」があらわれているといっている。

李の決議はさらにこうもいっている。

「中国は世界帝国主義の支配連鎖のもっともよわい一環だ。ここは世界革命の火山がもっとも噴火しやすいところである。それゆえ、全世界における革命的危機の現在の集積とともに、おそらくここで世界革命がまず勃発し、世界革命と世界の最終的階級戦争となるであろう。」

世界革命は中国からおこる。李のこういう情勢分析は、林彪の「人民戦争万才！」にあらわれた毛沢東の「世界革命戦略論」と一脈相通するものがある。教千年の伝統をもつ「中華思想」の根はふかい。

李はこういう思いあがった観方から、武漢や長沙の大都市を占領する計画をたてた。

かれの計画は、革命の退潮期と共産党の実勢力を、正しく評価しなかったことが致命的だった。たとえば武漢の内部で暴動に蹶起するはずの共産党勢力はどうだったろうか。そのとき、「武漢で中国共産党が動員できた党勢力は、党员わずかに二〇〇名、赤色労働組合員一五〇名にすぎなかったのだ。（一九三〇年十一月十六日コミンテルン執行委から中共中央への手紙）」

李は一九三〇年七月、長沙守備にあたっていた何鍵が、対蒋介石戦に兵をさいて、その防備が手うすになっていることをさいた。時をうつつさず長沙攻略の指令を彭德懐にあたえた。彭德懐の第三軍はただちに行動にうつり、二日間ここを占領することに成功した。もちろん何鍵の援軍がもどつてくると、たちまちそこから撤退した。

九月にはいると李は再び毛沢東、朱德、彭德懐に長沙の占領を命じた。このときはかれらのほとんど全軍が攻撃に参加したが、かれらは非常な損害をこうむり、ついに長沙は占領できなかった。毛沢

東は井岡山にひきあげてしまった。かれはこの事件の結果をスノーに、こう述懐している。

「この失敗は李立三路線を破棄するのに役立ち、李が主張していた、致命的な武漢攻撃が、おそらくもたらしたであろう損害を、紅軍はうけずにすみました。当時の紅軍のおもな仕事は、新しい部隊を募集して、新しい農業地域を、ソヴェト権力のもとに強化することでした。このような政綱にとつて、長沙攻撃は必要ではなく、攻撃じしんのなかに冒険の要素をふくんでおりました。」

毛沢東は自分がせっかく養ってきた紅軍の兵士を、装備のよい、国民党軍がまもっている都会を攻撃することによって消耗することは、たまらなくくやしかったにちがいない。かれが「新しい農村をソヴェト権力の下に強化する」といっているのは、革命のエネルギをたくわえつつ、じっくり時期を待つ、ということである。長沙攻撃が失敗し、李の武漢攻略計画がだめになったとき、李立三とその後にあったコミンテルンの外人たちが失脚したことは、おそらく毛にとってはひそかなよろこびだったにちがいない。

第三章 苦難の時代

## 一 中華思想

毛沢東というひとは、湖南の田舎に育っただけに、外国人とつきあうのはあまり好きではなかったようだ。学生時代から外国語はひどく苦手だった。かれが友人たちを留仏勤労学生としてフランス留学におくり出して、自分だけは北京に勉強にいったのも、おそらくこういった関係からであろう。

中国共産党の創立以来、上海、広東、武漢で、ロシア人との接触はもっていたが、それはやむをえないつきあいで、自分からかれらに近づいたのではなかった。革命に金を出してくれるのは、ありがたいが、わかりもしない中国のことを、なにかも知りきった顔で指図する外国人は、自尊心のつよいかれとしては、がまんならなかったにちがいない。

かれの伝記作者ロバート・ペインは、毛の外国人ぎらいについてこういつている。

「中国についてほとんど知らず、中国人に忠実でもない山師どもは、自分たち仲間で議論し、国際共産主義の名をかりて、中国歴史の幅広い流れについての権威であると自認していた。かれらが中国革命に役立ったことを暗示するような証拠はありはしないし、外国語をよく知らず、大体外国人をひどく軽蔑している毛は、かれらに言及することはまれで、しかもそれは、軽蔑的であった。」

かれは、コミンテルンの指令にたいして、他の中共指導者のように、盲従的ではなく、ときには真正面から反対した。コミンテルンの極東代表M・N・ロイは毛沢東を、「一九二六年、二七年のすべての革命計画を故意に、かつ執拗に妨害した人間のひとりだ」といつている。

毛沢東にとって幸いなことは、井岡山や江西ソヴェトは、党本部のあった上海から遠くはなれていたので、コミンテルンからきた外国人と折衝することもなく、また党本部の指令が氣にくわなければ、わざと報告をのぼしたり、実行を見合わせたりする手もあつた。それにともかく、労働運動の実践できたえた李立三という人物が中間にいたので、あまりにも中国の現実にあわないコミンテルンの指令にたいしては、李自身がレジスタンスをこころみた。李立三はコミンテルン代表に、君たちは、コミンテルンに忠実でなければならぬといつているが、われわれはまず中国に忠実でなければならぬといつ考えている、と聞きなおつたことさえあつた。

実はコミンテルンが李立三を批判したのは、政策そのものよりも、むしろかれのこういう態度だつた。ベラ・タン（一八八六年生れのハンガリーの革命家、コミンテルン執行委員）は、李は中国の「民族的



特殊性」を強調しすぎる、つまりあまり中国の立場を主張しすぎると、かれを批判した。結局中国共産党は、もっと忠実にスターリンの指導に従う指導者の手に委ねられることになった。

一九三〇年の春、スターリンの命をうけたパーヴェル・ミフはモスクワの東方労働大学、別名中山大学でかれが教育した中国の学生をつれて上海にのりこんだ。これらの学生たちはのちに「ミフの二十八人衆」とよばれるようになった一団である。しかしかれらのなかでほんとうにミフの手足となったものは、陳紹禹、秦邦憲、張聞天、王稼祥である。

王明というペンネームで知られている陳紹禹及び秦邦憲、王稼祥はいずれも一九二〇年頃上海大学の学生だった。当時の上海大学というのは、河上肇のいた、ひと頃の京大のような大学で、有名なマルクス主義者陳望遠、施存統が教鞭をとり、学生の間ではマルクス主義の研究が非常にさかんだったので、かれらはなんの抵抗もなく、この風潮にまきこまれてしまった。たまたまモスクワでは東方労働大学がひらかれ、中国の留学生を大量に募集していた。ソ連は中国共産党に、労働者出身の青年一七五名、農民出身の青年一〇〇名の留学生をおくるように命じた。労働者出身ということが、ほとんど唯一の制限だったが、陳独秀を中心として、インテリでかたまっていた党中央は、労働者、農民は本もろくに読めるものがないし、外国に行つて、生活水準が高くなれば、腐敗しやすいため、という理由で、ほとんどインテリ学生ばかり募集した。そのなかにかれらがいたというわけである。

東方労働大学の初代校長は、ポーランド革命家で、のちにトロツキストとしてスターリンに肅清さ

れたカール・ラデックだった。スターリンはラデックをやめさせ、自分の中国政策の擁護者として知られたパーヴェル・ミフを学長にすえた。ミフの最初の仕事は学生のなかのトロツキストを摘発し、追放することであった。陳紹禹はロシア語がうまいところから、このミフに可愛がられ、かれの秘書として働いた。このころからすでに陳を中心として秦邦憲、王稼祥、張聞天などの一団ができあがっていた。

同じ王明グループでも、張聞天は教育も経歴もかれらとちがっている。かれは一九〇〇年の江蘇省の生れで、南京の工科学校をでて米国にわたり、カリフォルニア大学にまなんだ。一九二三年米国から帰国すると、そのまま上海の中華書局編訳所にはいり、雑誌の編集に従事した。当時の上海のジャーナリズムは、共産主義のルツボであった。そのなかでかれはいつしか共産主義者となり、そして一九二五年陳紹禹らとともにモスクワにいったのだ。

ミフが、これら学生グループをひきつれて、上海にのりこんだ頃にはまだ党中央は李立三一派でしつかりかためられていた。そこには千軍万馬往來の周恩来があり、瞿秋白があり、労働者出身の何夢雄ありで、王明たちのような革命経験のない若い学生たちだけでは到底歯がたたなかつた。しかしこれらの背景にはスターリンがあり、ミフがあつた。まずスターリンは李立三をモスクワによびよせ、こっぴどくその政策を批判したあげく留学という形でソ連に抑留してしまつた。李立三は一九四五年にいたつてはじめて中国にかえされたのである。

翌一九三一年一月七日に開かれた中国共産党中央委員会第四回總會、略称「四中全会」では、ミフが強硬に主張して、陳紹禹グループを党指導の座にすえてしまった。党中央はミフに反対すれば、ソ連からの運動資金が断たれてしまうことをよく知っていた。当時党の中央委員は、みな非合法活動をしていた。非合法生活は金がかかる。ロシアの金をけて、自分たちで金をあつめようとしても、都会にはもはや運動資金を出してくれるような革命的大衆はいなかった。こういう環境において老幹部たちは、一応ミフの言うことをきかないわけにいかなかったのだ。

王明らは国内で毛沢東、朱徳、彭徳懷らが血みどろの闘争をしていたとき、ソ連でのうのうと学生生活をおくっていた。ここでのうのうという形容は、あるいはあたらなかもしれない。かれらはソ連でスターリンとトロツキーの血なまぐさい、同志相克のすがたを目のあたりに見ており、自身、この闘争に加わっていたからだ。かれらはこの経験を中国にかえて党内にもちこんだ。しかしかれらだけではとても老幹部たちをおさえつける力はない。そこでスターリン、コミンテルンの権威をかりるために、「コミンテルン路線への完全にして無条件の献身と忠誠」というスローガンをうち出した。李立三は国内の同志には、「コミンテルンにたいする忠誠は一事であり、中国革命にたいする忠誠は別の一事である」といっていたくらいで、そこには若干の独自性がみられたが、王明らの場合はほんとうにコミンテルンへの「無条件の忠誠」を要求し、これを規準として、李立三路線を支持した老幹部すべてに「自己批判書」の提出を命じたのだ。老幹部たちはいやがおうでも、これまでの

自分を、すなわち李立三に盲従した意気地のない自分を頭から否定しなければならなかった。瞿秋白は、「私は卑怯な機會主義者でした」と、自らをさげすみ、周恩来は、「私は全党員に私の誤謬を罵倒することを要求する」と、王明の前にひれふした。

時代はちがうが、この「コミンテルンへの無条件的献身と忠誠」というのを、「毛沢東思想への無条件的献身と忠誠」とあらため、そのうえに、瞿秋白や周恩来のかわりに劉少奇、朱徳、賀竜などが、学生たちに、「私は卑怯な反党的修正主義者でした」と自己批判をせまられている姿を想像してみれば、そこに「文化大革命」がうかんでくる。権力闘争が一世紀の三分の一期をへだてて、同じような形をとるのは、たんなる歴史の皮肉ではなさそうだ。この国にはもともとこういう政治的クライメイトがあつたといえよう。

もちろん党内には、あくまで王明に反対するものもあつた。たとえば、プロレタリア出身の何夢雄の一派がそれだつた。このグループは一月七日、王明らにたいするレジスタンスについて討議するたため、上海のホテルに秘密会合をもつた。その日、イギリス租界警察は、突然会場をおそい、何夢雄以下二四人を逮捕し、国民党に引渡してしまった。かれらはのこらず竜華で処刑された。これは、はっきりそうだと証明できる問題ではないが、その当時一般には王明一派が、敵の手をかりて、その反対者を肅清するために、かれらを密告したのだといわれていた。

江西の山奥にいた毛沢東は、上海におけるこういう闘争にはまきこまれなかつた。毛沢東と朱徳の

軍隊が江西省の瑞金と寧都の間にある平原で国民党軍一個師団をやぶって、かなりの地域を占領したのは一九二九年二月であった。かれらはそこを「中共ソヴェト区」とよんだ。それと同時に江西省東北部では方志敏を隊長とするもつと小さな部隊が同じような根拠地をつくった。また湖北の洪湖ちかくでは賀竜がやはり根拠地をひらいていた。これら広い地域にわたって散在する各地域はやがて「ソヴェト中国」として知られるようになった。もちろんその中心は中央ソヴェトで、これはその所在地の関係から江西ソヴェトともいわれていた。毛沢東はそこから遠くはなれた上海での党中央の闘争を見まもっていた。といつても決して高見の見物というわけではない。当時から自身江西ソヴェトのなかに残存していた李立三の勢力によって権力の座を脅かされていたからである。

一九三〇年七月、李立三のつよい影響下にあつた江西西南部特別委員会と、劉敵藻にひきいられた第二十軍の將校とがしめしあわせ、毛沢東がその年の二月に江西ソヴェトをつくつて以来とつてきた富農偏重の農民政策に反対する大会をひらいた。当時の毛沢東の農民政策は、李立三よりももつと右よりで、富農の土地は没収しないばかりでなく、良い土地を悪い土地に、強制的に交換させるようなこともやつていかなかった。

なぜ毛沢東がこんな富農優待政策をとつたのであろうか。江西ソヴェトはひどく辺鄙な山岳地帯のなかにあつて、土着の工業はほとんどない。農民は、米、竹、紙、桐油を生産し、それを外省に売つて塩、衣料、石油、マッチなどを買つて生活していた。この交易ができるものは商人であり、商人は

同時に富農でもあった。そのため富農を絶滅することは生活の必需品たる塩、石油、衣料、医薬などの輸入路を自らふさいでしまうことになるからである。

しかし毛の富農政策は、モスクワでもすでに問題になっていた。したがってこの大会は、本質的にはコミンテルン——党中央と毛沢東の間の鬭争の延長ともいえるものだった。

毛はこれまで党本部から、どんな無理な指令をうけても、それを黙殺するという手があったが、自分の膝元で、自分の権力をねらうものがあらわれたからには、もう容赦はしなかった。こういう場合のかれの行動は、機敏で決断力そのものである。この年の十二月はじめ、突然江西西南部特別委の指導者数名を、A・B団のスパイとして捕え、富田の牢獄に収容してしまった。

A・B団というのは、アンティ・ボルシェビキ団の略名で蒋介石がつくったということになっているが、実際の正体は今日でもまだ明瞭にされていない。いわばまぼろしの反共スパイ団である。その当時の記録によると、A・B団はソヴェト内のレーニン研究会、紅色クラブ、紅色救援会、ソ連友の会のような団体に侵入し、その勢力を拡大し、時間がくると、なかから反共革命をおこすというのだ。波多野乾一氏の中国共産党史のなかにはこういう記録がある。

「共匪の幹部らはA・B団を以て獅子身中の虫となし、テロ手段を以て彼らに臨んでいる。すなわちA・B団分子が発覚するや、共匪はその罪の軽重を問わず、又人数の多寡によらず、矢庭に死刑に附している。過去において殺害された江西のA・B団員は無慮二万以上に達するといわれ、就中第三

軍長黄公略の部下に最も多かつた。黄の部隊は一万人に足りないが、しかもA・B団員と目されて殺されたもの三千人に達するという。」（中国共産党史第二卷八二頁）

ひとつの軍団の三分の一が蔣介石のスパイであるなどということはありません。しかも、そのありえないことのために三千人が殺された。このことは、誰かがこのまぼろしのスパイ団にたいする大衆の恐怖と憤懣をおおって、大量虐殺を組織したことを示唆している。

富田事件の経過からみると、このだけかはどうも毛沢東のようである。十二月九日富田付近の東固トコにいた劉敵藻の第二十軍は、捕えられた同志を奪回するために、「反毛擁李」の旗のもとに、叛乱をおこし二カ月ほど毛沢東と対立していた。この間に彭徳懐の第三軍も叛乱軍に参加しようとした。が、このときかけつけた彭徳懐は、かれの軍隊を説得し、叛乱をくいとめた。そのために形勢は逆転し、叛乱軍は武装を解除され、劉敵藻は捕えられた。毛沢東はこの間およびその後、李立三側とみられるものすべてをA・B団員として処刑してしまつた。公表したその数は、四、四〇〇人。したがって、全軍で二万人以上がA・B団として処刑されたというのは決してデマではなかつたのだ。

上海では、王明が李立三の権力をうばつて党中央の完全な実権者となつた頃、江西では毛沢東が、かれらの反対派を根こそぎ殲滅し、この地区の完全な実権者となつていた。

都会におけるプロレタリア運動がますます下火になるにつれ、中国革命における毛沢東のソヴェト運動の比重はますます高まつた。この事實はスターリンもみとめないわけにいかなくつた。政治そろ

ばんの天才毛沢東は、この情況からかれの未来をはじき出そうとしていた。かれはおそらくこう考えていたであろう。自分の成功は党中央の命令に盲従して、下手に動かなかつたことであつた。スターリンや、党中央は、階級闘争の現場の事情を知らずいつも馬鹿げた命令を出す。そのためにかれらはいままで中国の革命家や労働者、農民の血をどのくらい無駄に流したかしのれない。自分はそんなことはやりたくない。自分はかならず革命を成功させ、自分も生きのこることができるといふ、確信のある闘争だけをやる。だから私は大衆に向かつて、私に絶対服従せよ、と要求する。かれらは私についてくるのが一番安全であり、かつそれが確実な勝利の道につながるからだ。

この考えはだんだんかれの確信へと発展していった。かれの信念があまりにかたいので、かれの周囲のものもかれのそばにいつしか感化され、かれと同じような確信をもつことができた。国民党軍にかこまれ、壊滅の一步手前で紅軍をささえたものは、なによりもこの一団の指導者、毛沢東のこの信念だつたのだ。

## 二 周恩来、毛沢東の実権を奪う

上海の王明たちが、モスクワからあたえられた新しい任務というのは、「真の労働者、農民の紅軍」を建設することだつた。そのため都市では、紅軍のため兵士をつのが主要任務になつた。



李立三は毛沢東の活動を、人のいない山のてっぺんで革命をやるつもりかといひ、「革命上山主義」とあざけたが、いまや党中央が先にたつて、革命を山にあげる工作に大わらわになった。毛沢東の江西ソヴェトが革命の主流になってしまい、都市の労働運動の方は副流サブ・カレントとなつてしまった。そこでかれらは紅軍を毛沢東の手にまかせず、それを「眞の労働者、農民の紅軍」にしようとしたのである。

一九三一年の秋、党中央はこういう任務をもつて、上海から江西ソヴェトにのりこんできた。もちろんそのほかにも理由はある。実は白色テロの荒れくるう上海では、もはや動きがとれなくなつてしまつたのだ。毛沢東はこれまで、かれらから氣にいらぬ指令がくれば、その実行をサボつたり、実行をわざとおくらせたりすることもできたが、かれらが現地をすえてしまうと、もうそんなことはできない。両者の鬭争はもはや避けられなくなつた。

王明、秦邦憲のわかものたちだけだつたなら、毛はかれらをうまくあしらうことができたであらう。だが、かれらのなかには周恩来という人物がいた。周は毛がこれまで闘つた相手とはまったくちがつた種類の相手だつた。かれらは到着するやいなや、コミンテルンの指令をふりかざして中央ソヴェト政府の創設を要求した。それについては、すでにその年の六月にコミンテルンからの指令があり、また八月二十六日には再び周囲のソヴェト地区を合わせて「できるだけはやく、もっとも安全な場所に中央ソヴェト政府をつくれ」という催促がきている。しかし毛はそれまで真面目にこの問題にとりく

もうとはしなかった。党中央がそばにきて監視していたのではもうのばすわけにはいかない。

一九三一年十一月瑞金で全国ソヴェト会議が開かれた。その会議で、中華ソヴェト共和国が生まれ、主席に毛沢東、副主席に張国燾、項英がえらばれた。毛が主席にえらばれたことは晴れがましいことではあるが、実はこれによって政府におけるかれの独裁的な権力がいちじるしく制限されたのである。張国燾は党歴では毛の先輩であり、かつ理論に活動になかなかのきけものだった。これをきっかけに毛の権限は日一日と縮小されていった。毛はまず周恩来のたくみなかけひきに見事にしてやられたのだ。

このときの党大会では、毛沢東のゲリラ戦術と、かれが中央ソヴェト区と周囲のソヴェト地区を結合させる努力をおこたったことが批判された。そして紅軍の指揮権の一部は周恩来に引渡された。毛は目にみえないカミソリで自分の身がけずられる思いをした。周恩来の手は次第に紅軍の中心部にのび、一九三三年の五月には、周は正式に紅軍の総政治委員に任命された。これは紅軍全体が周の命令をきくようになったことを意味する。

それにしても毛沢東はなぜ周恩来にやすやすと「奪権」をゆるしたのであろうか。これはいささか不思議だ。そこに考えられる理由のひとつは、この当時外部で毛沢東はしばしば肺病やみだとつたえられたように栄養失調からひどく健康を害し、よく病気をしたことであろう。香港の毛沢東研究家劉富蘭は「一九二九年から一九三四年の間に毛沢東は前後四回大病をやった。そのときかれの妻賀士貞

がかたわらでいつも看護にあたった。一九三二年末から一九三四年十月まで二年近くの間、毛沢東は党中央の処分をうけ、ソヴェト区の閑職におかれ、一度などは江西省興国県で農村調査をやらせられていた。これは毛の政治生活中もっとも圧迫をうけた一時期であろう。この苦悶の生活のなかに影のようにかれのそばにいたのはただ賀士貞ひとりだった」（明報月刊三月号一二頁「毛沢東の家属」）といっている。

それにしても毛は、はじめてえたいの知れない才能をもつ男を敵にまわしたことを知った。

周恩来には彭德懐のように三軍を叱咤する迫力はない。劉少奇のように相手に一言の反駁もゆるさない理論体系もち合わせていない。だが多くの人の集まったところで、話しあっていると、いつのまにか大勢はかれの意見にかたむいてしまう。ともかく毛沢東は、自分が養成した紅軍の指導権が完全にかれの手にうつってしまったことに気がついた。

周恩来くらい中国共産党内に顔のひろい人はいない。中国共産党史のどの局面にも、かれが顔を出さないとこころはないといっているくらいだ、中国共産党が成立する以前に、周恩来はバリで毛の親友であった蔡和森らと一緒に、その当時フランスに大ぜいきていた中仏勤工儉学会のアルバイト学生たちをあつめて、「中国共産主義青年団」を組織した。それには陳毅、聶榮臻、李富春、李立三、蔡暢、王若飛、趙士炎など若ものばかりでなく、当時四十歳の徐特立も参加していた。コミンテルンのデイミトロフなどは、周恩来のこの組織力を非常にたかく買っており、中国では陳独秀に匹敵する人

物とみていた。

その当時、毛沢東はまだ長沙で黙々と小学教員をやっており、朱徳は雲南で阿片を吸ってねむりかけていた。もっとも朱徳は、それから一年たつたないうちに奮起して、阿片のキセルをふみくだけき、四人いた妾に縁ぎり状をわたしてドイツに渡り、ハンブルグで周恩来にあっている。

周恩来は欧州から帰国するとすぐに、黄埔軍官学校の副校長兼政治部主任にむかえられた。そこでは林彪、葉挺、聶克、鄧子恢、羅瑞卿、黄克誠などを識った。これらの将校たちがやがて紅軍のバックボーンとなったのだ。

上海では例の「四・一二」事件、すなわち蔣介石が上海総工会の労働者を襲撃し、虐殺した事件のおこったときには、かれは総工会の労働者ピケット隊の副隊長としてあやうく殺されるのをまぬがれたひとりである。

南昌暴動のときは朱徳、賀竜、葉挺などと行動をとりにした。広東コミューンときには、現場にいたかどうかはわからないが、少なくとも、その計画には参加していたようだ。こうしてみるとかれの行動半径は、毛沢東のそれよりもはるかにひろいことがわかる。

かれは紹興酒で有名な紹興(浙江省)で生まれ、のちに江蘇省淮南にうつった。紹興は酒ばかりでなく、上海浙江財閥発生の地として知られている。ここの出身者は、よい意味でも悪い意味でも、いわゆる「上海人種」の性格として知られているものをもっていた。大胆で目先きがきき、人あたりがよ

く、芝居が多く、そして適当に薄情である。要するに世わたりの達人なのだ。しかも彼ほど上海人の特徴をみごとに發揮している人は少ない。党内の潮流のうつりかわりを、かれほど敏感に察知する人はいない。そしてかれは勢力バランスがかわるその寸前に、機をうつつさず主流にのりかえる。だからその中共党史に現われた有名な指導者が、つぎつぎ倒れていったのに、かれだけはいつも「不倒翁」(おきあがりこぼし)といわれるのだ。

陳独秀が党の実権をにぎっていたころ、周恩来は陳の股肱だったが、瞿秋白が、陳にかわって党書記に任ぜられると、かれは今度は瞿秋白のブレイン・トラストとなった。李立三が党の実権をにぎったときには、かれは中央政治局書記のポストについた。一九三一年王明が李立三を倒して党の実権をにぎったとき、かれはやはり中央政治局書記のポストをあたえられた。そしていまかれは四カ年の地下工作から江西省瑞金の太陽のあたる丘にとび出して、毛沢東と相對することになったのである。

周恩来が紅軍政治委員になったことは、毛がかれによって紅軍指導権をうばわれたことを意味するかどうかは、まだ議論のあるところである。スノーなどは、毛沢東がこの間他のものに権力をうばわれたことを認めていない。かれはこういつている。

「当時政治的内部の抗争で一、二の政治的見解なり、路線なり、またはこの両者ともが外見上、毛に不利に見えていた際にも、じつは共產主義者のいわゆる『生命力』たる軍事力ないしは、その現実の把握が、いっそう強力な決定権として働いたのであった。理論闘争の際にもつねに毛と朱徳が協力

している事実と記憶がのしかかった。これは華南における毛のライバルすべてにとって、抜きがたい障壁であった。」

だが少なくとも江西時代のある時期、毛が軍の指揮からはなれたことは否定できない。一九三三年から三四年にかけて蒋介石の包圍作戦にたいする紅軍の戦術には、毛の得意な遊撃戦術がみられなくなった。かれらがドイツ軍人リトロフの策を用いて、陣地戦を採用したことは歴史的事実である。毛は長征の途中遵義会議で、秦邦憲、リトロフらの作戦のこのあやまりを批判して、かれらから「奪権」した。ただしその陣地戦を採用したことについて、毛自身は自伝で「私たちのあやまち」という表現を用いて、かれ自身も責任を感じていると思われるふしもあるが、それはおそらくかれ自身共産党全体を代表する立場において、こういったものであろう。

つづいてもうひとつ異説を紹介しておこう。それはアメリカの中国学者ベンジャミン・シュワルツの引用している李昂という人の説である。それによると陳紹禹ら党中央部が江西に来たのは、かれらの意志できたのではなく、毛沢東にむりやりによびよせられたというのだ。

「(江西ソヴェト)臨時政府の樹立後、毛はかれ自身、中国共産主義運動を全体として支配しうる地位にあると感じた。そこでかれは、かれのすきな中国の小説『三国志』の曹操の戦略、すなわち諸侯を支配するために皇帝を手に入れる戦略を採用しようとした。かれは一連の電報を中央委員会におくり、その本部を瑞金にうつすようにすすめた。その理由は、上海は『白色テロ』の危険があるこ

と、前敵委員会の参加する五中全会を召集する必要があること、およびソヴェト政府は有能な指導幹部の不足に苦しんでいるということであったのだ。

ところが中央委員会は、毛の提案に応ずることは、かれの権力下にはいることになると感じたらしく、はじめはそれに応ずる気配はなかった。そこで毛は『今後は交通が困難であるから、ソヴェト区から資金を供給することはできないだろう』という意味の電報をおくった。このおどしが、上海におけるその立場がますます不安定さをましていることとむすびついて、ついに中央委を瑞金に移転させるにいたったのである。』

だがこんなことはありえない。当時党中央部が、上海の白色テロにおびえていたことはたしかだが、毛沢東がかれらに送金をとめるとおどかして、かれらをソヴェトにひっぱったというのはでたらめだ。党中央の資金は毛沢東が出していたのではない。それがソ連からきていたことについてはあらゆる証拠がそろっている。毛沢東が、自分のやり方に文句ばかりつけていた党中央を、江西のまずしい農民からあつめた金で養っていたというのは、冗談としても通用しない。

毛沢東の軍支配権について問題がおこった頃から、蒋介石の包囲作戦、いわゆる「囲剿」がはじまった。蔣の第一回剿共作戦は一九三〇年十二月から、翌三一年一月まで、第二回はその年の春、第三回が夏であった。この三回の包囲作戦では、毛沢東と朱徳が井岡山時代からやってきたゲリラ戦術がものをいった。三回が三回とも国民党軍は大損害をうけて後退した。

毛沢東の革命戦略は、この国の伝統的な農民暴動に共産主義の精神をうちこんだものだが、かれの戦略戦術もまた中国の古い戦術、孫子の兵法に近代的戦術を加味したものだ。かれがいかに孫子の兵法を自分のものにしていたかは、かれの書いた「中国革命戦争の戦略問題」をみるとよくわかる。

「江西で第三次『围剿』とたたかったとき、紅軍は一種極端な退却戦法を実行した。（このとき紅軍は根拠地の後部に集中した。）こうしなければ敵にたいして戦勝をおさめることはできなかった。当時敵軍の数は、紅軍の十倍以上をこえていたからである。孫子のいう『其の鋭気を避けて、その惰帰（つかれてかえるところ）を撃つ』とは、敵を疲労させ、意気を沮喪せしめ、その優勢を減殺させることを指すのだ。

退却戦術の最終の希望は、敵の過失をつくりだし、またこれを発見することである。いかに総明な敵軍指揮官でも、相当ながい時間には全然過失をおかさなまいということはむずかしい。それゆえわれわれが敵の隙に乗ずる機会は、やがては結局やってくる。敵もちょうどわれわれ自身がまちがって敵に乗ずる機会をあたえることがあるように、まちがいをおかすことがある。またわれわれは人工的に、敵の過失をつくり出すこともできる。たとえば孫子の所謂『形を示す』の類（東に形を示して西を撃つ）がそれだ。かようにすれば、退却の終点がある一地区に限定することはない。あるときは、ある域からさらに退却してもなお敵に乗ずる隙がなければ、ふたたび退却して、敵に乗すべき隙の生ずるまで



待たなければいけない。」

孫子の戦術は一種の心理作戦である。客観的条件よりもむしろ主観的条件を重視するのが特徴だ。この方面でも毛沢東の考え方は一貫していた。

### 三 朱徳と南昌暴動

アメリカ陸軍の中共軍研究家、『中国紅軍』の著者ロバート・B・リッグ中佐は、紅軍の戦術がアメリカのそれとまったくちがっていること、とくにナポレオンでさえ百十一カ条の軍事教典をもっていただけに、紅軍が僅か十カ条の軍事条例しかもっていないことにひどく感心している。こういう軍隊では、多くの場合指揮官は自分の判断だけで部隊行動をきめる場合が非常に多い。それだけに指揮官と兵士の意気がぴったり合うことが絶対に必要なのだ。この点紅軍は朱徳、彭徳懐、賀竜と、指揮官の人材にはめぐまれていた。毛沢東のゲリラ戦術の成功は、これらの指揮官を、なかならず朱徳という人物をぬきにしては考えられないのだ。ここでどうやら朱徳という人物についてかたならなければならぬときがきたようだ。

朱徳という名はエドガー・スノーによると、「赤い道德」という意味だという。こういういいかたをすると、彭徳懐は「ふくれあがった道德のふところ」ということになる（彭は膨に通ずる）。朱は彭

とおなじように、少年時代人にやとわれ、農村のあらゆる仕事をやってきた。一八八六年四川省儀隴県の生まれで、毛よりも七つ年上になる。朱徳の風貌にはいまでも四川の田舎者まるだしのところが見える。風貌ばかりではない。その人柄にも四川の貧農の質朴さがよく現われている。これは、いかにも抜け目のなさそうな人物のそろっている中共首脳者の間にあって、ひとつの魅力となり、紅軍、いな人民解放軍の將校の間に、いまでも非常な人気をもっている。

四川省は湖北、湖南に楊子江によってつらなる。この大河による交通は古来から便利だ。それになまな李白の白帝城の詩がある。

朝辞白帝彩雲間 あしたに辞す白帝彩雲の間

千里江陵一日還 千里江陵一日にして還る。

兩岸猿声啼不<sup>な</sup>尽 兩岸の猿声啼いて尽きず

輕舟已過万重山 輕舟すでに過ぐ万重の山

白帝城は四川の奉節県を朝たてば一日で湖北の江陵にかえることができる。それゆえ四川は貴州、甘肅、西康、雲南貴州とも省境を接しているが、文化的にはむしろ湖北、湖南の延長なのだ。もちろんこれらの省よりも文化はずっと後れていて、四川といえはすぐに軍閥と阿片が連想される省であ

る。

朱徳の人生はその軍閥のひとり青年将校なることによつてははじめられた。金持ちの親戚があつて、かれは雲南講武堂を卒えることができたからである。わかいときのかれは阿片を吸い、女遊びにふけた。そしてときには下手な詩をつくつた。北宋の忠臣岳飛は「声伎前に満つ」というような生活をしていたというが、中国の軍人社会にはこういう氣風がのこつていたので、あながち朱徳だけを責めるわけにいかない。

朱は雲南軍の排長(班長)をふり出しに連長(小隊長)となり、旅長(旅団長)となり、やがて雲南省警察庁長に昇進した。そのころかれは四人の小老婆おかけをもち、阿片をそばから離さなかつたという。しかしかれはこうしているうちにも、自分はこんなことをしてよいものだろうか、という一抹の不安を感じていた。生来純真人だつたからであらう。

一九二二年かれは上海に行き孫文とあつた。これが、そのままおけば軍閥のひとりになつたはずの朱徳にとつて、生涯の一大転機となつた。孫文はかれに外遊をすすめ、一度米国に行つてみるといつた。だがかれが行つたのは米国ではなく、ドイツだつた。当時ドイツは第一次世界大戦のあと、革命をおこしたばかりで、いたるところ社会主義革命の霧囀氣につつまれていた。かれがそれにむせかえつたのは想像にかたくない。かれはそこで周恩来にあつた。周はすでにフランスで中国共産党支部をつくつていたくらいだから、共産主義の理論には通曉していたし、加うるにかれの弁舌である。か

たや人間革命の意気にもえている朱徳、一も二もなくかれによって中国共産党に入党した。

当時は国共合作時代であったから、共産党になったからといって、国民党員たることをやめたわけではない。一九二六年かれは帰国と同時に四川の楊森部隊の政治部主任兼国民党代表となったが、間もなくそこを去って江西の朱培徳のもとにはしつた。朱培徳はかれを重用して南昌の公安局長に任命した。それゆえ軽口のうまい中国人は、「朱培徳培朱徳」(朱培徳朱徳を培かう)といった。なにしろ公安局長が共産党員なのだから、南昌で共産主義者の勢力がよくなつたのは当然であろう。このとき朱徳のそばにはすでに陳毅がたよつて来ていた。

この南昌にあつまつた共産党勢力が爆発したのが中国共産党史で有名な南昌暴動であり、その失敗がきっかけとなって、朱徳、周恩来、陳毅、賀竜等々が井崗山という「梁山泊」に逃げこみ、毛沢東と相識るようになったわけである。それゆえいまでもこの南昌暴動の日、八月一日は中国紅軍の記念日となっている。

それについてかたる前にまず陳毅についてかたりたい。陳毅は四川省は成都の地主の地主の家に生まれ、少年時代はなに不自由のないくらしをおくつた。かれは成都工業学校の化学科をおえると、留仏勤労学生団にはいって、パリのグレイビユ電気学校に入学した。かれがもしこの学校を順調に終えたならば、帰国後は洋行帰りの新進電気技師として、ゆたかな、しかし平凡なサラリーマンの一生をおくつたかもしれない。だがこの電気学校時代に周恩来の革命思想に「感電」してしまった。

— そのころフランス政府と北京政府の間に、西南鉄道建設を条件とする借款交渉が行なわれていた。陳毅はこの借款のほんとうの目的は、北京の軍閥政府がその金をつかって孫文の革命運動を弾圧することにあるとして、中国留学生を煽動し、フランス政府に抗議デモをかけた。その結果かれは国外追放処分を受けフランスを追われた。

一九二一年帰国と同時に、重慶で「新蜀報」という小新聞を発表し、軍閥政府の攻撃をはじめた。正式に共産黨員となったのもこの頃である。国共合作の北伐軍が江西に侵入したとき、かれは矢もたてもたまらず故郷をとび出し、同郷の朱徳をたよって、朱培徳に紹介された。朱培徳はかれの人柄をみこんで、永豊県の県長に任命した。だがかれは田舎の県長をつとめあげる気持ちになれず、わずか三カ月でそこを飛び出した。そして再び南昌の朱徳をたより、こんどは葉挺部隊の將校におさまった。それからのかれの運命が、朱徳や葉挺と、そしてまた中国革命と不可分にむすびついたことはいうまでもない。

南昌ではすでにのべた情況のもとに、国民党員と共産黨員の間にいざこざが絶えなかった。一九二七年四月二日には、国民党系の省政府庁長その他が、中共系の総工会につかまってなぐられたり、国民党支部が打ちこわされたりした事件があったくらいである。そこへ南昌暴動の密命をおびた周恩来がやってきたのであるから「八・一暴動」はいやでもおこらざるをえなかった。

それはもともと周到な準備のもとに行なわれたものではなかったので、周囲の国民党軍があつまっ

て包囲体制をとると、暴動は文字通り三日天下——八月一日から三日まで——におわった。朱と周恩来、陳毅らはあわてて南に逃げ出したが、いたるところに国民党軍がまっていた。朱徳、陳毅、葉挺、賀竜、それに周恩来はばらばらになって潰走し、朱や陳毅は辛うじて毛沢東のいる井崗山に逃げこんだ。

これは毛沢東にとっては思わぬ幸いであった。毛沢東の軍隊はいわば農民や脱走兵や匪賊のよせ集めであり、毛自身も軍事教育をうけたこともなく、戦争で軍隊を指揮した経験もなかった。そこに軍事教育をうけた将校が正式の軍隊をつれてきたのだ。これからは朱徳と毛沢東の手勢が合流して、一般には朱毛匪といわれた紅軍第四軍がうまれた。第四軍といっても、第一、二、三軍があつたわけではない。北伐のとき勇名をはせた国民革命軍第四軍の名をそのままかきたまでである。そして第四軍の師団が第一〇、第一一、第一二師からなつていたのでそのまま、朱徳が軍長兼第一〇師々長、毛沢東が政治委員兼第一一師々長、陳毅が第一二師々長となつた。

当時朱徳の声望は毛沢東をはるかにしのいでいた。実際には朱徳はただ毛沢東のタクトにしたがつて忠実に動いた、いわば毛沢東のかげにすぎない。太陽がまだ地平線に出たばかりのときは、影はいつも実物よりも大きく地上に投影する。朱徳のえらいところは、自分がどんなに大きくみられようとも、それが毛沢東のかげであることをよく知って、実物のようにふるまわなかつたことである。

江西ソヴェト時代に、この朱徳や陳毅が毛と周の間にいたということは重要なことである。これら

の人間のつながりは軍指導権の毛から周への移行がそれほど険悪な空気をもさなかつたことを示唆している。もちろん党中央が上海からうつつてきて間もない頃には、周は王明、秦邦憲らと一緒に、意識的に江西ソヴェトにおける毛独裁に掣肘を加えようとしたかもしれない。だが、一九三三年頃には周は、朱徳、陳毅、それにあとから加わった劉少奇などの人間の関係を通じて毛沢東と密接にむすばれていたと思われる。この観方が正しいとすれば、そしてまた周という人物の手柄をかんがえると、かれが紅軍の総政治委員になつたからといつて毛とひどく争つたとは考えられない。

それにもうひとつ。「囲剿」といわれる蔣介石の紅軍包圍作戦は、第四回からは、それまでとまったく様相が変わつてきた。蔣はこれまでの失敗の経験から、運動戦をさけて大規模な包圍作戦をはじめた。包圍線を碉堡とよぶトーチカ陣地でかため、その包圍圏を徐々にちぢめていく作戦だった。これは重砲のない紅軍の欠点をついた戦法で、もはや「敵を深く誘い入れる」という毛沢東の戦術は通じなくなつていた。機をみるに敏な毛沢東が、このとき軍の支配権からはなれたということは、党中央に当面の責任をとらせる遠謀ではなかつたらうか。これもまた遵義会議における「奪権」という事実とてらし合わせるると面白い観方だ。つまり「かれらの好きなようにさせておこう、失敗したら責めはかれらにとつてもらおう」という寸法である。

それはともかく当時の党中央は、さかんに毛沢東の戦術をくさしていた。曰く「誘敵深入」は敗北主義だ、新たな戦術は「敵を国門の外にふせげ」「一をもつて十にあたり、十をもつて百にあたり、

勇猛果敢、勝に乗じて直追せよ」でなければならぬ。

毛沢東はのちにこういう主張をすべて小ブルジョアジーの狂燥性の表現であるときめつけた。そしてかれらは「戦略守勢の作戦はすべて不利な決戦をさけて、有利な情況においてはじめて決戦をもとめるべきである」という、内外戦争理論家の定説に反するものだった。

かれのこの考え方は「持久戦論」のなかでは、こう説かれていた。

「古代の戦争は矛を用い、盾を用いた。矛は攻撃的、敵を消滅するためのもの、盾は防禦的、自己を保存するためのものである。今日の武器もなおこの二者の継続である。爆撃機、機関銃、遠距離砲、毒瓦斯はすべて矛の発展であり、防空壕、鉄カブト、防毒マスクは盾である。戦車は二者を結合して一つにしたものである。……

自己を保存し、敵を消滅するこの戦争目的は、戦争の本質であり、一切の戦争行動まですべての本質が貫徹している。」

いかにも明快だ。敵がタンクや飛行機や重砲をもち、砲堡の包囲陣をかためて攻撃してくるとき、徒手空拳で立ちむかうわけにはいかない。それにたいする防禦手段がない以上、それに猪突猛進するのは愚の骨頂である。おまえたちがおれの言うことをきかずにやるといふなら、しかたがない。馬鹿は痛い思いをするまでさとれまい。やがてお前たちは俺の前に手をつけて教えを乞うようになる。おれはそれまで待つことにしよう。



おそらく毛沢東の心境はこういったところであろう。敵が圧倒的に強いときは、安全な場所に逃げ  
る以外に方法はない。それゆえ毛沢東の考えからいえばこのときすでに「长征」の構想がきまってい  
たことになる。おそらくかれはそれを早くから主張していたのである。こう考えると、かれが長征  
と同時にいきをふきかえたこともうなずかれる。しかしかれがそれに達するまでには、おそらくね  
むれぬ夜々をすごしたにちがいない。そしてそんなとき、かれはおそらく孫子のこの言葉を頭のなか  
で反芻していたであろう。

「善く兵を用いる者は人の兵を屈して戦うに非ざるなり。人の城を抜きて攻むるに非ざるなり。人  
の国を毀<sup>やぶ</sup>りて久しきに非ざるなり。

必ず全<sup>ま</sup>たからしめて、もって天下に争う。故に兵頓<sup>はぶ</sup>らずして利全うすべし。」

#### 四 ソヴェトの土地改革

紅軍は蒋介石の包圍攻撃を四回まで撃退したが、こちらの損害も大きかった。当時毛沢東が頭をな  
やましたのは、新しい兵員の補充だった。最初のうちは、国民党の軍隊から寝返る兵士も多かつた  
が、大部分は農村のあぶれもの、いわゆる「地痞<sup>ヂイピ</sup>」だった。

かれは一九二八年十一月にこういつている。

「遊民の成分が多すぎるのはもちろんいいことではないが、ともかく戦闘は毎日つづき、死傷者も多かつたのだ。遊民分子でも戦闘力はある。その遊民分子の補充をさがすことさえ容易じゃない。こういう事情のもとでは、ただ政治訓練の方法があるのみだ。」

かれが兵士の精神を一変させる魔術のようにいつている「政治訓練」というものは、決して紅軍だけがやっていたのではない。北伐当時の国民党軍隊にも政治委員制があつて兵士に政治教育を行なっていたのだ。国民党軍が軍閥の軍隊よりもはるかに強かつたのはそのためだつた。それがこの時の国民党軍では無意味なものになり、紅軍のなかでは士氣一変の魔術となつたのは、どうしたわけであるか。そのもつとも重要なひとつの理由は、紅軍の宣伝には現実の裏づけがあつたことである。

毛沢東の政治教育は、兵士たちの大部分が土地所有からはなれた農民階級であるという現実から出発し、かれらの毎日の戦闘が、そのまま自分たちや親兄弟、いな全国の無産階級の窮乏を解決するための戦いだという自覚をもたせると同時に、わずかではあつたが、かれらに土地をわけてやったからである。これは農民のなかから革命のエネルギーをくみ出す毛一流のやり方だつた。

江西ソヴェト区では、土地改革のときに紅軍の兵士にも平等に「分田」した。しかもその土地を「公田」といつて、周辺の農民が代耕し、その収穫を兵士やその家族のものにおくるようにした。一九三一年十二月一日発表の「中華ソヴェト共和国土地法」の第二条はこううたつてゐる。

「紅軍はソヴェト政権を擁護し、帝国主義を顛覆する前衛闘士であるがゆえに、その地にソヴェト

が成立せると、なお反動統治であるとを問わず、土地を分配すべく、ソヴェトにおいて、それに代りて耕作する手段を講ず。」

これで面白いのは、「その地にソヴェトが成立せるとなお反動統治であるとを問わず」ということだ。もちろん国民党が現在統治しているところの土地を分けてやることはできない。将来そこにソヴェト政権ができれば、その土地を兵士にわけてやるというのである。たとえば現在国民党軍に四川から来ている兵士があつて、かれが紅軍に寝返るとする、そうすれば事情がゆるすかぎり、（地主から没収した土地がたくさんあれば）すぐにでもかれらに土地をわけてやる。そしてその土地の農民がこれのために代耕して、その收穫はかれのものになる。やがてその兵士の故郷の四川省を国民党から奪いそこにソヴェト政権ができると、かれは江西の土地をかえし、その故郷で「分田」をうけることができるのだ。

兵士に土地をわけてやるには、まず地主富農の土地を没収しなければならぬ。兵士ばかりでない。土地がなくて食えない農民、すなわち貧農はたくさんいる。かれらに土地をわけてやるためにも、従来土地所有関係をご破算にして、土地の再分配を行なわなければならない。これが「土地改革」である。

土地の分配をうけた貧農は、紅軍がやぶれ国民党軍がはいつてくれば、その土地をうばいかえされるだけではすまない。紅軍側について地主から土地をうばったとかどで迫害されたり、殺された

りする。それゆえかれらはいやでもソヴェト政権を支持するようになる。こうして貧農はいつも紅軍の味方となり、紅軍はそのなかから新兵を募集することができた。

毛沢東の土地改革にはこういう政治目的があった。かれは土地改革をうまくやって、農民大衆の支持を獲得することができなかに革命がかかっていることを知っていた。これはかれが一九二七年一月湖南農民運動の実地調査当時の経験からえたものである。

かれはその「湖南農民運動考察報告」のなかで、農民の土地をもとめる欲望がいかにたくましいものであるか、それこそが中国革命の本流で、それをおさえようとするものはすべて反革命だと、こう断じている。

「非常にみじかい時間に幾千万という農民が中部、南部、北部の各省でたちあがり、その勢力は暴風驟雨のように、そのはげしさは、どんな大きな力もおさえることができなほだからであります。農民は、かれらを束縛する一切の網の目をつきやぶり、解放の路上にむかって驀進しています。あらゆる帝国主義、軍閥、貧官汚吏、土豪劣紳らは、ことごとくかれらの墓地に葬られようとしています。あらゆる革命党派、革命同志は、かれらの面前で試験をうけ、かれらによってその取捨を決定されようとしています。かれらの先頭にたつて、かれらを指導するか、それともかれらの後ろから、かれらを指さして批評するか、それともかれらの正面に立って反対するか、中国人はすべてこの二つを選択する自由をもっています。時局は諸君らがすみやかにそのいずれかを選ぶことをせまっている

のであります。」

これほど簡単な明瞭な革命の基準はない。この基準からいえば、国民党支持のために農民運動を抑止せよという指令をだしたスターリンも、その指令にしたがった陳独秀も反革命ということになる。その反対に、農民運動を激化させることが、国民党の裏切りをふせぎ、中国革命を成功させる道だといったトロツキーは革命家だということになる。

だが毛沢東はほんとに終始一貫して党内でこの基準をふりまわし、「反革命」とたたかったであろうか。残念ながらその点にはなはだ不明確だ。実はかれ自身国民党の汪精衛の代理として、宣伝部長代理に任命されていたし、そのうえ共産党の農民政策の責任ある地位にもついていた。ウィットフォード博士などは、「毛沢東はスノーにかれと陳独秀との間には、土地問題について、天地の間ほどの開きがあったという印象をあたえようとしている」が、実際は陳独秀と同じくコミンテルン路線に忠実な立場にたっていたといっている。

同博士は、これを証明するひとつのよりどころとして、現在中共で発行されている毛沢東選集の「湖南報告」では、こういう点をごまかすために、当時のものにとくに次のような手が加えられたと指摘している。

「すでに指摘したように、この報告の原文では、中国共産党の役割りを強調していなかった……これは最近おこなわれた「湖南報告」の改訂にあたって、一九二七年二月当時、共産党が、なお革命の

主導権を争う闘争にふみきれなかった統一戦線の事情を、読者に説明することもできたはずである。しかしもしそうすれば、かれは、かれと陳独秀の態度が同じであったことを、大寫しにすることになる。そこでかれは、本文の政治的調子を変える方法を選んだ。かれは、『共産党の指導』というような言葉を、原文はそういう言葉も、そういう意味合いもなかった多くの個所に挿入したのである。」

(ウイットフォード著「中国共産主義小史」ワシントン大学「中国便覧」第二巻。)

ウイットフォード博士の指摘した点は正しい。だがあの当時、あれだけはっきりした観点をうち出したものは毛沢東をおいて他になかったこともまた事実であるし、またあの報告が当時ほんの一部しか公表されなかったことも事実であった。その上に、もしもあの立場を党内のあらゆる会合で毛沢東が推進させれば、かれはたちまち「トロツキスト」の三角帽子を頭にかぶせられることは必至だった。このような点を考慮すれば、毛沢東はおそらく自分の考えはあの通りなのだが、その実行を党中央にせまるほど、自分の力は充実していないことを知っていたにちがいない。かれはどんな場合にも、勝算のない闘争はしない男だ。こういう態度は「日和見主義」ともいえるが、それは生きのこるための、終局的に勝つためのやむをえない策であった。その証拠には、かれが江西ソヴェトの実権をにぎるとともに、たちまち「どんな大きな力もおさえることのできないはげしき」で、土地革命を実行しているではないか。そしてその方法も、かれの「湖南農民運動考察報告」のでべている通りのものだった。貧農の組合をつくって村の長老(紳士)をつるしあげ、その家財、農具をうばい、土地を自

分たちで分配してしまふ。農民に憎まれていた地主には、三角帽子をかぶせて町を引きまわし、あげくのはてに惨殺してしまふ。これを政府が先頭にたつて、農民にやらせたのだ。それは文通通り血を血で洗うものであつた。

日本の土地改革は、マツクアーサーによつて、敗戦のショックのさなかに行なわれた。地主はこれまで合法的に所有していた土地を、無償で（またはそれにちかひ二束三文の値で）うばわれてしまふのであるから、平常の状態のもとではおよそ考えられないことである。日本でも敗戦ということがなければ、おそらくいまでも耕作農民は水呑み百姓の境涯からぬけでることはできなかったであらう。と、すれば、農業の資本主義的経営の普及化も、工業製品のための国内市場の発展も考えられない。つまり日本経済の今日のような発展——侵略戦争を前提としない——は考えられないのだ。

日本の土地改革は、敗戦のショックをかりずにやろうとすれば、革命以外に方法はなかつた。地主勢力のつよかつた既成政党が、自ら自分の経済的基盤を破壊するような法案を議会に提案するはずはなかつたからである。では中国ではどうであらうか。この国ではそんな発展を考えることさえお笑い草だ。こう考えてくれば、毛沢東のとつた土地革命は、その手段がどんなに激烈であつても、その本すじまで否定するわけにはいかない。それは中国経済の発展のためには誰かがやらなければならぬことだつた。土地収獲の六、七十パーセントを地主にとられるような制度の下では、土地や農具の改良の行なわれる余地はまつたくない。農業の資本主義的経営などはとても期待できないのだ。それと同

時に土地革命のようなはげしい変革のなかに、幾多の非情や人間喪失的現象がおこったことを否定するの馬鹿げた話だ。毛沢東は土地改革をたんなる経済改革として行なったのではない。それは農民にたいする政治教育であり、また人民を脅迫してソヴェトの指令に絶対服従させる威嚇手段でもあった。もともと威嚇や強制や殺人のともなわない革命はありえないのだ。

すでにのべたように中国の農村社会は、昔から有力な長老があつまって村の自治を行なっていた。有力な長老とは地主や富農、いわゆる「旦那衆」（紳士）なのである。農民は平常こういうボスを尊敬している。またボスも「土豪劣紳」ばかりではない。ほんとに農民のため、村のためにつくす人もいた。農民はそういう人を殺したがる。それで一九二七年頃は共産党も良紳と劣紳とを区別していた。しかしそんなことをいつていたのでは取りあげる土地はなくなってしまう。そこで「土豪劣紳」の定義がこう変ってきた。「すべて『土』をもつものはことごとく『豪』であり、『紳』にして『劣』でないものは一人もいない。」（瞿秋白の言葉）

つまり簡単にいえば、地主紳士はすべて土豪劣紳で悪いやつであるから、その土地をとりあげろということである。しかし農民は旦那衆を殺害するのに自分ではなかなか手を下さない。そこで土地改革を行なう場合には、その地方の代表的な地主を人民裁判にかけ、大衆の挙手によって死刑ときめさせ、大衆の手で虐殺させる。挙手をしないものは「反動分子」として目をつけられるから、いやでも手をあげたり、拍手喝さいし、虐殺を心からよるこんでいるジェスチャーを示さなければならぬ。



これが大衆運動の秘訣なのだ。大衆運動では参加者のジェスチャーがおたがいに反射しあって、ちょうど魚河岸や青物市場ヤッっちゃばのせりのように、いやが上にも勢いづいてくる。この勢いで地主の大量虐殺や「土地改革」という、平常のアトモスフィアのなかでは到底考えられないことを実現することができ  
るのだ。これこそ毛沢東がもっとも得意とする革命の力学である。

土地改革の残酷な一面については、ある記者が、国民党軍占領後瑞金からよこしたルポルタージュ  
につぎのようにのべられている。

「所謂富農、中農は終日戦々競々とし、時に屠殺される恐れがあるので家族の男女は常に悄然と  
している。敗北を喫して以来匪区ハイダイの軍民は紛々として国軍に投降、自首し来たり、それを防止する術が  
ないので猜疑心は日一日と増長し、富農の男子はその眉を剃り、女子はその髪を切り、番号が記入さ  
れた木の札を懸けしめ、毎日外出する時佩用せしめている。また反党派の嫌疑をかけられたものはそ  
の頭髮を横に一線切り落し、土豪劣紳は縦に一線切り落し、少しでも髪がのびればまた切り落し  
て、以って識別に便し且つその逃亡を防いでいる。また監禁中にその罪状を決するときは、須く民衆  
大会を開いてその罪を裁判すべしと称してはいるが、実際においては、裁かれるものが会場に着いた  
ときは罪状が既に決定され、屠殺されても民衆はこれを知らない状態である。……

九月中旬には屠殺は愈々惨酷となり、各監禁所で数百人が同時に引き出されて殺害され、山の頂上  
に大きな穴を掘り、屍体を悉くその中へ埋没した。この殺人は悉く稜標リョウヒョウ（槍）を以てなし、十余カ所

も刺されて呻吟しながらなお死なないものもあるが、かかる時はその臟腑を出して楽しんでいたのである。……（李漁升一九三四・一一・一〇瑞金にて、波多野、中共史四卷七六九頁）

かれらがいかにひどい虐殺をやったとしても、それは自分勝手に殺したものではない。「人民裁判」の判決により、または党からその死刑執行を命ぜられたからである。かれらがもしそうしなければ、その本人が処分されてしまうからだ。それが革命というものなのだ。

## 五 苦痛経済

その頃、四方からの包圍攻撃でその運命が日々にせまっていた紅軍は、いったいどこから新しい兵士の補充を受けたのであろうか。もちろん貧農のなかから進んで入隊するものもある。だがそれに多くを期待することはできなかった。そこで勢い強制徴兵という方法がとられたのである。これは中国共産党の党史学者や日本のその派が極力否定しようとして試みているところだが、事實はやはり事實だった。いまでは江西ソヴェト研究書として世界的な評価をうけている波多野乾一氏の前掲書には、それについてつぎのようにのべている個所がある。

「紅軍拡大運動は共産党の最も惨酷なる虐殺であるが、寧都に於て最も積極的に励行され、凡そ五十歳以下、十八、九歳以上の男子は一律に紅軍たるべく強迫され、これを欲せざるものは『階級的異

分子』という名によって罪を問われ、或は苦役を課せられ、或は禁固に処せられ、或は死刑に処せられた。……歴年来かくの如くして紅軍拡張に充てられたものの総計は少くとも五、六万内外に達している。」(波多野前掲書)

紅軍は長征の行くさきさきでもこれと同じことをやっていた。土地革命や紅軍の拡大を大衆の自発的行動というきれいだだけで説明しつくすわけにはいかない。再びいう、革命とは本来血だらけなものなのだ。

蔣介石の包囲攻撃がはげしくなるにつれて紅軍の武器弾薬、資金はひどく欠乏してきた。紅軍兵士の生活は苦しいものだった。江西に定着するようになってからも、かれらは主食(米)の現物給与の他にお菜代として毎日五分(五分<sup>フエ</sup>銭)貰えるだけだった。衣料などはなかなか手にはいらず、兵士は冬になると綿だけ支給され、それを夏着の裏に縫いつけて、やっと冬をすごした。それでも兵士たちが文句を言わなかったのは、紅軍ではすべて経済を公開し、苦しいときにはお互いに苦しい実情を一般に知らせていたからだ。ガラスばりの経済、それだけに林祖涵財政部長の苦労は大へんなものだった。

林祖涵と毛沢東との関係は非常に深い。一九二五年国民党農業部長であったかれは、中央農民部が広州市に農民運動講習所を開いたときに、毛をその主任に推挙した。かれもまた湖南省人で、一八八二年湖南省零陵県の小学教師の家に生まれ、毛よりも十一歳も年長である。十八歳で常德師範学校に入学し、一九〇四年には官費で日本に留学している。当時の日本は中国革命の策源地であり、孫文の

同盟会が活動していた。かれは孫文に会ったとたん、その人柄に魅せられて、そのまま国民党へ入り、国民党第一次全国代表大会では中央委員候補に選ばれた。しかしかれの思想は一九二〇年頃からすでに孫文主義をのりこえており、ひそかに陳独秀らと往来し、一九二一年中国共産党が成立すると同時にそれに入党していた。

北伐のとき、かれは程潜の第六軍の国民党代表となっていたが、国共分裂に際し、その一隊を率いて賀竜軍に加わった。そして南昌暴動へ、そしてソ連へと亡命と苦難の道をあゆみ、一九三一年に帰国して、江西ソヴェトの財政部長に就任したのである。

かれは紅軍兵士の腹をみたすためにはどんなことでもやった。江西ソヴェトの正規収入は農民からあつめる「土地税」であるが、もちろんそれだけでは足りるはずはない。そこで「打土豪クイットロウ」といって非共産地区の村落を襲撃し、その地主を人質として拉致し、身代金をとるようなことをやった。つぎには人ではなしに耕牛を拉致した。耕牛がなくなれば耕作にさしかえるから、とられた方は身代金、いや「牛代金」をもってきた。牛代金は当時の相場で黄牛三元、水牛は五元であった。

紅軍が陝西にうつっても、林祖涵はやはり財政部長をやっていた。かれは、ちょうどそのとき陝西にきたエドガー・スノーに、陝西ソヴェト財政は四〇ないし五〇%が「没収」によって、一五ないし二〇%が人民の「自発的寄付」によって補填されているといった。江西ソヴェト時代にもおそらくこれと同じようなことが行なわれていたにちがいない。「没収」とは、いうなれば「略奪」のことであ

る。

中共の人びとは江西から長征、そして陝西と、こういう苦しい経済生活をおこなっているなかでも、つぎの世代の教育には非常な努力をはらっていた。「赤匪の残虐」を書きたてる記者たちも、それはみとめないわけにはいかなかった。

「教育部の編纂した共産児童読本は六冊あり、ソヴェト連邦への忠誠を主旨とし、特に父を殺してもソヴェトの仇を報ずる觀念の培養を重んじ、或る富農が米穀を私蔵していたところ、その子がそれを政府へ密告し、政府はその父を殺して子供を賞揚し、児童の模範としたというような話が次から次へと連ねられている。瑞金県城区の郷の各処にはあまねくレーニン小学校が設けられ、児童を麻醉する道具とされ、児童を強迫してこれに入学せしめ、入学しない者は児童団がその家へ押しかけ、縛りあげて殴打し、家長が異議を唱えれば街上へ引き出して群衆に示している。」（波多野前掲書）

これは共産党の教育の成功を反面的に証明している。これをみればわかるように、名前こそちがえ紅衛兵がこの当時から存在していたことがわかる。

江西ソヴェトの経済生活は想像に絶する苦しいものだった。おそらくそれは人間の耐えうる限界ぎりぎりのものだったろう。かれらは包囲によって物資の供給路をたれたたので、たちまち食糧難におちいった。その当時国民党軍の手にはいった江西中央ソヴェト人民委員会の文書によると、

「米穀の価格は一日一日騰貴し、一部の地方に於ては金があつても米を買うことが出来ず、大衆は

食う米がなく、毎日ただ蔬菜、雜糧のみを食ひ、甚だしきに至っては樹皮草根を食っている。」  
という有様だった。いちばんこまったのは食塩で、それについて江西省民政庁長呂威はこうかたっている。

「匪区で食塩が大いに欠乏し、一元で僅か一、二両（一両は十六分の一斤）を買い得るに過ぎず、おくれると買おうとしても塩はなく、人民は争つて、かつて塩を売っていた商店内の庭土や、多くの年数を経た屍体をあさり、田舎流の方法で塩を搾るが、その中に毒素があり、若い味をもっていて、これを食うと病氣にかかる。

居住民は余りに長く淡食（塩気のない食事）をしていたために瘦せ衰らえて黄色となり殆んど人間の形をしていない。」（波多野、前掲書七七二頁）

もともと伝統的に苦しい経済を生きぬいてきた中国の農民には、困苦に耐えぬく特質とその道徳体系がそなわっていた。それは理由のないことではない。アメリカの経済学者シモン・N・パッテンは、社会の発展は苦痛経済から快樂経済への方向をたどるもので、未開野蠻社会の人類は、環境からうける苦痛をさけるためもっぱら活動し、その一切の制度は外敵と苦痛にたいする恐怖を根底としている、といっている。そういう時代には耐苦、努力の精神のない人間は淘汰されてしまうから、当然そういう道徳が生まれてくる。この国では孔子時代から刻苦精励は美德であり、「ぜいたく」は悪徳のきわみとみられた。

このような道徳は、毛沢東によつて共產主義の理想にしつかりとむすびつけられ、共産党員が、いやでも服従しなければならぬ戒律にまでたかめられた。ここに毛沢東思想の苦行僧的な側面が生まれたのだ。

江西ソヴェト——長征——陝西ソヴェトと、極限の生活をつづけてきた毛沢東が、つねに青少年たちの心のたるみ——それは中国経済の発展にともなう自然の現象なのだが——を不自然なほど警戒し、たえずかれらに、革命の苦しい時代を思い出させようとしていることは、誰でも知っている。かれはこの道徳をいやがうえにも強調するために、中国の国境にはいつも外国の侵略がせまっているかのような幻想をばらまいてきた。はじめは米帝国主義、そしていまはソ連修正主義というように。これがかれの權威を国民の上に維持する最良の方法であることを十二分に意識しながら。

## 六 長征のきっかけ

蔣介石が第五次包圍作戦でとつたのは「穩扎穩打主義」、じりじり押し押し戦略とでも訳すべきものである。つまり紅軍を急追して深入りせず、一度とつた地区をすつかり礮堡でかためてしまわなければ先に進まない方針だった。礮堡——清の乾隆帝が一七七六年四川の大小金川の乱を平定したとき、土人は礮楼を築いて清軍に抵抗したという記録がある。礮楼は高い塔のようなもので、はいごはない。上

部が壁でかこまれた小さなとりで、その壁にあげられた銃眼からねらいうちにする。土人は木登りがうまいから平気でのぼりおりするが、清軍の兵士は礮楼にのぼることができないから、それにはさんざん苦しめられた。蔣介石は清朝史のこの部分を読んだとき、思わず「これだ」と手をうった。これはこの礮楼をもつと近代的な小さな要塞にこしらえて、これを礮堡とよんだ。軍事専門家によると、礮堡一座に十人の兵を配すると、歩兵五百人に相当する威力を発揮するという。紅軍のもっている迫撃砲くらいではなかなかおちない。この礮堡陣地をすこしずつ先にすすめて行くのであるから、江西ソヴェト地区はじりじりその範圍を縮められていった。紅軍はもはや逃げだすのも容易ではなくなつた。

ソヴェト区全体には徐々に悲觀主義（悲シ、オム）がひろがっていった。ソヴェト政府の幹部のひとりには、「この大衆の気分は、たとえスターリン自身がこようと、レーニンを墓場からよんでこようと、そしてみんなで三日三晩大衆を説こうとも変わるとは思われない」と党刊行物（一九三三年二月四日の「闘争」誌）に書いている。一九三四年七月には紅軍第六軍団総司令の孔荷龍のような大物が国民党に投降し、紅軍の脱走者が日ましに増えていた。蔣介石はこれらの転向者を利用してソヴェト区内のペシミズムをあおりたてた。当時このペシミズムは福建省の委員羅明（ロミン）からでたといわれ、「羅明主義」として有名である。もっとも「羅明主義」はかつての「李立三主義」と同様、党中央が異端者にかぶせる「三角帽」として利用されたようだ。毛沢東の弟、毛沢潭も羅明主義者の一味とされた。おそらく



そのためか、かれは長征のとき残留組にまわされた。毛沢東もかれをかばうことができなかった。

羅明主義者といわれたもののなかには鄧小平もはいつていた。H・アイザックスは、江西省南部のソヴェト地区の「党部は鄧小平にひきいられて、そのポストから簡単に逃げだしてしまった」（拙訳『中国革命の悲劇』下巻五五八頁）といっている。しかし鄧は長征のとき林彪の軍にはいつて宣伝工作をやっていた。シュラムは毛沢東は表てむきは「羅明主義」の諸傾向を批判していたが、実はかれも羅明主義者だったといっている。シュラムはその証明として「羅明は一九四五年の党史の決議では、賢明な指導者としてえがかれ、かれの政策は基本的には正しかったが、党を掌握していた『左傾派』に不当に攻撃されたのだとされている」とのべ、さらにこれは毛沢東の意見によるものだといっている。（ペンギン・ブック、毛沢東一七一頁）どうもこのへんの真相はいまだによくわからない。

一九三四年、ソヴェトの指導者たちはこの根拠地はもうどうにもならなくなったことをさとした。張国燾によると、この頃モスクワから無線電報の指令がかれるもとにとどいて、そこを放棄し、できるだけ国民党勢力からはなれた辺境の地に逃避せよといってきたという。ほんとにそういう指令がきたかどうかは確認されていないが、少なくともそれはありそうなことだった。というわけは――

一九三一年九月十八日、日本の満州侵略がはじまると、スターリンは直接の脅威を感じ、日本にたいして融和政策をとろうとした。まずその年の十二月三十一日、日本政府にたいして不可侵同盟を申

し入れた。ヒットラーがドイツで政権をとってからは、どうしても両面作戦をさげねばならなかったからである。その結果かれは一九三二年には日本と通商協定を締結し、翌三三年の春には、日本にたいして東清鉄道の権利を売却する用意のあることを表明した。一九三四年の一月にはその価格を驚くべき安値に引き下げている。

ソ連の日本にたいするこのような政策は、そのまま中国共産党の対日政策に反映した。中国の基本的な民族的利益からいえば、中国共産党は国民党と和平して、ともに日本と戦うことを提議すべきだった。少なくとも毛沢東がとなえた「統一戦線」の理論からいえばそうでなければなるまい。

ところが中国共産党は、中国を侵略しているのは日本ばかりではない、英仏も同じことをやっている、として攻撃を日本だけに集中せず、帝国主義列強全体に、そしてまたその代表者国民党に集中した。中共のこういう態度は一九三四年のはじめまでつづいた。

一九三四年五月十五日、江西ソヴェト区で出していた「捷報」には毛沢東の談話がのっているが、その趣旨はこうだった。

「ソ連反対の戦争における後方を強固にすることに關しては、各国帝国主義列強と日本とはもちろん完全に一致している。茲に最も恥ずべき点を表示したものは、実に中国を売る国民党である。」

(波多野同上掲書八〇八頁)。

国民党が共産党討伐で手がはなせないとき、日本は満州を侵略した。ソ連も国民党も、日本がそれ

だけで満足してくれることに期待をかけていた。ところがかれらのあてははずれ、日本は満州で満足するどころか、さらに侵略の手を華北から蒙古へとのばした。もし日本が満州、華北、蒙古にしっかりとした軍事基地をきずいてしまえば、ソ連はそれにそなえるためにヨーロッパ方面から兵力を東にもつてこなければならぬ。それはヒットラーの脅威をかんがえれば、到底不可能なことだった。そこでスターリンの考えは変ってきた。もしも蔣介石が日本の野心をはばんでくれれば、かれのなやみは解消する。そのために、南京にちかい江西ソヴェトを、どこか遠いところにつし、かれに後顧の憂いなく、日本にたいするレジスタンスのできるようにしよう。というので中国共産党にたいして江西放棄の指令が発せられた。こう考えると、長征がソ連の指令でおこったという説は充分なりたつわけである。

いずれにせよ、長征という名の大移動がはじまった時期は、中国が攻撃を、帝国主義一般から、日本に集中する政策転換を考えはじめた時期である。

抗日の方針は一九三四年の夏ごろにきまり、まず方志敏の抗日先遣隊が安徽省の南部に侵入し、たちまち蕪湖にせまった。国民党軍がその方に氣をとられている間に、肅克と任弼時のひきいる約八千人は湖南省南部を通って貴州にはいる。そのとき江西の包囲体制にややみだれができた。それをついて紅軍の主力二十万が零都を出発した。ときに一九三四年十月十六日。

当時中国には四つの比較的大きなソヴェト地区があった。まず江西の中央ソヴェト、これはもはや

説明の必要はあるまい。湖南貴州省境には賀竜のつくったソヴェト区、四川省の北部には張国燾・徐向前のつくったもの、それから遠く陝西の辺疆には劉子丹、高崗のソヴェト区である。

国民党の勢力から遠くはなれた辺疆の地に根拠地をうつすことについては、党中央の意見は一致していた。だが長征の主要な目的が、日本軍と戦うことにあるのか、それとも国民党から遠くはなれることにあるかははっきりきまっていなかった。それによって根拠地のえらびかたがちがってくる。毛沢東ははじめから国民に抗日をうったえることを主眼としていた。したがってかれの目標ははじめからこの点で便利な陝西北部の根拠地にきまっていた。こうして紅軍は西へ西へと「国家」ぐるみの大移動を開始したのである。

### 七 遵義会議と八・一宣言

長征をはじめたときの毛沢東の党内における指導権については、まだ多くの疑問がのこっている。だが長征の最初の段階において毛の発言権が絶対的ではなかったことだけは確かだ。また長征の路線も行動の性質上ジグ・ザクなコースをとらなければならなかった。

紅軍は女子供、病人の足よわをかかえていたので、ひとまず賀竜の根拠地にはいって賀竜軍と合流しようということになった。しかしどういうルートをとおって行くかはまだきまっていなかった。毛沢

東は例によって、国民党をごまかしながらそこに達する迂回の方法を提案した。しかし党中央は、オットー・ブラウンの提案をとって、最短距離をとることに決定した。シュラムによると、そのころ紅軍の総司令官は朱徳、政治委員は周恩来、参謀はコミンテルンから派遣された中国名季徳ことドイツ人、オットー・ブラウンで、毛沢東は依然、軍の支配権からはずされていたといっている。賀龍軍と合流するには、途中湘江を渡らなければならない。国民党は紅軍が最短距離をとるならば、かならずここを通過すると考えて重火器をそろえてまっていた。もちろんそこにはたちまち紅軍の新たな悲劇が展開された。

紅軍は一週間かかって強引に渡河を強行したものの、その兵力は半分にはらされていた。五万人が殺されたり逃げ出したりして、全滅をまぬかれただけが見つけものだったのだ。しかしこのさんたんたる渡河の「成功」は、毛沢東に思わぬ幸運をもたらした。それからは党中央も毛のいうことをきかざるをえなくなってきた。

紅軍はかれの提案によって、賀龍軍との合流をあきらめて、そのまま西進をつづけて、貴州省にはいり、翌年のはじめ遵義の町を占領した。この占領は敵の不備をついたので、ほとんど無血の占領だった。遵義では、町役場や地主の倉庫をひらいて物資を分配し、兵士たちはここで十二日間の休養をとった。毛沢東の兵士たちの間における人気は絶頂だった。このなかでいわゆる遵義会義がひらかれたのである。

この会議で秦邦憲（モスクワにいった王明の代理）はこれまでの軍事的失敗の責任を問われ、総書記の地位からおわれた。張聞天が、そのあとがまに坐ることになったが、党の実権は、そのとき新たに設けられた党政治局書記の地位についた毛沢東にわたった。この権力移行をスムーズにやつてのけたのは周恩来だとみられている。かれはそれまでの責任を問われなかったばかりでなく、こんどは毛沢東のブレイントラストとなり、いよいよ「不倒翁」の本領を発揮した。

遵義会議には劉少奇は出席していなかった。かれは満州事変のち東北で地下活動を行なっていたが、一九三二年二月、江西にかえつてソヴェト政府の労働部長を担当した。その頃かれは瑞金から五里の沙州撮村で毛沢東と一緒にくらしていた。しかしその翌年には北上し、三四年にまたかえつてきた。長征には出ることはでたが、途中から白区に潜入し、また満州国の地下工作の指導にあたつた。それゆえ、劉は遵義会議で毛の「奪権」をたすけてはいない。

遵義会議で中国共産党はじめて毛沢東共産党になったといわれている。しかしそれは党内に、毛沢東の権威にいどむものがなくなつたことを意味してはいない。このとき徐向前とともに四川の北部にソヴェト区をつくつていた張国燾は、毛のもっとも手ごわい挑戦者となつた。かれは党歴において毛よりもふるく、コミンテルンにはより近い立場にあつた。兩人は一九三五年六月十八日、四川省の北境両河口で会見した。そのとき張の指揮下にあつた第四方面軍は、毛のつかれきつた第一方面軍よりものはるかに優勢だつた。張は紅軍が抗日運動のために陝西の根拠地に向かうことには賛成しなかつ

た。かれはこのさい西康か西蔵に新たな根拠地をひらき、しばらく兵を養わない時期をまつべきだと主張した。しかしかれの反対のほんとの理由は、ただ毛の權威のもとに屈服したくなかったことである。結局二人はそれぞれの軍隊をつれて、それぞれの道をゆくことになった。

張国燾は現在香港の九竜に健在である。筆者は前後三回ほど会っているが、一九五三年にはじめて会ったときに、かれから毛沢東の人物批評をきいた。かれは、毛沢東の思想は中国の伝統的な「帝王思想」だと、ずばり言つてのけた。

張は江西省吉永県に一八九八年に生まれているから、毛よりも五つ若いことになる。しかし共產主義の開眼は毛よりもはるかにはやい。江西中学をでて、北京大学の学生るとき、例の五・四運動で活躍した。北京を追われたかれは上海にでて陳独秀とともに中国共産党をつくつたのだ。一九三〇年には中国共産党駐ソ代表としてソ連に行き、翌三十一年帰国するやいなや遊撃隊を組織した。わずかのあいだに兵力は三万ほどにふくれあがつた。当時、国民党政府は江西の山地にひそむ朱毛よりも、武漢にちかいかれらをおそれ、とくに武漢行營を設けて警戒させていたくらいだ。

書生出身の張の遊撃隊をこれまでにそだてた背景には、毛沢東における朱徳のような、徐向前という軍事指導者があつたからだ。徐は一九〇二年、山西省五台県の生まれで太原師範学校から黄埔軍官学校を出た生えぬきの軍人である。かれは湖南学生軍団の政治主任となつたとき共産党に関係し、廣州暴動にも参加している。

張と徐の農民部隊は次第に拡大してゆき、その根拠地は湖北、河南、安徽三省の辺疆にまたがる「子鄂皖ソヴェト」として知られるようになった。当時、楊子江をさかいとして江北の張・徐といえ、江南の朱・毛とともに、いずれとも優劣のつけがたい存在だった。いまこの二つの勢力は、合流したのもつかの間、毛、張両者の意見の対立から、たちまち北と西にたもとをわかつことになった。

このとき毛沢東にとって一番良かったのは、朱徳までが張国燾とともに西進のみちをえらんだことである。朱徳のこういう行動の動機は、いまだにわからない。かれ自身アグネス・スメドレーに語っているところでは、張国燾にピストルで脅迫されたので、やむをえずかれに従ったのだということである。だがこれは信用できない。これではアメリカのチャチな西部劇だ。スメドレーはおそらく朱徳の毛にたいする変わらざる忠誠を証明するために、こんな創作を勝手にしたのであるが、これはひいきのひき倒しである。朱徳ほどの人物が銃をつきつけられて、その軍隊をつれてのこの脅迫者のあとに従って行くだろうか。そんな朱徳がどうして五回にわたって蒋介石の剿共軍をなやました、紅軍の指揮をとることができたであろうか。シユラムはその理由として、朱徳が四川人であり、張国燾の軍隊には四川人が多かったから、かれはそこにとどまらざるをえなかったのだらうといっている。かれがあげているもうひとつの理由は、一九三三年、三四年と朱徳は秦邦憲、周恩来、オットー・ブラウンらの側にたっていて、毛沢東とはややなれていたというのである。今度の「文革」で朱徳が批判されている事実からみても、この見方はかなり有力だ。だが当時は朱徳ばかりではなく多



くの人々が陝西省にはいつてほんとに毛のいうように「抗日」ができるかどうかに自信がもてなかったのではあるまいか。もしも「抗日」が宣伝の意味しかないならば、なにも陝西省のような貧しい土地よりもっと物資豊富な、安全な場所に根拠地をつくった方がよいということになったのではなからうか。

ともかく毛沢東は目的地を目の前にして、多年戦場で困苦を共にしてきた朱徳とも別れ、毛児蓋から大草原をこえて四川、甘肅省境の臘子口に向かったのだ。

これまで日本ででている中国共産党史では、この毛児蓋で毛沢東が「抗日救国のため全国同胞に告ぐ」という有名な「八・一宣言」を発表したことになっている。また遵義会議でその方針がきまったとも考えられている。

八・一宣言は、中国の戦うべき敵を日本だけにしぼり、国民党軍と合作して日本と戦おうとよびかけたものだ。ここにその原文の摘要がある。

「各党派が過去において、又現在において、政見、利害を同じくしないにせよ、各軍隊が過去および現在において、敵対行動をとっているにせよ、均しくすべての人は『兄弟牆に闘げど、外、侮りを防ぐ』という真の自覚が必要である。まず一切の内戦を停止し、あらゆる国力を集中して抗日救国の神聖な事業のために闘わねばならぬ。国民党軍は即時ソヴェト区攻撃を中止し、対日戦を準備すべきだ。紅軍は国民党軍との旧仇宿怨にこだわらず、かれらと親密な提携の下に協同救国を希望する。」

(中共史第六卷九〇頁)

どうもこの文章には第三者が国民党と共産党の双方によびかけているようなひびきがある。事実「八・一宣言」は毛沢東らがつくったものではなく、コミンテルンがソ連駐在の中共代表王明に命じてつくらせたものなのである。中国共産党の公認党史編集者胡喬木は、一九五一年に「党の政策」を決定する仕事は「一九三一年から三四年の間は、党中央によっても行なわれなかったし、また一九三五年の長征期中毛沢東によっても行なわれなかった」といつている。それにもかかわらず、それができたのは、「中国共産党が『八・一宣言』を発表して、統一戦線をよびかけたとき、および長征終了後の十二月に中国共産党の指導者たちが、当面の情勢を検討したときであった」といつている。これはいかにも前後矛盾している。一九三五年八月一日には、毛はまだ長征期間中で、四川の毛児蓋にいたはずだ。長征期間中には統一戦線の政策の決定はできなかったというそばから、それが「八・一宣言」によってできたというのはどういうわけであろう。

その頃（一九三五年七月二十五日から）モスクワでは、第七回コミンテルン大会が開かれていた。この開会の日、中共代表はその演説のなかでさかんに国民党の悪口をいつていた。ところが八月二日、ブルガリア共産党執行委員長であったディミトロフが長時間にわたって新しい「統一戦線」政策をといた。それにこたえて八月七日王明は、国民党まで包含せよとはっきりとは言っていないが、「すべての党派をふくめた」抗日統一戦線を強調した。この事実は次のことを示している。「八・一宣言」

といつても八月一日に出されたものではなく、それよりずっとあとにだされたものである。またその当時、毛児蓋にいた毛沢東は、それにはまるで関知しなかった。毛沢東が抗日民族統一戦線を決定したのは、長征終了後かれが陝西省の瓦窖堡で開いた党幹部会議で、かれはこのときすでに八・一宣言を知っていたのだ。それゆえ胡喬木が毛沢東は長征中、民族統一戦線政策を決定しなかったということも正しいし、またそれにもかかわらず、その決定は「八・一宣言」によると言っているのも正しい。だがそのことは「八・一抗日宣言」が毛の独創でないことを言外に認めたものである。胡喬木はこれまで毛沢東のために中国革命史をかなり歪曲している。だが、それでもなおかれは歴史的事実のすべてを歪曲しつくさなかった。

今回の文化大革命で胡喬木ははげしく批判されている。「抗日民族統一戦線」が毛沢東の卓見であり、独創であることを否定するような歴史学者は、紅衛兵の脅威下にある中国では存在をゆるされない。たんに胡喬木にかぎらずすべての学者はいささかでも「学」的部分ののこっているかぎり、この国ではいま一御用学者であることも難かしいのである。

第四章  
勝利への街道

## 一 延安時代のはじまり

毛沢東らがたどりついた陝西省は、古代漢民族文化発生の地である。中国人はよく「われわれはみな黄帝の子孫」といい、かれらは自分たちの共通の祖先が黄帝であることに誇りを感じている。その黄帝の陵はいまそこにある。黄帝は中国の伝説の中心人物で、磁石を応用した指南車をつかって邪神、蚩尤を克服し、その子孫は中原にその帝国をたてた。黄帝というのはソ連の学者にいわせると黄土の王ということだという。ここは黄河の歪曲部にあたり黄土の沖積層からできている。

この省の北部にあるソヴェト地区をたずねたスノーが描写しているように、そこは黄土層の秃山をつらねた高原で、地味もわるく、住民は粟、小麦、玉蜀黍の栽培でほそぼそと生活を支えていた。

毛沢東がその象子湾というところにたどりついたのは一九三五年十一月、ここでかれははじめて長征の終了を宣言した。

一九三四年十月十六日、江西の雩都をでてからここにいたるまでの所要日数実に四百十日、行軍距離九、〇四四キロ、この間十一省を通過し、五十余の大中県城を占領している。長征は国民党軍から遠くはれたところに根拠地をつくって、そこから全国民に抗日民族闘争をよびかけるといふ遠大な目的をもって行なわれた。だが長征の直接の動機はなんとしても敵の手からのがれて、生きのびたいという動物的本能だった。それはハンニバルのローマ遠征よりもむしろナポレオンのモスクワからの撤退に比すべきものであろう。

江西を出たとき二十万にちかかった兵力は、目的地に着いたときにはその十分の一にへってしまつた。

しかしともかく「長征」を完了したということが、毛沢東や紅軍にあたえた精神的プラスははかり知れないものがある。紅軍の兵士たちは毛沢東の指導のもとに団結さえすれば、不可能なことはないという信念をもつようになった。この兵士たちの信念は、毛沢東その人にも反映して、人間の意志の力はすべてを解決するというかれの確信はますますつよくなってきた。これはかれが長征にあたえてある次の評価をみればよくわかる。

「盤古の天地開闢以来、三皇五帝から現在にいたるまで、歴史上いまだかつてわれわれのやつたよ

うな長征があつたであらうか。十二カ月の光陰のなかで、毎日数十の飛行機による爆撃があり、地上には行く手をさえぎる数十万の大軍団があり、路上には言いつくしがたい艱難險阻があつたが、われわれはすべて二本の脚を動かし、二万余里を長駆し、十一省を踏破したのである。ききたまえ、歴史上かつてわれわれのこのような長征があつたであらうか。

長征は二本足の人間が、飛行機、重砲、天險、あらゆる困苦を征服した世紀の記録であり、最後の勝利はすべて人間の精神力にありということの証明だと毛沢東は思いこんでしまった。人間の精神力は、あらゆる闘争を勝利にみちびく重要な要素であることは否定できない。とはいえ、それはやはり闘争の諸条件のひとつにすぎないものである。ほかの条件が圧倒的に有利な敵にたいして、ただ精神力だけで勝てるものではない。だが毛沢東は、長征こそ精神力のオールマイティを証明した奇蹟だと思ひこんでしまった。いな毛沢東ばかりではない、かれの周囲の人びともみなそう思いこんでしまった。

そうすると「長征」をいやでも「成功」といわなければならなくなる。そこで、戦闘で相手にうちめされてにげ出しても、逃走に成功したという面からみれば、成功だという論法が生まれた。かれはこの見解を陝西にたどりつくの間もなく、「日本帝国主義に反対する策略を論ず」のなかでこう展開している。

「しかしある人（たとえば張國燾）は、中央紅軍は失敗したといっているが、これは正しくない。そ

それは事実ではないからだ。マルクス主義者がある問題をみるときは部分ばかりでなく、全体をみる必要がある。一匹のがまが井戸の底で『天は井戸と同じくらいの大ささだ』といえば、それは正しくない。なぜならば、天は井戸の大きさとどまらないからである。もしもかれが『天のある部分は井戸ほどの大きさである』といえ、これは正しい。事実だからだ。われわれ紅軍はある方面（もとの陣地を保持する面）からいえば失敗であったが、別の方面（長征計画を完成する面）からいえば勝利だった。このような論法をもってはじめて妥当なのである。なぜなればわれわれは長征を完成したからである。」

この論法をもってすれば、人が事業に失敗して大きな借金を背負ったとしても、それは事業経営の面からみれば失敗だが、借金に成功したという面からみれば成功だということになる。

こんな論理がなりたつかどうかを疑うまえに、毛沢東と長征をともにした人びとは、かれの自信にみちた革命的樂觀主義に感激してしまった。ゴビの砂漠から、黄土塵をまぜた西北風がふきあふれるなかで、寒さと腹ぺこでふるえていた紅軍の兵士たちは、せめて胸だけでもふくらませておかなければやりきれない気持ちだったのだ。

陝西ソヴェトは劉子丹と高崗の二人がつくったものである。

高崗は陝西省横山県に生まれ、長じて榆林師範学校に学んだ。偶然、同じクラスに劉子丹がいた。二人の友情はここからはじまる。劉子丹はまもなく広州にゆき、黄埔軍官学校に学び、高崗は家庭の



事情でやむなくあとにのこった。

一九二六年劉子丹は黄埔軍官学校で共産党に入党した。この年、馮玉祥がソ連から帰国し、ソ連の武器で陝西を奪回し黄埔軍官学校にならって三原に「中山軍事学校」を開設した。その教育長になったのが鄧小平である。このとき郷里で髀肉の歎をかこっていた高崗はこの学校に入学した。この学校の学生たちもまた学生軍をつくっていた。

一九二七年国共分裂のおこった当時、武漢にいた劉子丹は、絶好の機会到来とばかり高崗と連絡し、この学生軍を煽動して渭南、荜泉の二カ所で叛乱をおこした。これは見事に失敗、劉と高は叛乱軍をつれて山のなかににげこみ、爾来深山幽谷を徘徊しながら匪賊のような生活をおくっていた。それからいろいろな迂余曲折はあったが、結局二人のつくった遊撃隊から紅軍第二十六軍が生まれ、この根拠地が基礎となつて陝西ソヴェト区が生まれたのだ。

この根拠地はもともと劉と高の第二十六軍だけでも養なえないようなやせ地だった。そこへ毛沢東が三万の紅軍をつれてきたのであるから、当然食糧が不足し急速に地区を拡大する必要にせまられた。こうして「東征」という名の軍事冒険がおこされることとなった。「東征」とは意義の上では東にすすんで日本軍と戦うということであるが、実際には南にある山西省に遊撃地区をひろげることだった。一九三六年のはじめ、劉子丹を総司令とする東征軍は二カ月間に十八県を占領することができたが、そこに蔣介石の大軍が派遣されると劉は瀕死の重傷をおい、全軍は陝西根拠地に追いかえされ

た。爾來、紅軍はふたたび江西ソヴェト時代と同じように国民党軍に包囲されてしまったのだ。ただ昔とちがった点は、それが、国民党の勢力圏からはるかになれていて国民党が動員できる蔣直系の中央軍の数が限られ、包囲軍の主力が張学良の東北軍であったこと、西北方が広く開かれており、その方面から侵入してくるものがないことだった。

これは毛沢東に非常な安心感を与えた。かれとかれの部下たちは物資の欠乏などは江西の封鎖時代や長征当時のことを考えればなんとでもたえしのぶことができた。東、南の前線では張学良の東北軍、楊虎城の西北軍と対峙していたが、かれらは蔣直系の中央軍とちがって戦意のないことを知っていた。毛沢東らは安心して時局の変化をまつことができたのである。

こうしていわゆる延安時代——陝西ソヴェト区の首都は延安——は、毛沢東が前途に明るい見通しをもつことのできた幸福な時代であった。

## 二 毛沢東の恋愛

毛沢東のこれまでの生涯で、かれにとって延安時代ほどおちついたときはなかったであろう。かれらを包囲している東北軍とは事実上の停戦協定を結んでいたし、党内ではかれに挑戦するものはいなかった。西安事変から国共再合作の時代にはいると毛沢東の地位はますます安定してきた。北京や上

海からは若い学生たちが、かれらが中国の生んだ不世出の英雄とかがえている人から、直接革命を学ぶために、沼沢地にあつまる水鳥の群れのように延安にあつまった。

一九三六年十二月には延安の人口はわずか二千余人にすぎなかったが、一九四一年にはすでに五万を突破していた。そのうちの三万人あまりは紅軍と公務員で、そのほかの多くは外省からきた学生だった。かれらは配給食糧がとぼしかったので、自ら耕作し、馬鈴薯などをつくりながら勉強した。延安ではこれらの学生を教育するために陝西公学、軍政大学、マルクス・レーニン学院、魯迅芸術学院などをもうけた。一九三八年、上海からやってきた藍蘋はこのマルクス・レーニン学院の学生となり、同時に魯迅芸術学院の演劇教員となった。

延安は小さい田舎町であるから娯楽にとぼしく、魯迅芸術学院の学生たちの公演会はいつも盛会だった。そのなかで上海でみがきあげた藍蘋の楚々たるすがたはひときわめだった。毛沢東はその頃マルクス・レーニン学院で講演していたので、藍蘋とはしばしば会う機会があつた。かの女はいつも毛のまんにすわり毛の講義を熱心に聴き、熱心に質問した。それでもわからないことがあると毛沢東の洞窟までたずねて行って疑問を解いた。そのうちいつの間にか彼女は毛のために帯まで解いてしまったのだ。二人の恋愛はたちまち延安中の評判になった。こういうのを中国語では、たしか「満城風雨」(町中大さわぎ)という。

毛沢東には糟糠の妻、賀士貞がいた。賀士貞がもしもブルジョア思想の持ち主で、藍蘋がすばらしい

革命の女闘士であったならば、この恋愛も美化されて、毛沢東美談がもうひとつふえたはずである。

藍蘋は自分では山東省の貧農の出身だといっているが、済南高等学院を卒えて、上海の映画女優になつてるところからみると「貧農」出身とは考えられない。少なくともその経歴からみれば「ブルジョアの要素」を多分に身につけてしているとみられてもしかたがない。

賀士貞は毛の二度目の妻で、彼女自身のかいた自伝によると、『地主の娘』で、一九二七年中共に参加し、南昌暴動のときには婦人部隊をひきいた」ことになっている。シユラムによると、彼女の自伝は一九三七年、毛沢東がスノーにかたつた自伝の中国訳とともに、上海利民書局から出版されたという。しかし彼女は年齢からいえば一九二七年に十七歳であるから、この武勇伝はいささかまゆつばものだと思う。

『毛沢東集団』の著者甘友蘭によると、彼女は江西省永新県の旅館「海天春」の娘で賀懿という妹とともに永新の名花とうたわれた女学生だった。彼女らは早くから左翼運動に関係し、井崗山に紅軍がはいったときと、自らそれに加わった。そして姉の士貞は妻とわかれていた毛沢東と、妹の懿は毛の二番目の弟の毛沢潭とむすばれた。(賀士貞のことは当時紅軍の軍司令をやっていた龔楚の書いた「我と紅軍」に詳しい)

長征のとき賀士貞は妊娠中だったが、夫とともに二万八千里を踏破した。途中で生んだ子供は農家にあずけたままで行方をはっきりしない。彼女は毛とくらしした九年間に五人の子の母となつ

ている。だがその子たちがどうなっているかはわからない。いま健在なのは長子毛岸英である。かれは一九四〇年頃モスクワの中山大学に学んだ。その頃同級生はかれのことを「毛王子」とよんでいた。四六年に帰国して、延安労働大学で教鞭をとった。面白いことにかれは中山大学で蔣介石の嗣子蔣経国と机をならべていた。次子毛岸青は十四歳のときソ連に留学し、終戦後に帰国している。しかしこの二人はいずれも楊開慧に生まれた子である。楊にはもうひとり三男毛岸竜がいる。

ロバート・ペインは、賀士貞は長征中蔣介石の飛行機から投下された爆弾で負傷し、身体に十八か二十の破片がのこっていて、陝北にきてからも長い間この傷で苦しんでいたという。だがスノーは、かの女は「陝北にきてからはほとんど普通の健康とかわらず」自分も保安で彼女と一緒によくトランプをやったといっている。一九三七年彼女が医療のためにソ連に送られているところからみれば、表面からみると軍配はロバート・ペインの方にあがる。しかしその当時延安にいた人の話によると、毛と賀はいつもよく大喧嘩をしていたそうだ。毛沢東は親父の性格をうけたとみえてか、いやくをおこすと大声で彼女をどなりつけるばかりでなく、しばしばなぐりつけたらしい。私の考えでは賀士貞が身体にはいった爆弾の破片のために、結婚生活がうまくゆかなかったのではないかと思う。

藍蘋が延安にやってきた一九三八年には、毛はまだ四十六歳の男ざかりだった。しかも男やもめになつたばかりだったから、恋愛の進行度はすこぶるスピーディだったらしい。当時、延安では人口の男女比率は十八対一で女性は貴重品だった。共産党幹部のなかには四十歳以上の独身者が多く、そう

いう人びとをさしおいて若い学生たちが恋愛にふけることはタブーとなっていた。若い学生たちの恋愛沙汰は「ナオナレニユイカレン 閹男女関係」（男女関係をみだす）といわれて、革命にたいする熱意の欠乏とみなされた。

このような空気のおかげで革命道徳の基準と見られていた毛沢東が、二十五歳の映画女優と恋愛におちいり、結婚したいとまでいっているのであるから、党最高首脳部のかれの友人たちさえ、これをどう処置してよいかわからなかった。しかも藍蘋には映画俳優の夫があり、毛沢東には戦場で生死をともししてきた糟糠の妻がある。これでは「くされきった上海のブルジョア社会」でもまさにスキヤンダルものである。まして住民の大半が苦行僧的な生活をおくっている延安では、信じられないほど大きなショックだったにちがいない。町全体はかれらの恋愛がどういう結末になるかをじっと見まもっていた。

毛沢東もこの恋愛にはずい分なやんだようだ。こんなことをしていれば党内におけるかれの指導的地位に挑戦するものがあらわれるかもしれない。それに国民党はこれを「スキヤンダル」として大々的に宣伝し、かれの権威を落そうと待ちかまえている。かれとしてはあるいは「ブルジョア的」解決法を考えたかもしれない。中国の古い社会では妾をもつことは許されていた。早婚多産のこの国では、夫が四十六歳くらいになれば糟糠の妻は妻としてよりも、母親として子供の世話に専心する。だから男が二号をもつことはあまりひどい悪徳とは考えられなかった。

しかし毛沢東がそんなことをすれば党の鉄の規律はまもれない。またそういう処置をとれば藍蘋に

一生肩身のせまい思いをさせることになる。それは彼女を人間として解放するゆえんではない。第一それは全中国の女性を、封建的ブルジョアの束縛から解放しようとしている自分自身にたいしてはすかしいことだ。これがおそらく毛沢東の心境だったのであろう。

かれのこの恋愛は、ある意味では英国のウインザー公の恋ものがたりにも似ていた。ウインザー公は英国保守派の因襲と闘うことをあきらめて、一人の人間として恋に生きた。だが毛沢東はその恋のためにその地位のためにも闘おうとした。かれはこう思った。自分は藍蘋をこよなく愛している。この愛情を賀士貞への義理のためにおしこらすことは正しくない。そんなことをすれば賀士貞をも不幸にする。家庭がそういう状態では党活動にも影響する。それでは党にたいしてもすまないことになる。恋愛が革命のためにプラスでないようならば、そんな恋愛は意味はないし、真の恋愛をそのなかで生かせないような革命なら、そんな革命は意味はない。私はこの二つを調和することができることを自分の生活で証明してみせよう。

こうしてかれは藍蘋との正式結婚を党に認めさせるために、かれ自らいささか面はゆい「闘争」を開始した。

その当時かれは毎夜朱徳や周恩來の洞窟をたずねて、かれらを説いてまわったという話もつたわっている。かれらの反対は、もちろんつよかったであろう。かれらがいちばん心配したのは、青年たちの間における毛沢東のイメージをこわすことであった。かれらははじめ毛沢東に、革命のためにこの女優

との恋愛をあきらめることがなぜ不可能なのかといった。おそらく朱徳や周恩来などは、こういう場合の男の弱点をしっているので、男同士の暗黙の理解はあったかもしれない。だがこれらの背後には賀士貞とともに戦ってきた女闘士たちがいた。これらの党最高幹部の夫人たちは、そろいもそろって党歴のふるい百パーセント共産主義者だった。

たとえば朱徳夫人の康克清。彼女は一九二八年十六歳のときに朱徳軍に加わり、その翌年朱徳と結婚した。彼女は衛生兵をふり出しに一九三二年に婦女義勇軍支隊長になり、三四年の長征に従軍し、朱徳とともにチベットまで行った女傑である。

周恩来夫人鄧穎超は南開大学学生のとくに五・四運動で活動し、そのなかで同じ南開大学の学生だった周恩来と結ばれた。爾来彼女は夫、周恩来とともに北伐をともし、江西ソヴェト時代を生きぬき、長征では婦人中央委員として党の婦人工作を担当した。こういう女闘士、いな老夫人たちの間では藍蘋の評判は決してかんばしいものではなかった。おそらく藍蘋のブルジョアの背景に対する彼女らの反感のなかには、女性特有の動物的嫉妬と賀士貞にたいする友情の義憤がまじっているだけに根づよいものがあつた。

しかし毛沢東はこれらの反対をおしきって、翌三九年賀士貞と離婚し、藍蘋と正式に結婚することを知り承認させた。藍蘋はこうして毛夫人となり江青という名前にかえたのだ。毛がこの季節はずれの恋愛事件を、下手にごまかすことなく正式な結婚によって解決したことは立派だと思ふ。しかし



これは、毛の党内外における地位がすっかり安定していたからこそできたことだった。

### 三 国共の秘密交渉

毛沢東は「東征」に失敗した直後、ソヴェト区の現状を打開するためには、蒋介石に和を乞う以外に方法はないと感じた。もちろん抗日統一戦線の方針はきまっていた。だがそのなかに蒋介石をいれるとなると、こちらからあくまで下手にでるほかはない。そうなると決断ははやい。一九三六年五月五日、かれは南京政府に「停戦講和一致抗日」の通電をおくった。それは陝西、甘肅、山西三省内では一切の戦闘をやめ、双方代表を派遣して救国の具体的方法を共同協議しようという提案だった。

表面からみるといかにも対等の立場で交渉を開こうとしている形であるが、実際にはその交渉はもつとへりくだった形で行なわれた。毛沢東はひそかに蒋介石に密使をおくり、紅軍を蒋介石の指揮に服従させるから、このさい停戦してくれと申し出たのである。この秘密交渉の経過は中共側では発表していないが、蒋介石がその自著『中国のなかのソ連』でつぎのようにのべている。目下のところ交渉の真相はこれによる外はないのでここに引用する。

「民国二十五年（一九三六年）中共は『停戦講和』の通電を發した。間もなく周恩来が中共を代表し、潘漢年がコミンテルンを代表して上海に来たり、張冲と協議した。私はこの報告をうけたとき潘

漢年がコミンテルンを代表していることについて大きな疑問をいだいた。しかし陳立夫がそれをしらべた結果、潘がコミンテルンと通信する暗号帳をもっていること、電報を往復しているのはまちがいないことがわかった。そのことの真偽はこの問題にとってあまり重要ではないと考えたので、それ以上は問わなかった。潘漢年は南京にきて、陳立夫と談判した。南京政府が中共にたいして提出した条件はつぎの四点である。

- (一) 三民主義を遵奉すること
- (二) 蔣委員長の指揮に服従すること
- (三) 「紅軍」を取消し、国軍に改編すること
- (四) ソヴェト政権を取消し、地方政府に改めること

この秘密交渉は蔣介石によると、「長時間にわたったが、結局、最後にかれらはこの四項の原則をうけ入れた」という。つまりのちに詳述する西安事変のずっと前に、一応「国共合作」の交渉がまつまっていたことがわかる。

蔣が疑問をもった潘漢年というのは江蘇省宜興の生まれ、一九三三年頃ソ連に留学した上海の文化人である。長征にも従軍した。上海文化界に顔のひろいところから、上海に潜入して情報活動をやっていた。西安事変後の第二次国共合作後には、八路軍駐滬办事处主任として公開的に活動し、上海の学生や文化人を延安におくりこんだ。女優藍蘋、今の毛夫人江青なども、延安にはいる手続きではか

れの世話になったはずだ。なかなか大胆な男で、日本が汪精衛の南京政府をつくったときには、南京に潜入していた。そのときかれが住んでいたのはなんと南京政府のF・B・I長官李士群の家である。もちろん李士群には李士群の思惑があつてのことだろう。

蔣と潘の秘密交渉にあらわれた条件をみれば、この交渉にはコミンテルン——スターリンの意志がつよくはたらいっていたことがわかる。スターリンは日本の中国侵略をはばむ力として、当時西北中国の一隅に命からがらたどりついたばかりの紅軍よりも、英米の背景と近代的軍備をもつ国民党の方がずっとたよりになるとおもっていた。(スターリンは張国燾と同じように「長征」は敗戦だったと考えていたらしい)。しかし国民党が共産党討伐にかまけて日本に抵抗しなければどうにもならないから、なんとしても両者を停戦させようとした。それがためには中国共産党にとってかなり苛酷な条件でものませるつもりだった。もちろんこの国共再合作にたいしてスターリンと毛沢東とは、それぞれ思惑がちがっていたが、停戦を切望する点では両者の意見は完全に一致していた。

毛沢東は停戦期間を利用して紅軍の力を養うことが目的であつたから、紅軍の名称がどうかかわろうとも、その実体が保存できればよいと考えていた。毛はプチ・ブルジョアばかりでなく、大ブルジョアジーから買弁ブルジョアジーの一部さえもつらねた、広汎な民族統一戦線を考えていたのだが、以前の国共合作でにがい経験をなめているかれは、いかに蔣介石がそれを要求しても共産党や紅軍を解消する考えは毛頭なかつた。

しかし蔣も共産党が国共合作を利用して、その勢力の拡大をはかろうとしていることはよく知っていた。それだけにそういう国共合作にたよって抗日戦争にふみきるわけにはいかなかったのだ。そこでかれは、共産党に国共合作を利用してかれら自身の勢力を拡大する活動をしないとという保証を要求した。ソ連の安全のため国民党をして日本を制肘させようとしていたスターリンは、中国共産党の「独立性」をひっこめさせても、国共合作を実現させたがった。しかしそれにはさすがの毛沢東もおいそれと応じられなかった。こうして南京での秘密交渉は三者三様の立場で行なわれたのである。

しかしなんといっても紅軍の実力は、装備のわるい二、三万の兵士であり、これにたいして国民党軍は、近代装備をもった百万の中央軍、それに雑軍を加えれば優に五百万であった。そこで秘密交渉の条件は、結局蔣介石の言うとおりにまとまった。だがこの交渉の間にも共産党は「国共合作」のなかににおけるかれらの立場をよくするために全国各地で「和平」宣伝工作を展開した。

その当時、国民にたいする中国共産党の宣伝スローガンは、「フロンクオレンツァー中国人不打中国人」(中国人は中国人を打たず)これにたいして国民党のそれは相変らず「トワイエニエン対外先安内」(外に対するには先ず国内を安定せよ)だった。この宣伝戦は明らかに国民党のまけだった。日本軍がどんどん中国の領土に侵入していると、トワイエニエン「対外先安内」とばかり内戦をやるのは、抗戦をサボる口実だといわれてもしかたがあるまい。

当時日本の華北侵略の手はますますのびていた。一九三五年十一月、殷如耕という男をつかって、満州と中国本土の間に翼東政權というものをつくり、そこから安い日本製品を関税なしでどんどん中

国に流しこんだ。中国がそれを実力で阻止すればすぐ戦争をする考えであるから、中国はどうするともできなかつた。三六年十一月には、徳王の指揮するモンゴル兵が綏遠の東部に侵入した。この徳王を後から指導するものがどういう勢力であるか、中国人はひとりとして知らぬものはなかつた。民族的激情ではちきれそうになっていた中国人は、徳王の蒙古軍などをおそれる理由はなにもなかつたが、その背後のものと戦うようになると思うと、この戦争には非常な決断が必要であつた。しかし綏遠を守る、傅作義將軍は百靈廟の戦鬪で侵入軍を一挙に殲滅して背後の力に干渉の時間さえ与えなかつた。

これは中国軍が日本の企図した侵略を武力で阻止したはじめての成功だつた。中国人はよるとさわりと興奮してこの抗戦の勝利についてかたりあつた。

北京、天津、上海、広州のわかい熱情をもつた学生たちの、愛国感情と民族的自信はいやがうえにもたかまつた。この国難を前にして、なぜ国内闘争をするのかという非難は当然南京政府の上にあつまつた。

当時蔣介石の政治圏のなかに潜入して、この愛国運動を指導していたのは劉少奇だつた。劉は北京に中共北方総局を開いて学生団体、総工会、商会、文化団体など、はばの広い社会層のなかに工作員をいれて抗日運動をおおつていた。かれ自身は表面、北京大学図書館に勤務する司書ということになつていた。

劉少奇はこうして一九三六年から四二年まで、国民党の勢力圏のなかの党活動を総括していた。最初は北方総局書記、それから中原局書記、新四軍事件のあとでは新四軍の再建にあたり、華中局書記兼新四軍政治委員を担当した。

この間に陳雲、彭真、薄一波、李維漢、李富春など、都会の政治経済工作で優秀なものはみな劉の關係からでている。中国共産党が政権をとり、都会地区に本拠をおくようになったとき、これらの人びとはみな中共の財政経済を担当する責任者となった。それにつれて劉少奇の党勢力が急速にのび、毛をおびやかすようになったのだが、それは後のはなしにして、ふたたび時点を一九三六年にもどそう。

共産党の宣伝からいけばんつよい影響をうけたのは、陝西で紅軍を包囲していた東北軍の兵士たちだった。かれらは一九三一年の九月十八日、満州事変が勃発して以来、日本軍に故郷の満州から追いだされ、それ以来そこにきていたので、国民党の軍隊のなかでもっとも抗日感情がつよい軍隊だった。中共の「中国人は中国人を打たず」「我れに山河を還えせ」という訴えはかれらの胸に、海綿に水がすわれるようにしみとおっていった。こういう自然のなりゆきを蔣介石はどうみていたろうか。それはかれ自身の言葉にきこう。

「このとき共産党は各省において『和平』宣伝攻勢を展開し、陝西を第一目標とし、張学良、楊虎城と積極的に手を結んだ。張学良のひきいる東北軍のなかから、『抗日して剿共せず』のビラが発見さ

れ、張、楊ともに共産党と直接に関係しているという情報があった。かれらは西安において共産党員と、その外廓組織の活動擁護につとめていた。また『第三党』および『救国会』は公開的に無遠慮な反動宣伝（蔣からみると抗日宣伝は反動とみられた）を開始した。かかる事態の発展を防止しなければ、勢いかならず叛乱となると考えたので、私は自ら西安にとどまって鎮圧しようとしたのである。」

こうしてかれは、その旅行がかれの運命の岐路となるかもしれず、一路西安に急いだわけである。実際にはこの当時の中国の大衆運動は大部分が愛国的衝動からあふれたものだった。それにもかかわらず蔣は国民の抗日感情のあらわれをすべて共産党の策動の結果として、弾圧しようとした。ここにかれの誤りがある。それにしてもその当時これほど反共的な蔣介石を「容共」的であるときめつけ、このうそを国民に信じこませようとしたおそれるべきジャーナリズムや文化人が我が国に存在していたということは、いまこの時点においてふたたび想起されなければならない。

#### 四 西安事件から国共再合作へ

毛沢東は蔣介石との秘密交渉がそのままスムーズにまとまるとは考えていなかったが、「国共再合作」はいつかかならずまとまるといふ確信をもっていたようだ。それは毛沢東がスノーに語っている次の言葉でわかるであろう。

「現在交渉はすでにすすめられています。共産党は南京政府を説得して日本に抵抗させることに、あまり大きな積極的希望を持ってはおりませんが、それにもかかわらずその実現は可能です。……たとえ蒋介石が内乱をつづけることをのぞんでいても、紅軍は蔣をいれるつもりであります。」(スノー、邦訳三〇六頁、これは蒋介石の記述と符合する)

毛沢東が蒋介石との統一戦線の可能性に自信をもっていたとすれば、西安事変のときにあんなにも熱心に蒋介石を生還させようとしたわけもわかる。蔣を失えばこの交渉にかけたこれまでの努力は無駄になるのだ。西安事変が張学良と共産党の共同謀議でなかったことはこれでもわかるであろう。

現在日本にきている苗劍秋氏は当時張学良の顧問であり、西安事変の当事者のひとりでもあるが、西安事変までのいきさつについてこう語っている。

「(一九三六年)八月十日頃私のしらぬまに張学良は延安の近くの膚施(陝西省北部の町で中共の接待所があった。のちに延安にはいる)まで、密かに周恩来に会いに行ってきた。……張は周に向かつて『本当に抗日する気か』とたずねた。周は『本当だ』と答えた。張はまた『倒蔣抗日の方式でやるつもりか』ときいたら、周は『そうだ』と答えたので、張はすぐに『では私を返すか殺すかして下さい』と言った。周はあわてて『何故か』と反問した。張は『あなたの方の抗日も蔣委員長の攘外(抗日)も倒蔣とか安内(剿共)とかの条件つきでは本気になってお相手はできない。なぜならば日本の軍部は倒蔣とか剿共とかを待ってくれないからだ』といい終るや、民族の悲運を悲しんで大声で泣きだした。周氏



も感動して泣きだして張氏に『どうすればいいのか』とあらためてたずねた。張氏は『擁蔣抗日のラインで民族統一抗日戦線をこしらえるに限る』と答えたので、その座にいる中共の大物達はみな不愉快な懷疑的薄笑いを洩らした。周恩来だけがやわらかく『擁蔣の気持ちになれないね』といったので、張はすかさず『じゃ連蔣でいいか』といった。周が別に毛沢東に請訓せずに『よろしい』と答えたので、張は連蔣の大任を背負って西安に戻った。

この話は西安事変の当事者がかたっているのだから真実か、少なくともそれに近いものと考えたいのだが、この話のすじはこの年の五月に蔣介石と毛沢東との間に擁蔣形式の国共合作について秘密交渉がすすんでいた事実とだいぶ食いちがっている。八月十五日頃になって周恩来がまたぞろ「擁蔣の気持ちになれないね」というのはおかしい。これではまるで抗日統一戦線は張学良の共産党説得によって行なわれたかのようなことになる。だから私は前者『毛沢東における人間学』では苗氏の言葉を頭から否定しておいた。しかしよく考えてみるとこの五月から八月までの間に、両方の考え方がかわってきただということもありうる。少なくとも蔣介石の考え方が大分変わってきたことはたしかだ。それは共産党が一方では和平交渉をやりながら、他方ではさかんに「和平」宣伝攻勢をはじめ、それののって救国会などが無遠慮な「反蔣」宣伝をはじめたからだ、と蔣自身もいっている。一方毛沢東の方でも名目上、蔣介石の指揮下にははいるが、どんな指揮にもしたがうという気持ちにはなれなかった。もしも張と周の「擁蔣」「連蔣」のやりとりがそういう意味で行なわれたものだとして解釈すれば、この話

は非常に面白いものになる。共産党の幹部のほとんどは、自分の妻子や兄弟を蔣に殺されているから、抗日民族戦線には大賛成だが「擁蔣形式」のそれを認める気にはなれなかったであろう。蔣介石が西安事変で張学良の青年士官らにつかまったとき、中共の内部に「蔣を生還させるな」というさげびが高くあがったことがそれを証明している。

張学良はこの年の十一月、蔣介石あてに手紙をおくり、われわれ将兵たちの切実な希望は日本と戦うことであって、共産党と戦うことではない、部下たちからは日本軍と戦うために綏遠にやつてもらいたいという請願がでている。われわれはこの願いをききとどけてやるべきだ、「さもなければかれらは私ばかりでなく、貴下をも詐欺漢とみて、もうわれわれには服従しなくなるだろう」と半ば哀願し、半ば脅迫した。だが蔣介石はききいれず、かえって抗日運動の弾圧を強化した。

その翌十二月はじめ蔣は西安にとび、東北軍を剿共命令に従わせるか、従わなければかれらを南方に撤退させて、かれ自身の中央軍をもって共産党にあたらせようとした。「兵諫」すなわち兵をおこして君主を自己の主張に従わせるという方法以外に蔣の意志をかえるすべがないと知った東北軍の青年将校たちは、十二月十一日の夜、蔣がとまっている臨潼の宿舎をおそい、ねまきそのままにげ出した蔣を捕えて監禁してしまった。東北軍の兵士たちは張学良に、蔣を「人民裁判」にかけると要求していた。張学良はこの空気なかで、蔣に大胆な抗日計画の採用をせまった。蔣は頑固にそれを拒絶しつづけた。蔣には生還のぞみはないようにみえた。

南京政府のなかでは、はじめから蔣の死の方に賭けて、ただちに叛乱者を「膺懲」せよと主張する一派の勢力がつよくなってきた。かれらは親日派として知られた軍政部長何応欽將軍らに指揮されていた。何はすでに陝西省境に軍隊を動かし、數力所に飛行機をとばして爆弾をおとした。それは若干、張学良の叛乱將校を脅やかしたかもしれないが、それよりも蔣介石の生命をおびやかす作用の方が大きかった。しかし一番おどろかされたのは南京の蔣夫人宋美齡とその兄宋子文、さらにその背景の英米だった。いま蔣介石を失えば、この非常時をのりきるために、いやでも蔣にかわる軍事独裁がうまれる。そしてそれが何応欽一派の軍事独裁となることはほとんどまちがひなかった。そうなれば中国は英米からはなれ、ドイツ、イタリー、日本枢軸の系列にはいることになる。と、いうことはかれらがその全事業をかけている南京政府から追い出されることを意味し、英米勢力の中国から総退却を意味している。そこで、宋美齡はこれらすべての利害を代表して西安に飛ぶことになった。

だが蔣介石はまだ健在だった。かれがそこに生きている以上、かれにはかれの意思があった。蔣は何応欽の陝西省爆撃を「非常に喜ばしい」とその日記に書いたくらいであるから、かれらの交渉はなかなかまとまらなかった。この局面にとびこんできたのが毛沢東の意志を代表した周恩来である。かれの活動はめざましかった。結局蔣介石は、かれを生かしておくことにつよい利害関係をもつこれらの人びとの共同努力とそれぞれの自制心によって、南京に生還することになったのだ。このときの蔣と周の会見の模様をいま、アイザックスの『中国革命の悲劇』（至誠堂発行、拙訳下巻五八九頁）から

摘記してみよう。

「蔣介石の強制された西安滞在中におこった諸事件のなかで、いちばん劇的で、結果からみていちばん重要なものは、かれと西安駐在共産党代表団の团长周恩来との会見場面であろう。この主要な役者たちはきつとすばらしい場面であったにちがいないその会見の模様について、自分では、なにもかいていない。蔣はその後に出版した日記では、そのことについてはふれていなかった。しかしもうひとつの記録によると、周がかれの部屋にはいつてくると、蔣の顔色は青くなつたといわれる。かれは自分が「赤」の手に渡されようとしていると考えたようだ。蔣は周恩来が十年前の四月十二日の朝、蔣の命令で射ち殺された上海ピケット隊の副隊長であつたことを思いだしたにちがいない。かれがあれほど無情な裏切り行為をおこなつて追いたてた人びとが、再びかれにたいして自分たち(周恩来ら)をどうともしてくれと申し出たということを信ずるのは、蔣介石にとってむずかしいことだつた。記録によると、周は親しげに挨拶しながらはいつてきて、蔣に敬礼をおこない、かれを総司令としてうけいれたという。かれは共産党の新しい政策を蔣に説明しはじめた。最初は冷淡に黙っていたが、蔣は話をきいているうちにしだいにうちとけてきた。……会談がつづいた。かれはもしも自分が日本にたいする積極的武力抵抗の政策を決定しさえすれば、かれを捕えたものも、共産党も、かれの指導するこの国の平和的統一をよるこんで援助するということ、その真剣さについてますます確信をもつてきた。蔣がけつきよく西安で理解するようになったことは、かれがただ、自分もすでに半ば決定してい

た政策を採用しさえすれば、共産党はかれにたいして無条件で屈服するということだった。かれは共産党員が再びかれの政治目的によるこんで奉仕しようとしているとき、軍事的方法によって共産党を粉砕するといいはることはばかげたことだと知った。」

たしかにその通りだった。共産党はずでにずっと前から擁蔣形式の抗日統一戦線を決定していた。ただ蔣が抗日戦争をおこしさえすれば、共産党はかれに服従して犬馬の勞をいとわなはいっていいのだ。その共産党をわざわざ軍費と兵力をつかって絶滅するのは、馬鹿げたことにちがいない。理屈はたしかにその通りであろう。だが一生を反共にささげた蔣介石はこの理屈以上のあるものをかれの皮膚感で感じとっていたのだ。歴史は理論通りには動かない。いったん抗日戦争がはじまってしまえば、国民党軍は日本軍との戦争で手はなせなくなる。そのとき共産党はかならず抗日戦争を国民党にまかせて、自分たちは共産党の勢力を拡大して抗戦の指導権を奪うことに専念するにちがいない。それゆえ中共の活動を完全に封じこめる確信がもてなければ、どんな卑屈な思いをしても抗日戦争をさげなければならぬ。これこそかれがずっと前からちつづけた考えだった。

実は毛沢東もかれの立場から同じことを考えていた。かれが「擁共形式」の国共合作に賛成したのは、その実現を信じたためではなく、その失敗に賭けたからである。ともかく蔣介石を抗日戦争にひきこんでしまえば、あとはどうともなる。そのとき蔣はいくらじたばたしても、共産党勢力が全国にひろがるのをふせぐことはできないであろう。現在この時点においてはこの人に、中国共産党は抗戦

中決して国民党をうらぎらないという確信をもたせることが一番必要だ。なんといっても中国を統率して、日本と戦うことのできる人物はこの人をおいて他にはない。と、すれば現在この人を生かして南京にかえすことは、中国の抗戦にとって絶対に必要である。毛沢東はこう考えたのだ。

スターリンは「擁蔣形式」を毛沢東よりもっと真剣に考えていた。中国共産党がほんとうに国民党を支持する気持にならなければ、国民党もほんとうに日本と戦う気にはなれまい。国共の関係がしつくりしないで内輪もめばかりしている国共合作では日本軍の侵略を有効に防ぐことはむずかしい。それゆえにスターリンは中国共産党をこういう方向に指導しようとした。ソ連でスターリンの植民地問題の顧問になっていた王明が、一九三七年の末中国にかえってきたのは、国共合作をこのスターリン路線にのせるためだった。だがスターリンの考える大国主義的傾向をよく知っている毛沢東は王明を決して中国共産党の政策決定の地位にはよせつけなかった。かれはそうすることによってこんどの国共合作では、スターリンの指揮棒どおりには動かないことを示した。

こうして国共再合作は三者三様の思惑をもって再出発し、一九三七年八月十三日中国は抗日戦争に突入した。しかしそれぞれの思惑とそれから出た政策をめぐる暗闘は抗戦中ずつとつづいたのである。

## 五 中国の英雄時代

一九三七年の抗日戦争勃発当時の国共再合作は、北伐時代（一九二五—二七年）の国共合作のそれとはまったく違った一面があった。毛沢東は以前にこりて共産党を国民党のなかに埋没させるようなことはしなかった。たとえ名儀はどうあろうとも、中国共産党は自分の人民、領土、軍隊を手ばなさなかつたのだ。これらはかつての国共合作の失敗から学んだ教訓を生かしたものである。それよりももっと重要なことは、中国の事情を知らないで中国の革命について無理な註文ばかりだすスターリンにひきずられないで、中国共産党が自主独立の方針をたてたことである。一九三八年毛沢東の支配する政治局は、抗日戦争のなかの中共の前途についてつぎのような見通しをたてた。

「もし抗戦が勝利に終われば、国民党軍は最低限度まで縮小し、共産党は不断の発展をとげるであろう。かくて勝利は直接『十月革命』の勝利に導くであろう。もし戦争に敗北すれば、中国は三つの部分に分割されるであろう。すなわち満州・華北は日本に、西南は国民党に、西北は共産党に帰するであろう。戦争に完敗すれば、国民党は完全に解消し、共産党は地下の党となるであろう。中国の政治では武力は決定的な要素である。したがってわれわれは戦争中に自己の武力の拡張に全力をつくしわれわれが革命の指導権を奪取する基礎をつくらなければならない。」（抗戦の前途と中国共産党の政策）

この見通しがいかに正しかったかは、いまにいたっては贅言の必要もない。この見通しがあつたからこそ中共は抗戦中その勢力拡張に全力をつくしたのだ。同時に蔣介石もそれを知つていたからこそ抗戦中、中国共産党の活動から目をはなさず、その拡大防止に全力をつくしていたのだ。抗日戦争中、国民党と共産党が日本軍をそっちのけにして戦い合つたのはそのためである。この中国の家庭の事情を知つてか、知らぬか、日本の軍部は反共を旗じるしにしながら、大骨おつて国民党軍を撃退し、後方に広大な政治的真空地帯をつくりあげ、共産党の勢力の拡大に貢献してきたわけである。

中共軍は日本軍のつくつてくれた政治的真空<sup>バクコン</sup>を利用して、その後方にどしどし「抗日根拠地」という名のソヴェト区をつくつていった。もちろん日本軍の掃討もあり、国民党軍の反撃もあつたが、日本軍の占領地域にのこつていた中国人は、なによりも勇敢に日本とたたかう英雄たちを熱望していたので、抗日根拠地の建設はしごく順調に行なわれた。かれらは抗日根拠地をつくると、そこからとどきどき出撃して、日本軍の背後をつき、兵站をおそつたり、鉄道を破壊したりした。民衆は日本軍に親兄弟を殺されたり、財産をうばわれたりしているので、よろこんで中共軍に協力した。中共軍は国民党に活動を制肘されない根拠地で、自由に党の政策を実行したので、抗日根拠地は事実上ソヴェト地区の延長となつた。こういう活動で名をあげた中共領袖は多いが、そのなかで現在活動している典型的な人物を二、三あげておこう。

まず一九三八年の初頭、国民党軍から中共軍に寝返えつた呂正操がある。かれは遼寧省遼陽の生ま



れで、万福鱗の部隊長だったが、三八年国民党軍の総退却で河北省にとりのこされ、自ら冀中軍区（河北省中部という根拠地を建設した。最初のうちは共産党から派遣された政治委員と意見が合わず、しばしば論争したが、のちにはすすんで延安の抗日大学にはいり、再教育をうけた。かれの軍区はその後ますます拡大し、四三年には数多くできた「辺区」のうちで「模範辺区」と認められるようになった。中国共産党が政権をとってから一九五四年に国務院鉄道部副部長となり、五九年滕代遠にかわって鉄道部長となった。長征以前に国民党軍から中共側にかわった軍人は多いが、抗日戦争中に寝返ったものは非常にすくない。そのうえ毛沢東の信任をうけて大臣級に抜擢された人物といえ、おそらく呂正操くらいなものであろう。

華中地区には李先念が活動していた。李は一九〇八年湖北省黄安に生まれた。たつき大工の出身で、長征のときには第四方面軍の政治委員をやっていた。一九三九年一月河南の確山県からわずか数十人の部下をつれて湖北省に潜入し、日本軍の背後を通過って洞庭湖の周辺で活動し、行くさきさきに解放区をつくっていった。こうしてわずか二年の間にいわゆる「鄂<sup>がく</sup>予<sup>い</sup>皖<sup>あん</sup>贛<sup>しん</sup>解放区<sup>しょうか</sup>」（湖北、河南、安徽、湖南、江西解放区）がつくられた。解放区というのは当時は日本軍から解放された地区をさしたが、のちにそのまま国民党から解放された地区になった。

この間にかれの部隊は民兵を加えて六、七万人の大部隊になった。この部隊のちにそのまま新四軍第五師として編入され、李はその師長に任命された。解放後かれは自分よりもずっと党歴のふるい

人びとをのりこえて湖北省人民政府主席武漢市長に抜擢された。さらに一九五四年六月鄧小平のあとをうけて財政部長となり、陳雲らと共に政務院副総理にもなった。

李先念が新四軍第五師の師長だったとき、その政治部民衆運動部長をやっていたのが陶鑄だ。一九〇四年生まれの湖南省人で一九二五年に黄埔軍官学校にはいり、林彪、羅瑞卿とは第四期の同期生である。国共分裂後広州暴動に参加、その失敗後は厦門に潜入して地下活動をやっていった。当時から例の「羅明主義」で知られた羅明とともに福建の監獄をやぶって、そこに捕われていた十八人の中共幹部をすくうことに成功した。その後上海ににげていたが、一九三二年逮捕されて無期徒刑の判決をうけた。一九三七年の国共再合作で釈放されると、ただちに楊学誠とともに河南、湖北地区でゲリラ隊を組織した。楊学誠という人は、彭真が抗戦前からつくっていた「中華民族先鋒隊」略称「民先隊」の幹部である。陶鑄と楊学誠が湖北でゲリラ隊をはじめたときには小銃がわずか八挺しかなかった。一九三九年李先念のゲリラ隊が湖北に潜入してきたとき、この二人の部隊が合流し、新四軍鄂豫（湖北・河南）挺進隊となったのである。

陶鑄は一九四五年林彪、彭真、高崗、羅榮桓らとともに東北に潜入し、東北民主連合軍の政治部副主任として活動した。この民主連合軍からのちに毛沢東の主力軍となった、林彪の第四野戦軍（中国での俗称「四野」）が生まれたのだ。かれは解放後は広東省委の主席となった。今回林彪の片うでとして「文革小組」の責任者にえらばれたとたんに、たちまち失脚してしまった。

新四軍の師長にはそのほか羅炳輝、彭雪楓、粟裕などのそうそうたる勇将がひかえていた。なかでも羅炳輝はちよつと変わった経歴の持ち主である。かれは雲南省彝良<sup>いりょう</sup>県の貧農の家に生まれ、十六歳のとき雲南軍に入り、北伐のとき朱培徳軍の参謀として出征した。南昌暴動のときに駐屯軍としてちようどそこに居あわせたので、紅軍によって武装解除されてしまった。その後江西省吉安の保安司令に昇進して紅軍と闘かった。かれは捕えた紅軍兵士から話をきき実際にソヴェト地区の事情を知ることよび、それを国民党地区と比較研究してゆくうちに、次第に共産党にひかれていった。やがてかれは部下一個連隊を率いて彭徳懐軍に投じた。その後長征にも参加し、新四軍の成立後はその第五支隊司令として活躍した。

粟裕は福建省生まれ、十八歳で武漢の師範学校在学中に、日本でいえば「民青」にあたる中国共産党青年団に参加した。やがて葉挺が学生部隊をつくると、それに参加し南昌暴動に参加した。暴動の失敗後江西、福建の省境で活躍していた抗日先遣隊に加わり、方志敏司令のもとで参謀長をやった。方が国民党につかまってからは、かれがその地位について司令となり、福建省境を遊撃していた。

一九三八年新四軍が成立するや、かれは江北（楊子江北岸地方）にはいつて第一師師長兼蘇中軍司令になった。蘇皖解放区（江蘇・安徽解放区）の基礎はかれによってきりひらかれたものである。

華南地区には八路軍、新四路軍とは別に両広縦隊というゲリラ隊が生まれた。これをつくったのは曾生という無名の青年だった。かれは広州の中山大学教育科の学生だったが、抗日学生運動で広州を

追われ、しばらく汽船エンプレス号で働いていたが、日本軍がバイヤス湾に上陸し、広東省の大部分がその手におちるとみると、かれは祖国の危機にいてもたってもいられなくなり、数十人の愛国青年をかたらつて故郷の恵陽に潜入した。そこで学生や敗残兵を集めて「恵宝人民抗日遊撃総隊」の旗をあげた。そのゲリラ隊はみるみるうちに拡大し、一九四三年頃には一万人以上になっていた。間もなく正式に中共の指揮をうけるようになり、「広東人民抗日遊撃隊東江総隊」に改編された。解放後山東軍政大学副校長になり、一九五四年八月には広東人民政府委員として第一期全国人民代表大会代表にえらばれた。

おもうに抗日戦争はある意味で中国の英雄時代であった。平和時代にものをいう学歴とか家柄とか、権力者へのコネとかいうものがまったく無意味なものとなり、愛国の意気とその意気を活かして抗日運動を組織する能力のあるものは、自由にその才能を生かすことのできる時代であった。そしてこのような形で俗物からふるいわけられた英雄の大部分が、中国共産党のなかに収容されたということとは、ただそれだけでも国民党の暗い前途を暗示していたのである。

かれらによって中国共産党の勢力は、抗日の根拠地という形で多くは日本軍の背後にどんどんのびていった。他方国民党はこの発展に気が気ではなく、攻撃を加える機会さえあればそれをのがさなかつた。たとえば一九三八年に石友三部隊は順徳で八路軍をおそい、その一個中隊を全滅した。山東では鹿鐘麟部隊が八路軍を攻撃し、激戦をくりかえした項国共両軍の衝突は各地でますます頻繁におこ

つてきたが、一九四一年一月の皖南事件にいたってついにその頂点に達した。このとき国民党は統一戦線（国共合作）の条件をたてにして新四路軍に楊子江以北に移駐するように申し入れた。江南の新四路軍がこの軍令に従って楊子江を渡河しようとしたとき、第三戦区の顧祝同軍は突如これを包囲して、殲滅的打撃をあたえたのだ。この戦鬪で新四路軍の軍長葉挺は捕虜となり、副軍長項英はじめ四千人の戦死者をだした。生きのこった新四路軍部隊は武装解除のうえ解体させられた。しかし新四路軍はこれで消滅したのではない。ただちに華中局の書記劉少奇がみずから政治委員となり、陳毅を軍長として再建された。

この皖南事件のおこるまえから西安の北方にいた国民党の胡宗南部隊が、陝北ソヴェト区にしばしば攻撃をかけていたが、四四年七月七個師をもって賀竜、蕭勁光が守っていた爺台山をとりかこんだ。激戦は数日間つづいた。このとき蕭勁光の善戦で皖南事件のような悲劇はまぬがれたが、中共側は相当の死傷者を出している。

蕭勁光は蕭克、陳賡とともに毛沢東からもっとも信頼されていた毛の「愛将」の一人だ。いずれも湖南省生まれの黄埔軍官学校の出身で、毛沢東は戦略的に重要なポストはいつもかれらにまかせていた。蕭勁光は十六歳のときに任弼時とともに理髪屋の職人にばけてソ連に潜入した。そこで四年間留学、帰国後改めて黄埔軍官学校に学び、二七年にふたたびモスクワにゆき、三一年まで留学した。かれの夫人はロシア婦人、中共軍の将軍で夫人がロシア人なのはおそらくかれひとりであろう。

当時陝北ソヴェト区は朱徳、劉伯承らの老将たちが華北に出撃していたあとなので兵力も少なかったが、蕭勁光は賀竜とともによく戦って、留守をまもり通すことができた。爺台山事件は皖南事件とともに国共間の二大衝突事件といわれている。

地方における国共の武力衝突は、当然中央の国共合作にひびいた。一九三八年以来国民党は全国各党派の人材を集めて国事をはかるという趣旨で参議院を設立していた。共産党もそれに七つの議席をあたえられた。共産党の参議院議員は周恩来、林祖涵、董必武、陳紹禹（王明）、秦邦憲、吳玉章、鄧穎超の七人である。皖南事件がおこったとき、国共の衝突はここにもちこされ、連日はげしい討論がくりかえされた。その結果共産党側議員は、董必武を一人おいて全員がいつせいに延安にひきあげてしまった。国民に共産党のこの問題にたいする立場といかりをつよく印象づけるためであった。董必武一人をあとに残したわけは、かならずしもそれが国共の全面的決裂を意味するものではないということを示したかったからであろう。

董必武は一八八六年生まれで湖北共産主義運動の草分けとして中国共産党の創立大会には湖北代表として参加している。この当時かれは五十五歳の働きざかりだった。日本の法政専門学校（法政大学の前身）を卒業し、一九二〇年帰国して武漢中学を創立したかれは、北伐のとき漢口の汀洒橋を破壊し、その功で湖北省政府工農庁長になった。国共分裂後日本を通過してモスクワに亡命、五カ年のち江西の中央ソヴェトにはいり、長征にも参加したヴェテランである。

このときの董必武の役割りはすこぶる微妙なものだった。かれは国民党と全面的に決裂するわけにはいかず、同時にまた共産党の主張——その多くは抗議であつたが——を国民につよく印象づけなければいけなかつたからだ。しかしかれはよくこの任務に耐えた。会議のあるごとに、たったひとり議席から立ちあがつて「同じ国軍でありながら八路軍は圧迫をうけている、これでよいのですか」「われわれの兵士は負傷しても薬品もない有様です、これでも公平といえますか」と泣きながらわめきちらし、会場に悲壯な印象をあたえることに成功した。

まさに中国は英雄時代だったのである。

## 六 抗戦中の土地問題

国民党と共産党の闘争には、もうひとつの場面があつた。それはあまり人びとの注意をひかず、ごく地味なものではあつたが、実はこれこそ蔣介石の「中国の命運」をゆきづまらせた決定的なものだつた。ほかでもない抗戦中の土地問題である。

蔣介石は「抗戦は一切より高し」のスローガンのもとに、土地改革などの難問題はすべて勝利のうちに解決すべきものとして棚上げしてしまつた。もともと国民党は中国のブルジョア・地主党として知られていた。半植民地中国のブルジョアジーはフランスなどのブルジョアジーとちがつて、土地へ

の投資から受ける利益を思いきれない弱い存在であった。ブルジョアジーは同時に地主として、高利貸として、耕作農民から搾取していたので、この階級的利益に依存している国民党では思いきった土地改革はできなかつたのだ。それゆえ抗戦中、国民党勢力圏の農村では土地改革どころか、その反対に土地買占めの傾向が野放しにされていた。戦時インフレの進行によって貨幣価値が下落するにつれ、この傾向にますます拍車がかかった。

抗日戦争が太平洋戦争の一部になってから、米国は、蒋介石への軍事援助として、できるかぎりの物資やドル資金をおくった。それが国民党官僚の経営する事業にながれて、重慶、成都など国民党中国の都市には畸形的な繁栄がもたらされた。これらの都市の戦時成金は戦時インフレでおこされた貨幣の価値の下落から財産をまもるために、この国の伝統的な貯蓄ルートにより、争って農村の土地に投資した。この国では収穫の五〇%以上が地主に保証されているので、土地を買うことが一番利益が多く、一番安全な投資だった。そのために国民党勢力圏、とくに四川省などでは、土地の大半は都会の軍人、政治家、商人などに買いしめられてしまった。

たとえば成都平原では、抗日戦争まえには全人口の二〇%の大中小地主が、全耕地の五〇%を占有していたのだが、抗戦後には全人口のわずか八%にたりない地主が八〇%の土地を所有するようになった。重慶地区では抗日戦争前の地主の比率は成都とほぼ同じだが、戦後は人口のわずか二%の地主が耕地の九五%を占有してしまった。当時四川の人は「普天の下王土に非らざるなし」という言葉を



もじつて「普天の下蔣土に非ざるなし」といつていた。

耕地がこのように少数の人間の手に集中してしまつと、土地を借りようとする小作人の競争ははげしくなり、地租は年々増大するばかりだった。甘英という学者が四川のある県をモデルケースとして地租の指数を計出しているが、それによると抗戦のはじまつた翌年一九三八年の地租の指数を一〇〇にとると、一九四〇年まではまだ一〇六・八にすぎなかったが、四一年には一二〇・四にあがり、四四年になると一八一・四になつてゐる。もともと中国の地租は非常にたかく、收穫の六、七十％に達していたのであるから、それが二倍近くなれば農民は食えるはずはない。終戦当時中国にいた英国の記者ジャック・ベルデンは、「戦争の終り頃は……土地占有熱は疫病のようにひろがり、農民は搾取的地租制度のもとにおいてはもはや生きられなかった。……地代はかれの余剰労働をくいつくすばかりでなく、かれを生かしておくに必要な労働力にさえくいこんでいた。」といつてゐる。こうして国民党治下ではもはや、労働の再生産さえ不可能になつていたのである。

毛沢東は抗戦のはじめに国共合作にもつてゆくために、富農の土地を没収しないばかりか、大地主でも抗日的ならばその土地は没収しないと約束した。実際は陝北ソヴェト地区では抗戦以前に土地改革を行なつてしまつていたので、「地主」というものはほとんどいかなかったのだ。また日本軍の背後に新たにつくつた「解放区」では、大中地主は日本軍のくる前に上海や重慶にげてしまい、あとに残つていたのはほとんど土地をはなれては生きてゆけない耕作農民ばかりだった、かれらは地主がに

げてしまったのを幸いに地代をはらわず土地を耕作していた。それに中共軍は逃亡不在地主を日本軍に投降した売国奴として土地を没収してしまつたから、ここでも実際には土地改革と同じことが行なわれたのだ。陝西ソヴェト区の土地委員王観瀾はスノーに、「ソヴェトの土地法の第一の目的は、すべての人にたいしてかれとその家族の生活を保証するに足る土地をあたえることだ」とかたっているが、この原則は共産党勢力圏の土地全体に行なわれていた。したがって共産党勢力圏内の農村は、国民党勢力圏内の農村よりもはるかに安定していた。

これは重要なことだつた。一九二七年の国共合作の失敗は、共産党がスターリンのあやまつた国共合作政策にひきずられて土地改革をのぞむ農民運動の抑圧に事実上協力したことである。それゆえ農民の革命的エネルギーが充分に利用されず、その結果国民党は帝国主義と妥協して大衆をおさえつけることに成功した。当時この渦中にあつて事態の経過をつぶさに観察していたH・アイザックスは一九三八年の時点においてこう書いている。

「一九二七年、共産党は帝国主義反対闘争の指導権をブルジョアジーの手にわたした。その結果、後者は大衆をおしつぶし、帝国主義者と妥協した。あらゆる階級の利益は帝国主義にたいする闘争のなかで融合するという虚構は、ブルジョアジーが帝国主義とともに、大衆をおさえることに自分たちの利益のあることを実証したとき、はじめにも破られた。この根本的な事実は、いままなお当時と同じように真実である。これこそ一九三七—三八年の諸条件およびそれに直結する将来の見通しを評価

し、理解する主要な標準であろう。」

アイザックスはこの標準から、毛沢東の土地政策は一九二七年の二の舞いを演ずることを約束したものだと言断した。これは毛沢東の声明を文字通りに理解したことからきた判断である。もしも毛沢東がかれの言葉通りを実行する男ならば、おそらく一九二七年の悲劇がもういちど繰りかえされたかもしれない。だが中国には年数がたてば道路も河となり（両側の農民に土をけずりとられるから）嫁も姑になるということわざがあるように、中国共産党も一九三七年には「大人の党」になっていた。毛沢東はアイザックスの言葉通りに国民党には「あらゆる階級の利益は日本帝国主義にたいする闘争のなかで融合する」と言っていたが、共産党員には一九二七年の経験から学べとって階級闘争を一刻も忘れさせなかった。こうして名目はともかく、中共軍の占領地区内の農民は基本的には地主の搾取制度から解放されたのだ。「解放区」の真の意味はここにあったのだ。

共産党地区の農民たちはもちろんこの土地所有関係が永続することをのぞんでいたので、国民党が勝利し、地主が都会からもどってくることを欲しなかった。地主がもどってきて、再び地代を徴収しようとすれば、かれらは当然反抗する。それゆえ国民党がたとえ日本に勝利しても、この事態を認めないかぎり農村を支配することは不可能だったのだ。しかし中国経済における農業と工業、農村と都会の比重をかんがえるならば、蒋介石の命運はこの関係のなかですで行きつまり、毛沢東の勝利が約束されていたことがわかる。

## 七 「蒋介石よ去れ！」

中国の戦場では日本軍を目の前にして国共間の鬭争が相変らずくりひろげられていた。国民党は対日戦争に全力をあげることせず、将来の反共のために余力をたくわえておかなければならぬと考えた。この考え方は戦局の上にも現われ、蒋介石が重慶に移ってからは、国民党軍は日本軍に対する「応戦」から「観戦」にかわった。つまり日本軍が八路軍や新四軍を攻撃することを手をこまねいて「観戦」していたのだ。だが共産党の勢力が拡大してくるにつれて、のんきに「観戦」してもいられなくなり、やがて「観戦」は「助戦」に変わってきた。いうなれば日本軍の共産軍攻撃に歩調をあわせて自分でも攻撃をしかけたのである。前述の皖南事件、爺台山事件などは、そのよい例である。

抗戦下におけるこういう公開的な反共作戦が国民の間かなりの不満を買ったことがわかると、こゝろは「曲線救国」という謀略を思いついた。それは雑軍の一部に意をさずけてわざと日本に投降させ「皇協軍」という名のもとに日本軍の八路軍討伐戦に参加させたのである。こういう状況のもとに国民党軍と日本軍との間は事実上停戦状態になってしまった。毛沢東はこういう事態のおこることをいわゆる「相峙段階」のなかに予想していた。かれはその持久戦論のなかで抗日戦争を三つの段階に分け、第一段階では日本が破竹の勢いで進撃するが奥地にはいるにしたがって困難が多くなり、相待峙し

で動かない段階にはいり、最後に中国軍が反攻に出て日本軍をやぶる反攻段階にはいると論じていた。国民党軍が日本軍にたいして、戦意を失ったのは理由のないことではない。「相峙の段階」、即ち抗日戦争の中たるみ期間において蔣政権は米国から莫大な借款と物資の援助をうけた。これが米国の参戦と相俟って国民党に抗戦の前途について大きな安易感をあたえ、国民党を急速に墮落させ、その支配地域には幾多の暗黒面が生まれた。まず国民党最上層部は米国の援助物資を投機的に操縦することによって官僚資本をつくり出した。官僚資本はやがて経済動脈のすべてを支配するようになった。當時、蔣、宋、孔、陳「四大家族」（蔣介石、宋子文、孔祥熙、陳立夫）の戦時利得は二百億米ドルにたつたと言われていた。政治面では国民党の特務機関がばっこし、労働者を強制的に兵役にかり出した。ジャック・ベルデンは重慶の針工場主が自分がつかつている労働者を強制徴兵からまもるために一人につき十萬元を支払っていた例をあげている。（同氏『中国は世界を震撼する』三二七頁）官僚資本その他の戦時成金はその豊富な資金で土地の買上げにのり出したことはすでにのべておいた。その結果農民からも多数の失業者が出た。しかし国民党では国民の困苦は問題にならなかつた。一九四一年から二年にかけて河南省では七十余県が旱害や蝗害のために荒廃したが、そこに駐防していた湯恩伯の部隊はそんなことには一向かまわず壮丁と食糧の徴発をやり、人民を人が人を食べる饑餓状態に陥し入れた。常時河南の人々は「河南の四荒は水、旱、蝗、湯」とうたった。湯とは湯恩伯部隊のことである。それゆえ一九四二年には多数の農民が日本軍と歩調を合わせて湯恩伯軍を襲撃するという事

件さえおこっている。このように国民党軍の内部にはすでに自壊作用がはじまっていたのだ。

国民のなかには、このような事態をそのままにしておいたのでは抗戦の勝利はおぼつかないと考えはじめたものがあらわれた。毛沢東はこの機を逸せず（一九四四年九月）「国民政府と統帥部を改組し、民主連合政府をつくれ」とよびかけた。すばらしいタイミングである。

この要求はたんに国民大衆ばかりでなく、蒋介石の軍事独裁に反対する軍閥（陳銘枢龍雲のような）、政客（程潜のような）、中小民族資本の代表者（沈鈞儒、章乃器のような）、学生労働者の間に大きな反響をまきおこした。蒋介石はこの国民的輿論におされてやむをえず毛沢東と談判をはじめた。中国共産党の提案は双方にとって重大な結果をもつものであるから、談判は容易にまとまらず、いたずらにながびくだけだった。

その頃（一九四五年七月一日）この談判を側面から促進させようとして延安に行った民主政団同盟のひとり黄炎培は、七月四日毛沢東と会見した。毛沢東は黄炎培に中国共産党が決して国民党のいうような狂暴な政党ではないことを印象づけようとして次のようにのべている。

「中国共産党のやりかたは民国三十一年（一九四二年）にかわりました。その年われわれは過去において色々な誤謬をおかしていたことを悟ったのです。誤謬はわれわれが主観主義、宗派主義、党八股主義（公式主義）の毒にあたっていたためにおこったのです。中国共産党の黨員になっても中国を見ず、ただ書棚のうえにマルクス主義文献だけを見ていたのです。」

中国の貧農の要求はなんでしょうか。かれらは耕作することを要求しております。田租(地租)を軽くすることを要求しております。かれらにはいまの田租は重すぎるのです。もちろん自分で自分の田をもつことができれば、そんなことはありません。だがそれはつぎの希望です。そこでわれわれは減租をしております。地主が田租を取ることに反対しません。もし田租を軽減するならば進んで田租を保証してやることにしています。

われわれは金貸が農民に金を貸して利息をとることに反対しません。ただしその利息は安くしなければいけません。もしかれらが減息するならばそれを保証してやります。なぜかという、貧民は借金が必要としているので、その必要をみたしてやらなければならぬからであります。」(黄炎培著「延安五日記」)

かれのこの言葉がほんとならば、中国共産党は革命党ではなく改良主義政党だ。これはもちろんかれが黄炎培らの宣伝力を利用して中国共産党がいかに穏当な政策を主張しているかということ、国民に信じこませようとしたものだ。しかし当時の人はこの和風細雨のクライメイトがいつまでつづくかは知らなかったが、ともかくこの言葉をどう割引きしても、そこには国民党地区の空気よりもはるかにたかいもののあることを感じた。両者の相違は中国語のいわゆる「朝氣」と「暮氣」のちがいである。

このような雰囲気なかで二つの中国は一九四五年八月十五日、日本の無条件降服によってアメリカ

カから同じように「勝利」と「平和」の配給をえたのだ。それはもちろん正しくは「平和」の配給ではなく、新たな内戦の配給にほかならなかった。

中国の日本軍が降服したとき蒋介石の主力は四川にいたが、中共の主力は北京・天津の近くにあり、しかも南京・上海の周辺にはその影響下にあるゲリラ隊が散在していた。それゆえ、もし日本軍が現地でその武器を中国側にひきわたすとすれば、その大部分は共産軍の手にわたる。蒋介石のため、この危機を救ってくれたのはアメリカだった。アメリカは日本軍に命じて共産軍の進出を食い止めさせ、それと同時にその航空機の全力をあげて蔣の軍隊を海岸地方の要衝に輸送した。

しかしそれだけでは問題は解決しなかった。都会はその交通線を確保しなかり防衛できない。とくに蒋介石の勢力圏たる揚子江下流地方を遠くはなれた北京において然りである。それには京漢線、津浦線の二幹線とその間にある黄河流域、いわゆる「中原」の地を確保しなければならぬ。この必要にせまられて終戦からわずか二カ月後に蒋介石は手もとにありあわせの軍隊をそこに急派した。

そのとき太行山にいた独眼竜將軍劉伯承がこの機会をみのがすはずはない。かれは突然山をおりて国民党を攻撃した。その結果山西にはいった国民党軍も河北にはいった国民党軍も、わずか一週間で殲滅的な打撃をうけて潰走した。蒋介石はこの惨敗から剿共を行なうために充分な準備期間が必要なることを知った。これが一九四六年一月米国のマーシャル特使の調定による停戦協定が生まれた主要な理由だった。



蔣介石はこの停戦期間を共産軍に対する総力戦の準備につかった。この年の六月、かれをして停戦協定の破棄を決心させたのはおそらく国民党軍と共産軍との間の兵数の圧倒的な相違であろう。ごく大ざっぱに計算しても当時国民党軍は共産軍百二十万にたいして四百万の優勢を持っていた。そのうえ国民党軍にはアメリカから贈られた近代的兵器があった。蔣はこんどこそこの兵力の相違にものを言わせて、一挙に共産軍を押しつぶしてしまおうと考えた。この剿共戦の出だしはすこぶる好調で、南京・上海の周辺から陳毅軍はたちまち掃討された。北方では共産軍の手にあった唯一の大都会張家口が奪回された。だが共産軍のこの敗退が戦略的なものであることは間もなくわかった。共産軍の特徴はその機動戦にある。国民党軍は都会を占領したものの、交通線はたえずおびやかされていた。それを守るために兵力を分散すればたちまちかれらの好餌になってしまった。そのために国民党の土気は占領地域の拡大に反比例して衰えるばかりだった。そのうえ蔣にとって悪いことにはその頃山西、河南、山東、河北の平原に国民党軍にとって都合の悪い情勢が生まれていた。これらの地域の農民は抗戦中にかれらの手で土地問題がある程度解決していた。そこへ国民党軍とともに地主がかえってきて土地をとりもどそうとしたのだ。両者は武器をもって相対峙し農村はふたたび騒然となった。国民党軍は地主の側にたち、行く先きざきで農民に残酷な懲罰をおこなった。その過程における兵士たちの掠奪のはげしさは小作農はもちろん中農、富農までもかれらの敵にまわってしまった。その結果国民党軍は民衆の敵意の海にかこまれて、かれらの駐防地から一步も外にでられないありさまになっ

た。この状態に追いうちをかけるかのように毛沢東は一九四六年の夏「減租減息」政策をやめて「土地改革」政策を採用した。「土地を分配してもよい」——この声明は農村から農村につたわった。これで農民は決定的に共産党側にたつようになったのだ。

蒋介石は戦局の停滞を打開するためには、華北で戦っていた二つの共産軍、劉伯承軍と陳毅軍の連絡を絶ち各個撃破をおこなうほかはないと考えた。そのためには、一九三八年日本軍を食いとめるために決潰させた黄河を再びもとの流れにもどし、劉伯承軍の駐防地を水びたしにする戦術が考えられた。もちろんこの戦術がとられればその農民たちは一夜で家や耕地や生命までも危険にさらされる。しかし、一九四七年の春、まさにそのような戦術がとられた。黄河は三八年の決潰口をふさがれ、再びもとの河床に流れ出した。そして劉伯承軍が洪水とたたかっているあいだに、国民党軍は長驅陝西に進出し、中共の首都延安を占領した。この占領はしかし国民党の宣伝ほどの意味はない。ここでもまたかつての瑞金占領と同じように中共幹部はもぬけのからだだったからだ。

共産軍は延安を棄てて北方へ逃げた。国民党軍はそれを追った。その結果国民党軍の山西・河南・山東にかけての防備は当然手薄になった。これを共産軍が見おとすはずはない。いまこそ待ちにまつた反攻の時機が来たのである。六月三十日劉伯承部隊は黄河を渡った。隴西鉄道は各所において切断され、潼関以北の国民党軍は鉄道による補充線を絶たれてしまった。しかし劉伯承部隊はそれを攻撃しようともせず、できるだけ戦いをさけて南へ南へと下った。かれの目的はただ蒋介石政権の地盤ふ

かく侵透することだった。かれの軍隊は行く先きざきで農民遊撃隊を改編し拡大していった。国民党の新聞紙は「劉伯承部隊は南へ逃亡中」と報道したが、敵の本拠に向かって「逃亡」するこの部隊は九月ついに楊子江岸に到達し、この華中の大動脈を切断したのである。

こうなつては蒋介石も身近かに迫つた危機をかくしきれなかった。かれはあわてて華北戦線から兵力をさいて華中に新たな戦線をひらいた。このことは前から中共の戦略のなかにおりこまれていた。華北戦線の手薄に乗じてさらに多くの部隊が「中原」に侵透した。山東に逃げていた陳毅部隊は江蘇の北辺に進出し、抗戦中に養つていた江北のゲリラ隊と連絡し南京をおびやかした。いまやなんびとの目にも蒋介石が戦争の主導権を失つたことは明らかである。

南京の蒋介石政権は、はやくも崩壊前夜の諸様相が現われてきた。国民党領袖の間に内訌が現われた。馮玉祥は蒋介石の命令をきかずアメリカから帰ることを拒んだ。李濟琛は香港から華南の叛乱を煽動した。四川軍閥は国民党に送る軍米の輸送を拒んだ。

この情勢を静かにながめていた毛沢東は、一九二七年以来心の奥そこにひめていたほんとうの要求を国民党にたたきつけた。「蒋介石、下野せよ！」である。こうして中国革命のジク・ザクコース、中国語でいえば「之」の字のコースは、とうとうその最初の目標に到達したのである。

第五章 毛沢東政権の内側

一 なにが中華人民共和国を創り出したか

一九四八年十二月毛沢東は国民党に和平をよびかけ、同時に蒋介石を首魁とする四十三人の戦犯引渡しを要求した。これは毛沢東の読みの深い謀略だった。こうすれば国民党のなかの対立はふかまる。案の定、白崇禧はたたちに蒋介石の前に和平問題を提起した。おそらくこれについて白崇禧は同郷（広西）の親友李宗仁と暗黙の諒解ができていたにちがいない。この二人は、人びとが一口に李・白とよんでいる。李・白は唐の詩人李白に通ずるのでこんなこともいわれていた。「文人にして又武人、今人にして又古人、一人にして又二人、二人にして仍<sup>オナカ</sup>ち一人。」

一九四九年一月蔣はついに李宗仁に主席の地位をゆずって、故郷奉化に引きあげざるをえなくなつた。

李宗仁は毛沢東のもとに和平交渉の使節団をおくった。名は和平交渉だが、実際には毛から降服条件をうけたまわっただけである。さすがの李宗仁もそれには応じなかった。四月二十日が調印の最終日にきめられていたが、その日の終る七時間前に李から調印拒絶の電報が到達した。毛沢東は即座に楊子江北岸に待機していた「人民解放軍」に渡河命令を下した。国民党にはもはやそれを阻む力はない。それから数週もたないうちに国民党政府の本拠南京・上海は「解放」された。

これらの都市の市民たちは、これまでかれらがもっていた「兵士」のイメージとはおよそちがった兵士たちの入城にとまどいした。中国共産党には決して好意をもっていないUP電（一九四九年六月三日）さえ解放軍の印象をこう伝えている。

「もしも貴方がいま解放されたばかりの南京で、十人の人に質問すれば、そのうちの九人は『解放軍の規律はとてもいい』と答えるであろう。私の知っている人々はみな解放軍がいままでになかったよい軍隊であることを承認している。蒋介石でさえも自分で解放軍と接触する機会があったならば、かれの頑固な思想を変えるだろう。」

中国人の大部分は、しかし共産主義を理解したがゆえに共産党を支持したのではない。いな、中国人の大部分は共産主義を知らなかったがゆえに共産党を支持したともいえよう。それゆえ、いかにしてかれらの、心からの支持をかちとるか、そしてそのうえにいかなる中国を建設するかという課題が、今後毛沢東の共産党にのこされた問題だった。

一九四九年十月一日毛沢東を主席とする「中華人民共和國中央人民政府」が北京に誕生した。この政府は各党各派の民主的な連合体の形をとっているが、その指導権が中国共産党にあることはいうまでもない。中国共産党は一九二一年の創立大会以来二十九年目にして政権の座についた。この日をむかえた毛沢東をはじめ朱徳、劉少奇、周恩来その他もろもろの共産党員は、どんな感慨をもって、それぞれに苦しかった闘争のこしかたを想起したのであろうか。またこの日を心にえがきながらいかに多くの有名無名の革命家が半途で倒れたであろうか。かれらは毛沢東のようなすぐれた指導の才能をもった人々でもなく、それほど幸運でもなかった。だが、かれらが革命にそそいだ情熱だけは、かれにまさるもおとらない純情の人びとが多かった。中国革命の成功における毛沢東の役割は評価しきれないものがあるかもしれない。だが中国革命の原動力は、これらの人びとがそれぞれの場において革命にそそいだエネルギーなのだ。そのなかには脇役ではあったが、死ぬまで革命の舞台にたつて活動しつづける人もあろう。だが舞台に片足もかけずに消えていったものも多い。人には見えない舞台うちの活動で一生をおわたったものもある。なかには革命的役割をはたしながら反革命の汚名をきせられて、味方と思った人びとに殺された不幸なものもある。これら無名の戦士たちが、それぞれに祖国を半植民地状態から救い出そうとする闘争のなかで發揮したヒロイズムの大潮流が、中国革命をおしすすめたのだ。

四千年もねむりこけたような中国人の精神のいったいどこに、このようなヒロイズムがあったので

らうか。アーサー・スミス（清末中国に赴任し中国人の性格などを研究した米国の牧師）がえがいている「中国的性格」からは、それは想像もできない。しかし半植民地中国のあの腐敗と混乱、民族的屈辱感、中国人がそれにはたいして精神的レジスタンスを試みないような民族ならば、かれらは四千年の風雪には耐えず、古代エジプト人のように地上から姿を消していたであろう。では中国人をその民族的危機に際して、つねに精神的レジスタンスにたちあがらせ、破滅から救ったものはなんであろうか。私はそれは儒教だと考えている。ここではそれをながながと説くひまはないが、ひとつの実例をもって示そう。

漢民族の最大の危機はやはり一二六〇年代の「元寇」だった。そのとき南宋は元の大軍に侵入され、宋軍はいたるところで蹴ちらされた。臨安がおちたとき宋の皇帝恭宗や皇后たちは元軍に捕えられた。虜囚のはずかしめを死によってのがれようと、宮女の水に投ずるものは百名をこえた。張世傑、陸秀夫らは広州によって最後のレジスタンスをこころみようとし、ついに厓山において全軍がここで壊滅した。厓山の海は七日を経て死屍の海上に浮ぶもの十余万、そのなかには陸秀夫に背負われた帝昴の可憐な屍も発見された。

この漢民族王朝の悲歌は文天祥の死によってむすばれている。かれは捕えられ、燕京におくられた。元帝はかれに降伏をすすめたが、かれはついにきかなかった。土窟に幽閉されること二年、ついに歳四十七で斬られた。刑に臨んでは「我事畢れり」と南を拝して死んだ。



かれが死にのぞんで書きのこした正氣の歌は「予、北庭に囚われて一土窟に坐す。広さ八尺、深さ四尋……。この夏日にあたりては諸氣華然たり。」と書いているように、まっくらな土牢のなかで、暑氣、湿氣などの悪氣と戦いつつ元帝につかえることを拒否し、漢民族への忠誠を守っていられる自分をみつめながら、この宇宙のなかにも、自分のなかにも「正氣」というものがあって、かれの精神をささえていることを感じ、感激をもってそれをうたいあげたものである。

文天祥のこういう考えかたは、宋代に発達した儒教哲学―道学ともいい理学ともいう―にもとづくものである。道学は南宋朱子によって大成した。孔子は天を絶対者と考えていたが、この絶対者がいかにしてつくられたかという問題にふれることをタブーとする。だが朱子はこの問題ととりくんで「天」を説明した。かれは四歳のときすでに「天の上に何物ありや」とたずねたといわれている。

朱子は天の本体は「理」であるといい、天が万物に賦与するものが「命」であり、人がこれをうけたものが「性」であり、「性」が外物に応じて動くところが「情」であり、「情」がそとに発出したものが「慾」であるとし、人間の精神を天理の発現としてとらえた。それゆえかれにおいては人間の正しい情理、たとえば君臣上下の関係は永遠に変わらぬ天理そのものだったのだ。それゆえ君主に対して臣たる義務を果すことは、人間としての天理を実現することだった。言葉をかえていえば、それは心のうちにある天の至上命令なのだ。ここに儒教の伝統的な使命観があった。

文天祥の君主にたいする忠誠はこれで説明できよう。それはかれがそうしなければならぬ心の

うちにある天地の正氣——天の至上命令といつてもよい——の命ずるところなのだ。

もしもこの君主への忠誠を民族への忠誠、人民への献身におきかえるならば、そこに毛沢東その他の革命家の心境をみいだすことができよう。かれらにおいては「民族への忠誠、人民への献身」は、なにも世のため人のためというような思いあがった気持からでたのではなく、そうしなければいられない自分のうちにある道德律——これを天理といつてもよい——の至上命令からなのだ。いな、そうすることが自分が天からうけた生命——宇宙の原理——を実現するゆえんなのだ。それゆえかれらは生命のつづくかぎり、民族が人民への奉仕をつづけようとする。ここにかれらの使命觀の根深かさがあつた。

## 二 あるひとりの革命家

古代中国語がかたられていたころにつかわれていたエジプト語、サンスクリット語、ヘブライ語は、いまではみんな死語になっている。現在、活きている言葉では、中国語は世界最古の言葉なのだ。中華民族もまた世界最古の民族でありながら、いまなお生命力にあふれている。それはあたかも、この民族が他民族におかされて滅亡に頻すると、この民族のうちにある不滅の生命力が、人々の精神をゆるりうごかすかのようにみえる。

ここに中華民族の不滅の生命力そのもののような、ひとりの中国人を紹介することにしよう。かれは中国共産党員のひとりであるが、その名をいっても知らない人が多い。一八七八年の生まれであるから、中華人民共和国が生まれたときにはちやうど七十三歳の老人であった。かれはそのながい一生をひたむきに革命につくしたのだが、そのなかで演じた役割はいつも脇役だった。かれと共演した立役者たちは、いま歴史の表面にはなばなく名をあらわしているが、この脇役の名を記憶している人は、ほんの少数である。

かれは青年時代には汪精衛とともに打倒清朝の革命運動をやった。汪精衛が清朝の摂政王を暗殺しようとした有名な事件がある。かれは、汪精衛からその計画をうちあけられ援助をたのまれたとき、革命の本すじからいってテロはもつてのほかだとことわった。口のうまい汪精衛はかれにこう書きおくれた。

「革命とは飯をたくようなものです。つまり鍋と薪たきぎの協力が必要です。鍋の中の水は薪の火で熱せられて、はじめてよい具合に飯がたけます。私は元来薪のはげしさをもっていますが、水の冷静さをもっていません。だから私は薪となってわが身をやきつくし、それによって革命の飯をたきたいのです」

感激性のつよいかれは、この一言に感激してただちに北京に同志を派遣して写真館を経営させた。この写真館が暗殺計画の本部となったことはよく知られている。

一九一八年広州に広東軍政府ができたとき、この政府と孫文を結びつけたのはかれだった。この政府をたてた広東軍閥の岑春煊は憲法擁護を表看板とし、革命政府の外観をととのえるために孫文の参加をのぞんだ。岑春煊はかれを上海に派遣して、病氣静養中の孫文を広州にむかえようとした。孫文は岑の意図を知っていたので、かれの申し出を頭から拒絶した。このときかれは毅然として孫文にいった。

「われわれ革命運動をする人間は大衆から離れてはいけません。あなたは政治活動から離れるわけにはいかないのです。……あなたがこれを拒絶したとしても、かれらはやはり別の形で大衆をだますのですから、やはりあなたがおいでになられて、かれらと合作し、かれらの野心を矯めながら、一緒に北洋軍閥と戦わなければいけません。」

孫文はかれのこの言葉にうたれ、即座に承諾をあたえ、汪精衛を代理として広東軍政府に参加した。

かれは四川省榮縣舖石郷に生まれた。兄は清朝の秀才で、宋明の道学を専攻した。かれは兄についてそれを学んだ。こういう教育と環境のなかでかれはしらずしらず強烈な忠君愛国主義者に育てあげられていた。日清戦争で清国が小国日本にうち破られ、ときの光緒皇帝から、国民はしのびがたきをしので和平に同意してくれという終戦の詔勅がでたとき、この青年愛国者は一晩中あふれおちる涙を禁じえなかつたという。

この敗戦以来、中国では、祖国を富強の大国として再建するためには国民はどうしたらよいかということが真剣に討論された。この問題をひっさげて立ちあがったのが康有為や梁啓超である。かれらは日本のような小国があのように強国になった秘訣は明治維新にあると考え、もし清朝のような大国で、もしも「維新」が実行できたら、わが国はどのくらい強くなるかわからないといった。これが有名な「変法自彊」（憲法をしき自ら富強となる方法）の説である。

この憂国青年はこの説に傾倒してしまった。かれはよいと考えることはすぐ実践にうつさなければならぬ性格だった。ただちに同じ憂国の仲間をあつめて、康有為らの主張を宣伝する組織をつくり、郷党の間に「これからは八股文（ちこばん）（韻をふむ中国の旧式文体、これがうまくなければ官吏に採用されない）などに浮身をやつしているときではない。中国の学問を主として研究することは当然だが、同時に西洋の実学をまなんで支柱としなければいけない。」（中学為主西学為輔）と説きまわった。

康有為らの運動はしかしながら百日しか続かなかつた。かれらの保護者光緒皇帝は保守派の西太后によつて監禁され、「変法」派のおもな指導者はことごとく弾圧されてしまった。郷党の保守派はそれみたことかとかれをあざ笑った。かれが外をあるくと人びとは後指をさして「変法の大家がやってきたぞ」と嘲笑する始末だった。

故郷のこういう空気にいたたまれず、かれは一九〇三年、兄とともに日本に留学した。かれは電気工学を学んで国家の再建につくそうと考えていた。

その頃日本にいた中国学生の間では、鄒容の書いた「革命軍」という本がさかんに読まれていた。鄒容はこの書で、腐りきった清朝を倒さなければ、中国は強国にはなれない、いまこそ中国人はたつて革命軍を起すべきだと説いていた。この本を読んだときかれは自分のこれまでの考え方を再検討する必要があると思いはじめた。それからかれは、電気学の本をなげすめてダーウィンやルソーの本を読みふけり、やがて欧州の革命に関する本を読みあさるようになり、かつて康有為らの考え方に共鳴したことを深く自己批判していた。かれは中国という重病人に根本的治療を加えようとはせず、ただ腐った肉を切り取るだけの姑息な治療法でそれが治ると思ったことはまちがいだと知った。

間もなくかれは孫文を知った。孫文の「韃虜（だうりゅう）（清朝のこと）を駆除して中華を恢復し、民国を建立して地権を平均にす」というスローガンに感激し、これこそ中国を富強の国家として復興する道だと考えた。かれはただちに孫文に交りを求め、同盟会の創立に参画した。その当時日本には、かれがかつて崇拜した梁啓超が亡命していた。梁啓超派は孫文の革命は過激にすぎるといい、「新民叢報」を発行して同盟会に反対していた。これにたいし同盟会は「民報」を発行し、両者の間にははなばなしい論戦が展開された。かれは別に「四川雜誌」をおこし、同盟会側にたつてこの論戦に加わった。面白いことに毛沢東はその当時手に入らなかったためでもあろうが「民報」や「四川雜誌」よりも、むしろ「新民叢報」を愛読していたのである。

かれは文筆活動だけにとどまらなかった。かれは香港において黄興、胡漢民らとともに叛乱を計画

したが、失敗して七十二人の犠牲を出した。これが辛亥革命の前哨戦ともいべき黄花崗事件である。そのとき使用した武器は、かれが危険をおかして日本から密輸したものだ。

だがかれはそんなことではへこたれなかった。一九一一年、辛亥革命の一カ月前に故郷榮県に四川同盟会の会員をあつめて独立を宣言した。この独立宣言はやがて四川全省の独立運動に発展し、それから辛亥革命の成功が生まれたのである。

しかしこの革命の成果は、清朝と革命軍の間にたつてキヤステイニング・ボートをにぎった袁世凱に横どりされてしまった。同盟会はこの際袁と妥協すべきだというもの、それに反対するものの二派にわかれた。孫文は心ならずも妥協派に従った。こうして同盟会は自ら解散した。このとき会員の一人の口から思わず悲壮な言葉がもれた。「革命軍はおこり革命は消えてゆく。」

ひそかにこの経過をながめていた袁世凱はもう革命派をおそれなかった。かれは腰のよわい革命家は銀の弾丸たまで、強い革命家は鉛の弾丸で屈服させることができるようになる。強硬派の領袖として知られた宋教仁には間もなく鉛の弾丸が用いられた。

かれはふたたび立ちあがって、孫文に第二革命の実行をせまった。こんどは黃興が不同意をとない、孫文はその時期を失ってしまった。革命の先鋒となった李烈鈞の挙兵は、その後につづくものがないのでたちまち袁世凱に鎮圧されてしまった。かれにも袁から逮捕令が出たので、友人たちはかれのために亡命の資金を集めて、パリ行きの切符を買いたえた。一九一三年の冬のことである。

爾来十年間かれはフランスで生活し、パリ大学の法科で三年間政治経済を勉強し、そして社会主義の理想の正しさを知った。フランスは空想社会主義揺籃の地であるが、いかにしてその理想を達成するかについては、かれに何も教えなかった。

そのころヨーロッパには大きな変革がおこった。ロシアの革命派は腐敗した帝政を倒した。かれはロシアの革命理論が科学的社会主義、すなわちマルクス主義だと知ったとき、自分がいままでながい間もとめていたものがそこにあることを感じ、その研究に専心することになった。

マルクス・レーニンとは、実践のともなわない思想の意味のないことを教えている。かれはこの問題を中国革命とむすびつけて考えていた。一九二三年故郷四川に帰ったかれは、ただちに「赤心評論」を創刊し、共産党の組織にとりかかった。あつまった同志はわずかに二十余人、かれはこれをもって「中国青年共産党」を組織した。一九二五年北京に出たかれは、そこではじめて中国共産党が一九二一年すでに成立していたことを知り、すぐに自分のおこした「中国青年共産党」を解散し、一党員としてそれに参加したのだ。

かれは孫文の旧い同志として国民党にも籍をもっていたから、国民革命の成功後は武漢政府の五人委員会の一人となった。しかし武漢政府が共産党の弾圧をはじめると、このあたたかい椅子をすてて南昌暴動に参加した。この暴動失敗の後かれは葉挺部隊について南下し、この部隊が福建省境で大敗を喫したのち、身をもって香港へ、そしてふたたびソ連に亡命した。このときかれは五十一歳、老



いこむことのはやい中国人としては、もう老人としてあつかわれる年齢とだった。だがかれはモスクワ中山大学特別班に入学し、若いものと一緒にマルクス・レーニン主義の研究をその基礎からやり直した。一九三五年日本の侵略による祖国の危機に、いてもたってもいられなくなり、ソ連からフランスに移って「救国時報」の発行をはじめた。三八年に帰国して延安にはいったときは、かれはすでに六十歳をこえていた。

かれは十八歳のとき中国の旧習にしたがって結婚し、一男、一女をあげていた。結婚してまもなく海外に留学し、それ以後革命家としての忙しい生活がつづき、妻とはほとんど一緒に暮していない。だがかれは長い流浪生活中ついぞ女の問題をおこしていない。かれはよくこう言っていた。

「自分たちは頽廢した旧道徳を改め新道徳をたてることを身をもって示さなければならぬ。自分の都合のために糟糠の妻を離別し、婦人の生活を誤まらせるのはまちがいだ。そんなことをすれば、われわれのいう男女平等は単なる宣伝におわる。私たちは旧式の結婚でむすばれたのであるが、離婚はしない。私はよろこんで一身の幸福を犠牲にする。」

毛沢東の離婚事件を前にして、こういう発言ができる人があるからこそ中国の文化は不滅だったのだ。昨年（一九六六年）十二月十二日かれは文化大革命で紅衛兵の荒れくるっている北京で八十九歳のそのながい生涯をとじた。

かれとは、中共中央委員の最年長者呉玉章その人である。かれの一生をなが々と述べたのは、そ

の経歴のなかに清朝から中共までの革命思想の変遷がはっきりと表現されているからだ。毛沢東の周囲にはかれのほかには謝覚哉、徐特立、林祖涵など、清朝、袁朝、蔣朝の三代にわたり、三つの革命段階をへてきた革命家がひかえていた。

中国の最初の国慶節の日、この人びとも天安門の上にならんでいたが、おそらくそれを記憶している人は少ないであろう。この人たちはそれぞれの時代で、つねにひとよりも一歩先に時代の矛盾を感じとり、人びとに率先してそれを解決しようとし、若き日のエネルギーを革命にそそいだ。そしてかれらはそれぞれの役割りを終えるとともに歴史のなかに消えていった。中国の歴史はつねにこういう人々によって新たな生命力を賦与されてきたのである。

### 三 「隣り組」組織の活用

国慶節の日、天安門の上にならって毛沢東は、絶える間もなく湧き出してくる民衆の潮流をながめながらこんな感慨にふけていた。これまでの中国の支配者たちはほんとの意味で中国を支配したことはないのだ。民衆はさだめどおりに租税をおさめ、労力を提供するが、そのほかのことはすべて自分たちの自治でやってきた。政府と人民はそれぞれに別々な生活をおくり、その間に恒久的な協力関係はなかった。こんなことでどうして近代国家がつくれようか。われわれは政府と人民とがコンクリート

のように団結した中国をつくろう。中国共産党はその間をつなぐセメントにならなければいけない。

毛沢東は中国の近代化のためには、まず中国全体をおおうかれの権力のメカニズムをつくりあげなければならぬと考えた。それにはまず第一に、これまで野放しになっていた民衆を組織し、中国共産党の指令が一瞬にして国のすみずみにまでゆきわたるような一大組織をつくらなければならない。一九四九年から一九五四年までの中国の諸運動はそれぞれの目的のほかにみなこの権力メカニズムの構成という目的とむすびついていた。そのもつともよい例が一九五〇年十二月八日「郷」（日本の郡にあたる）を単位とする「郷人民政府組織通則」の発布であろう。これによって従来の「村」という行政単位はなくなってしまう。現在この国では「村」という名前をつかっているところは沢山あるが、それは習慣上の名前で、行政区分上の名前ではない。そのために従来の村を単位とする政治のありかたが変ってきて、「居民小組」の役割が大きく浮かびあがってきた。居民小組は戦争中に日本で活発に働いた隣組制度をもっと強化したものと思えばよい。内務部組織司長齊光東はこういつている。「村という組織が取り消された結果……郷のなかにある村の居民小組が代表主任をえらび、郷と居民小組の直接連絡に当たらせるべきである。」

これまで農村自治のよりどころであった「村」はこうして解消され、居民小組が直接国家の指令をうけることになった。農村にはその後、貧農組合や人民公社が組織され、居民小組による住民の政治動員のすがたがはつきりしないから都会の居民小組についてその機能を説明しよう。

たとえば例を上海にとってみる。この大都會の住宅街は昔から弄堂ロウタンまたは里弄リロウといわれるものである。弄堂ロウタンとは街路の両側がゆきどまりの裏小路で、その両側がすべて住宅となっている。小路の入口には鉄扉があり、それぞれ弄堂の名前、たとえば「義和里イハカリ」とか「萬萬坊ワンワンフ」とかいう門牌カンバンがかけられている。こういう弄堂を一面として、そこにすむ居民全部を一つの組織にしたのが、弄堂組または居民小組である。これが政府からの命令を居民に伝達し、政府の指導する運動に居民を動員する最下級の行政機関だ。各居民小組からそれぞれ二名の代表がでて、居民委員会を組織している。上海市は現在三十二の区に分かれ、各区には五ないし一〇の居住委員会がある。

たとえば上海飛行場にカンボジアのシアヌーク殿下がくるから歓迎せよという指令が、北京の党本部から上海市党委員会についたとすると、その指令はすぐ、市党委から各区党委へ、各区党委から居住委員会に到達する。居住委員会はその指令にもとづき、その下の各居住小組にそれぞれの動員人数をわりあてる。そこで翌日居住小組から小旗や花をもった歓迎人員が指定の場所に整列し、シアヌーク殿下万歳をさげふということになる。これがこの国の「民衆の歓迎」の実体なのだ。

毛沢東はこの国に、共産党の権力メカニズムをつくりあげるために、こういう大衆運動を使った。もともと中国共産党が政権をとったのは、直接には人民解放軍の武力によったものである。国民の大部分は共産主義がどういうものか知らない。ただ国民党政権の腐敗にあいそをつかして、主義のいかんをとわず、共産党を支持した。中共もそれをよく知っているので、「解放」後すぐには社会革命

的措施をとらなかつた。そしてしばらくのあいだ春風駘蕩の時期がつづいた。人びとは共産党の政治がこんなものなら、なにもおそろしいものではないと安心してゐた。だが既存社会の下層階級に基礎をおく中共にとっては、これはかなり危険なことだつた。当時民衆組織工作を担当していた鄧子恢（当時中南軍政委員会副主席）は「われわれの革命は基本的には成功したが、社会の基層は決して変化してゐない。これは実に危険なことだ」といつてゐた。もともと民衆は革命に参加してゐないので、中共政権になつても下層階級は上層階級を「敵」とは思つてゐなかつた。そこで中共は上から「人工的」な社会革命をおこそうとした。つまり政府の指導によつて民衆の間に階級闘争をおこし、下層をして上層の異質分子を淘汰させようとしたのである。それはひとつには民衆の社会主義教育でもあつたら、鳴りものいりで派手にやる必要があつた。

一九五一年二月二十一日に公布された「反革命処罰条例」がそのよい例である。ここで「反革命」といつても、それは現在共産党にたいして反革命を企てたものばかりを意味しない。過去において反革命政党内に所属したことのあるもの、もつと具体的にいえば、国民党に關係のあつたものはみんな「反革命」とみとめられた。この条例のほんとのねらいはここにあつたのだ。

しかし最初の出かたは非常におだやかだつた。国民党と關係のあつたものは、それを書き出して届け出れば罪はゆるす、つまり「坦白」（自白）さえすれば既往はとがめないといつた。そこで人びとは共産党の寛大な政策に安心して、自己の過去をあらゐざらゐ坦白した。「坦白」といつても、単に自

分のやったことを述べただけではすまない。国民党内で自分と交渉のあったものの名をのこらず書き出さなければならなかった。同時にまた共産党は各居住小組を動員して、その弄堂の住民でかつて国民党および日本軍の擁立した汪精衛政権に関係したものを密告させた。こうして国民党関係者の詳細なブラックリストができあがったころ、新聞に奇妙な記事があらわれた。人民の間では最近「天もこわくない、地もこわくない、ただこわいのは共産党が寛大をいうことだ。」(天不怕、地不怕、只怕共産党說寛大シユオウワングァイ)という言葉がつかわれている。人民のなかには国民党に親兄弟を殺されたものが多いから、われわれが国民党に寛大にするのをうらんでいるものがあるようだ。われわれは寛大政策を再考慮しなければならなくなったというのだ。それからが大へんだった。毎月のように、各弄堂からすでに居住小組の監視下におかれていた国民党関係者がひたつたてられ、人民裁判にかけられた。一九五一年三月二十六日の人民日報には、三月二十四日北京でひらかれた、そういう「反革命」人民裁判の様子が詳しく報道されている。

この日北京の中央公園に約五千人の民衆が集まった。その前に数珠じゆずつなぎになった「反革命分子」がひきすえられ、それにむかって市長はじめ高級党員の痛烈な弾劾演説がはじまった。その間にも大衆のなかにまじった党員と積極分子が「殺せ！ 殺せ！ 人民の敵をゆるすな」というような叫び声をあげる。やがて壇上の演説者は論告をおえ「同志諸君、われわれはこういう人間を寛大にあつかってよいでしょうか」と民衆にうったえる。これに応じて「ノーノー」、「慈悲は無用だ」、「殺せ！」

というようなさげびがおこり、やがてそれが全会衆の大きなどよめきにかわる。そのとき市長はやおら演壇に立って、おごそかに宣言する、「よろしい人民の意志通りにするのがわれわれの義務である。われわれはちかつかれら処分する。」こうして翌二十五日。刑の執行が市の城壁でおこなわれ、集った大群衆は「反動」が銃殺されるごとに拍手とどよめきをあげた。こんどの紅衛兵さわぎでもこれによく似たシーンがあったようだ。

しかしさすがに北京ではひどい殺しかたはしなかった。地方の都市では見るにたえない残酷な殺りくがおこなわれ、群衆にそれを最後まで見とどけさせた。その方法がいかに残酷なものだったかはあとではなすが、一九五一年四月十六日の香港大公報にのつた、広州市公安局長譚政長が広州市第四回人民代表大会でおこなった次の報告で、そのひどさのほどがだいたい想像できる。

「多くの同志や社会の人びとは、反革命弾圧について明確な認識を欠いている。すなわちかれらは、(一)弾圧があまりに残酷であり、人道に反すると考えている。(二)なぜかれらを教育によって改造せず、殺してしまうのかと思っている。(三)このような殺りくは群衆にわるい影響をあたえ、恐慌をおこすと考えている。(四)弾圧をたんに公安局だけの仕事だとおもっている。(五)これは国民党にたいする共産党の報復だと思っている。」

一九五一年四月十一日の新華社電は、重慶から七万人の人民法廷について報道しているが、これを讀むとこの運動の目的が民衆の社会主義教育にあったことがよくわかる。この事件の内容は、国民党の

「特務」薛智という婦人が、愛国運動の学生たちを国民党に密告し、かれらを殺させたというのである。薛智を摘発したのはなんと彼女の娘陳国珍だった。この法廷でその娘は群衆にむかって、「特務は人間ではありません、わたしはこんな女を母親とはみとめません。政府はこの女を銃殺して人民の害をとりのぞいてください。」と訴えた。集まった「民衆」は、あらしのような拍手をもってかの女を支持し、その母親を銃殺したのである。

こういうことは各地で行なわれていた。この年の五・四運動記念日に上海の高橋中学（高橋は上海の対岸浦東にある町）では、反革命処罰条例でその父親を殺された学生たちをわざわざ演壇にたたせ、それぞれ「感想」をのべさせた。そのひとり方鴻禧という学生はこういつている。

「私は悪ボスの父親が銃殺されたときにもなんとも思いませんでした。私はずっとまえから父親は人民の制裁をうけるにちがいないと思っておりました。私はあいつを自分の父とは思いません。私の敵だと思っております。」（一九五一年五月七日解放日報）

このようにこれまでのモラルをひっくりかえす現象は全国各地でみられた。一九五一年五月二日北京市公安局長羅瑞卿は、同市の人民代表大会で、「妻が反革命の夫を検挙し、子供が大悪漢の父親を訴えるのはまったく正しいことである」と報告している。

もともと中国には昔から「大義親を滅す」という言葉はあるが、ほんとうに大義を自覚している人でもそれは決してなまやさしいことではない。ところがここで父母を訴えているのは中学一年生の子



供たちである。なにかが「あれは父親ではない、階級敵だ」といわせているのだ。

アンドレ・ジードは一九三六年あこがれのロシアの旅にのぼって、そこでかれが見たことをこうかいている。

「今日ソヴィエトで要求されているものは、すべてを受諾する精神であり、順応主義である。そこで人びとに強要されているものは、ソヴィエトでなされているすべてのものに対する賛同である。のみならず為政者たちが獲得しようと努めているものは、その賛同が諦めによって得られた受動的なものではなく、自発的に真摯なものであり、さらに熱狂的なものであるように望まれているのである。」

（「ソヴィエト旅行記」邦訳五十七頁）

これはなんと奇妙な暗合であろうか。当時ソヴェトの法廷では、死刑を宣告された被告たちが、きまりきったようにスターリンは正しかった、自分たちはゆるしがたい誤りをおかしたと自己批判し、中国では人民法廷で殺された人びとの子供たちが突然に階級意識に目覚めたともいうように、自分の父母たちを「政府がああいう悪いやつを殺したことに感謝する」と、大衆のまえでののしっていたのだ。

しかしこの国ではただひとつ、スターリン治下のソ連とちがったところがあった。ソ連では処刑はこっそり行なわれたが、ここでは死刑の執行を舞台にのせたばかりでなく、処刑を大々的に報道し、社会主義教育の資料としたことだ。

この反革命弾圧で殺されたものは、共産党の公表した数字だけを集計しても全国で百三十万をこえている。この運動と平行して、はじめて全国的な規模で土地改革が行なわれた。これもその当面の目的のほかに、農村の階級闘争を促進し、共産党政権を強化する政治目的があったことは否定できない。そこでは江西ソヴェトでとられたのとまったく同じ方法がとられた。地主のなかから「見せしめ」としてえらばれたものが、三角帽子をかぶせられ、ひきまわされ、人民法廷で処刑される。罪数等を減ぜられたものは最低限度の生活ができるだけの土地と農具をのこされるが、あとの財産のすべて、家畜、農具、家財一式は国家に没収され、村民に分配される。村民は地主として殺してしまうものが多ければ多いほど、分配されるものが多くなるから、地主にたいして勢い残酷なことをやる。しかも党は毛沢東が、敵にたいする情けは味方にたいする残忍と言ったと宣伝し、魯迅の有名な言葉「打落水狗」(水に落ちた犬をなぐり殺せ、さもないとその犬はまた人をかむ)などを引用して、さかんに地主にたいする憎しみをあおった。そこでいろいろ手のこんだ虐殺法がとられた。「坐水桶」といって大きな馬だらいに処刑者をくくったまま入れ、頭から熱湯をあびせかける方法、「糞牢」といって、糞だめのなかに口のへんまで漬けて死ぬまで放っておく方法、「騎木驢」といって、太い丸太棒のさきをとがらせ、肛門から胸にかけて突きとおす方法。

あの温厚な中国の人びとが同胞にたいして、どうしてそんな残酷なことができようか。そんなことはデマダと思う人は少なくあるまい。だが、その人は真実を見ていない。革命というものは元来そう

いうもので、血の流れない革命などはありません。共産党が支配し、土地を貧農にわけあたえた所では、もし地主がもどつてくると、すさまじい白色テロがおきたし、その反対のこともまたあった。これまでの歴史のなかで、一つの階級が、別の階級にとってかわる時にはこういうことがくり返され、それが人類の発展の要因でもあったのだ。

この土地改革で殺された地主の数は五百万とも八百万とも一千万ともいわれている。一九五二年十月アメリカの全国労働総同盟自由労働組合委員会は、毛沢東政権は過去五年間一四〇〇万以上を殺したと声明した。毛沢東はしかし、そういう数字には一べつもあたえなかった。かれは中国を近代化するメカニズムをつくりあげるために必要ならば、もっと殺してもしかたがないと思っているのだ。

#### 四 すべては国家へ

毛沢東の権力メカニズムが異分子処理の荒療治でできあがったあとは、この国を「社会主義国家」とする工作はきわめて順調に進行した。

毛沢東は民衆の意見はきいても、それをどういう政策に組み入れるかは自分たちがきめるべきだと考えていた。民衆の関心の範囲は、かれらの周辺にかぎられている。この国はまだ民衆のイニシアテ

イブで政治を行なう段階には達していない。国家民族全体の利害関係をかんがえて政策を決定するのは、中国共産党でなければならぬ。民衆はそれぞれの利害関係のちがういろいろな階級にわかれていて、意見はそれぞれちがっている。そのどれを採りどれを捨てるかは共産党にまかすべきである。

共産党は「解放」のはじめ、「労資兩利」という政策をうちだした。しかしこの政策をいつまでも実行していたならば、中国はとうてい「社会主義国家」にはならない。中国の労働者農民の幸福が、「社会主義国家」の実現以外に考えられないとすれば、資産階級がどんな意見をもつていようと、どんな抵抗を示そうと、かれらの資本はできるだけはやく国家に集中されなければならないのだ。

この社会主義総路線の問題については、党内部の意見は完全に一致していた。ただそれを推進する速度、いわゆる「革命のテンポ」については若干意見の相違があった。しかしそれも朝鮮戦争の勃発でいやおうなしにはやめざるをえなくなつた。

いわゆる「三反」運動がまず一九五一年の暮からはじまった。建国当初中国共産党員は、陝西の山奥から北京や上海にでてきたのであるから、見るもの触れるものすべてが欲しいものばかりだった。ちょうど薩摩の貧乏士族が花のお江戸で役所に奉職したようなもので、この大都会の魅力の前に自慢のすじ金はいつしか鉛に変わった。都会生活を楽しむためには金がいる。かれらには金はない。あるのは権力だけだ。これに目をつけたのが、こういうことにかけては伝統的に抜け目のない資産階級の人びとである。最初は一緒にお茶を飲み、それから料理屋にさそい、そして金一封、それと引き

換えに利権という段どりはいずこもおなじ秋の夕暮だった。

この汚職幹部と資産階級の関係は党の上層部にふかく拡がっていった。事態の容易ならぬことが毛沢東の耳にはいった。一九五一年十二月十二日薄一波(財政部長)はかれの意をうけて肅清の第一声をはなった。

「わが党内に、人民政府内に、人民解放軍のなかに、人民団体のうちに、収賄や官物浪費の現象は相当広汎にひろがっている。あるものは墮落の果て国家の資材を偷む盜賊、人民の経済建設を破壊する売国奴と化しきった。……」

それと同時に官界の肅清運動がはじまった。これが三反運動である。三反とは三つの反対ということ、具体的にいえば「反貪汚」「反浪費」「反官僚主義」の簡略である。しかし汚職というのは収賄した党幹部だけではなく贈賄者も罰せられなければならない。くれる人がなければ貰うものもないわけだ。そこでこんどは資産階級に向かって攻撃の火ぶたが切られた。いつの間にか腐敗幹部を目標とした三反運動が消えてしまい、資産階級攻撃の「五反運動」が正面にせり出した。五反とは三反の上にさらに二つの反対スローガンが加わったものだ。

五反運動は三反運動よりもはるかに大がかりに行なわれた。「五反」の容疑者を摘発するためにおどろべき数の「検査隊」が組織された。そこに動員されたものは日頃その資本家に使われている店員や職工である。かれらは自分のつとめている会社の実情をしらべ、帳簿を検査し、社長をつるしあげ

るのだから、ガラス鉢の金魚を網ですくうようなものだった。そのほかに各居住小組のなかに「居住軍」というものがつくられ、その弄堂コッテにすむ五反容疑者の摘発にあたった。商工業者は一応はみなうたがいの目を向けられたのだ。一九五二年六月二十八日の香港大公報によると、上海の十六万の商工業者のうち九〇%が五反運動でなんらかの処分をうけたという。

とくに罪状の重い資本家は人民裁判と同じような構成の「五反闘争大会」に引き出され、つるしあげられた。おまえはいついつの日に党幹部と一緒にお茶を飲んだことがある。その動機はなにか、目的はなにかと大勢に問いつめられ、答えにつまると罵倒された。あげくのはてに国家財政に損害をあたえたといつて、とても払えないような巨額の罰金を課せられた。共産党がこの運動で集めた現金は総額なんと十七億米ドルと推定されている。罰金のはらえない資本家はどんな目に合わされるかと心配のあまり自殺するものが頻出した。一九五二年上海公安局の発表によるとこの年の二月だけで、自殺者数は八百四十余人に達した。この運動の全期間中には五千人以上の自殺者を出したという。

五反運動は個人資本を国家資本の支配下におくための心理作戦であったのだ。五反運動でショックをうけた資産階級はこの国では資産をもっていることが重荷になることをさとった。それゆえ政府が「公私合営」を提案したときは資本家は「喜んで」それに応じたのである。

周恩来は一九五四年九月二十三日人民代表大会で「国营工業と合作社工業は一年ごとに壮大となり、資本主義工業はひとかたまりとなって公私合営事業に変わってきた。両者のしめる比重は一九四

九年には三七%だったが、一九五四年には七一%前後に増加する見込みである」といつているが、この比重の増大は資産階級にたいする上述のような圧迫があったればこそである。

商工業の国有化と平行して農業合作化がおしすすめられたことは、すでにのべておいたからここではふれない。ともかくこの国の経済の国有化は、社会主義総路線五カ年計画で予定された速度よりもはるかにはやい速度で進行しつつあるかにみえた。

それと同時に国民の思想を社会主義総路線の線に沿うて統一する運動が展開されていた。これは正式には思想改造運動とよばれ、一九四九年九月、政治協商会議で通過した共同綱領第四七条「計画的に青年知識分子と旧知識分子に一步一步革命的な政治教育をほどこす」からはじまっている。

一九四八、九年人民解放軍は国民党の地区を占領することに、その地区の学校に一名ないし二名の軍代表を派遣し学校教育を監督させた。軍代表には校長、教師、学生を指揮し、処罰する権利をあたえられた。これは学生を革命の側につけるための当然の処分ではあったが、かれらと学校、学生側との摩擦が絶えなかったことも事実である。そこで党は大急ぎで党員のなかから「政治教員」を養成して軍代表にかわらせた。この政治教員は学校内に党委員会をつくり、学生集会、学生運動を指導した。かれらの指導によって学生の間には毎日のように集会がもたれた。「思想検討会」「批判会」「小組会議」「経験交流会」「時事座談会」というように学生は学業をおさめるひまもないほど政治運動に動員された。この過程において、まず学生の頭脳が洗脳され、思想が統一された。

党代表はそれに自信をえて一九五二年頃から教授たちの「思想改造」にのり出した。

思想改造は「学習会」の形で行なわれた。学習といっても勉強のことではない。党のあたえた典型的な考え方に合わない自分の考えを一切棄てることである。これを「思想包袱」(スレヤンパオフ) (思想の荷物) を棄てるといっていた。ある個人の思想の荷物——新しい時代にはいらぬ思想——を棄てさせるためには公開批判の形がとられ、かかる集会を学習会とよんだのである。この集会ではまず学習指導主任がきまり、党の学習文献を一同に読ませ、それにつづいて主任の講話がおこなわれる。さて、それからきたいへんだ。主任はその思想を検討するはずの教授を指名し、かれに自己批判を要求する。教授が自分の思想のなかにどんな資産階級の毒素がのこっているかを自分でほりだし、それを洗いざらい告白しなければならぬ。その際かれをとりまく同僚教授および学生たちは、かれの告白がほんとに自分欠点を述べているかどうか、枝葉末節のことだけをのべて根本的な欠点をわざとかくしていないかどうか、その欠点の由来などを討議し、検討する。その問答者は周囲の学生たちから矢つぎばやの質問をうけ、いちいちそれに答えなければならぬ。答えがつまれば罵りやさんぼうがとぶ。いわば思想のつるしあげである。

その空気がいかにきびしいものであるかは、その境地にたつたものでなければ到底わかるまい。有名な経済学者費孝通博士が「われわれの次の世代はまったく幸福だ、すくなくとも学習がないから」といったくらいであるから普通の人の苦しさは想像できよう。



いまここに思想検討をうけた教授の「自我検討書」の実例をお目にかけてよう。

清華大学教務長周培源氏はこう自己批判している。

「私は一九四三年の終わり頃アメリカに行きました。このことは私の履歴のなかでもっとも恥ずべき一頁でありました。ファシズムに反対するために、民主主義国家の科学者をたすけるというのが私の口実でした。しかし実際は、一九四五年のはじめ——ちょうど私がその工作に参加したとき——ソ連軍が東部戦線でおさめた赫々たる勝利によってファシスト・ドイツの潰滅はすでに時間の問題となっていたのであります。したがって当時米国の軍事科学研究工作はすでに進歩性を失っており、アメリカ帝国主義者の悪らつな面をあらわしていたのであります。そしてアメリカ帝国主義は実際にはヒットラーの後塵を拝して新しい戦争の武器を準備しておりました。……

いま私は私自身を控訴します。私、すなわち人民の立場を喪失し、甘んじて帝国主義の殺人罪を補助したこの一科学技術者を控訴します。」

こんな不合理な自己批判があるのか。この教授がアメリカに行った一九四三年には、かれの祖国中国は日本と戦っていた。当時アメリカもまた日本と戦っていた。敵の敵は味方である。事実アメリカの参戦がなければ中国はどうなったかわからなかった。その味方を助けてその軍事科学研究を援助することがなんで恥ずべきことだろうか。それがなんで人民の立場を喪失したことにむすびつくのか。これがここで述べていることは支離滅裂で正常な頭ではとても納得できない。だがこういうように、こ

とさら自分の「ブルジョアの欠点」を告白しなければ思想改造したことにならなかったのだ。

もうひとつここに武漢大学歴史科主任教授呉千塵の自我検討書がある。

「以前の私は自分の人となりに満足しておりました。自分は感情も抑制できるし、ひどくがんこでもなく、軟弱でもなく、礼儀も正しいし、学問もあり、節度もあると内心ひそかに自負しておりました。……」

今回の思想検査の結果、それがまったく個人の私利私欲を掩う外套であり、基本的には自己主義であり利己主義であったことがわかったのです。他人にたいして感情を抑制していたので自己主義、利己主義はあらわれず、自分でもあまり自己主義の方ではないと考えていた次第です。たとえば私は自分の指導に服従しない学生を批判する場合、それをぶしつけにはいわず、婉曲に『この指導に服するかどうかはもちろん君の自由だがね』というようにいいました。それは聴くほうも気持がよく、私も気持が良いと思っただからです。私はこのように人に対したので、人もまたこのように私に対することをぞみました。しかしこれは是非善悪を表現するうえには、はなはだあいまいであります。過去において私は、人に対するにはこのようにするのがもつともよいことだと考えておりましたが、今回の思想検査がはじまってから、一切が虚偽であったことを知りました。」

これもまたなんとという馬鹿ばかしい批判であろうか。人びとにたいし感情をむきだしにせず節度をもつこと、言動が文雅で礼儀正しいことがなんで「私利私欲を掩う外套に過ぎない」のか。これらの

ケースばかりではない。その他多くの自己検討書を読んで感じられることは、告白者がどうしてこんなに卑屈な偽善者の態度をとるかということである。しかしわれわれはこれらの教授を笑う資格はない。あの太平洋戦争のとき、日本人のなかに「この戦争は負けると思う」と在郷軍人会や隣り組のフアナチックな大衆の前でいきれる人間が幾人いたろうか。

日本人にとって幸いなことは中国のように思想検査がなかったので、自分の考えを頭のなかにしまっておけば危険はなかった。しかし中国では思想検査によって思想のすみずみまで検査され、かくしていた異端の考え（いわゆる「ブルジョア毒素」）がほじくり出された。それゆえ正常な考えをもつものが生きのこるためには「偽善者」になりきる覚悟がいるばかりではなく、たくみな「演出力」が必要だったのだ。

このように中国では国民は中国共産党がその機関誌を通じて配給する一定の意見しかもてないことになった。ジードはスターリン治下のロシアでこれと同じような現象をみだして、こういつている。

「ソヴェエトにおいて何事たるを問わず、すべてのことに、一定の意見しかもてないことは断乎として認められている。……毎朝プラウダ紙は、かれらが知り、考え、信ずるにふさわしいことを彼らに教えている。その教えの範囲から出ることは危い！ だから一人のロシア人と話しているも、まるでロシア人全体と話しているような気がする。」

このなかのプラウダを人民日報に、ロシア人を中国人と改めれば、そこに毛沢東の権力メカニズムのなかに封じこまれた中国がうかんでくる。

## 五 高崗事件

一九四九年から五五年までに政治、経済、思想の国家統制工作はほとんど完了した。それにつれて毛沢東のまえには巨大な権力が積みかさねられた。この間だれひとりとしてかれの地位に挑戦するものはいなかった。そこで行なわれた権力闘争はすべて、かれの後継者の地位を争うものだった。したがって闘争の主役は劉少奇、周恩来、高崗などごく少数のものにかぎられていた。かれらはいずれも毛主席を自分の側に獲得し、かれの重味によって相手を制圧しようとした。この闘争はいずれが勝ち、いずれが負けても、毛の地位には影響しない。それはちょうどバスケットボールで多数の手が争ってボールを空たかくつきあげてしまうように、毛沢東を雲居の上たかくおしあげてしまった。これから毛沢東の神格化がはじまった。

最初の権力闘争はいわゆる高崗事件、または高崗饒漱石事件として知られているものである。これは主として劉少奇と高崗との間で行なわれたのだが、結局周恩来が劉に加担することによって、高崗を自殺に追いこんだのだ。

この事件は一九五五年四月日党中央の発表では、「高崗、饒漱石らは党中央委員会、ことに中央委員会政治局に攻撃を加え、毛沢東を先頭とする党中枢部指導をくつがえそうとした」となっている。しかし実際には毛沢東の支配に挑戦したのではなく、ただ党中央と政府の改組だけをねらったようである。公報でも高は「党中央委員会総書記または國務院總理担当をねらった」と発表されている。

毛は高崗を非常に信頼し、かつて全党員に高崗に学べという指令を出したくらいだ。高崗はやがて毛沢東の後継者の地位をねらって劉少奇とはりあうようになった。高崗からみれば、劉は毛とはなれてずっと都会地区で働いていたのだから、自分の方がはるかに毛沢東との距離が近いと思ったのであろう。

高崗、林彪、彭真、鄧子平は抗戦中みな東北にいて、東北局や東北民主連合軍に関係していた。その際高崗は林彪とよく、彭真とはりあっていた。一九四六年五月四平街の戦いするとき林彪の第四野戦軍の第一政治委員は彭真であり、高崗は第三政治委員だった。彭真は攻撃強行を主張し、高崗がそれに反対してしりぞけられた。だが彭真の計画は完全に失敗し解放軍は非常な損害をこうむった。そのため彭は延安によびもどされ、高は第一政委としてかれにかわった。

彭真の背景には劉少奇があった。劉は林彪と戦局の指導について対立したことがある。今回劉少奇の「自我検査」報告のなかにも「一九四六年私は東北の戦局の指導にあやまちをおかし、林彪にたい

する指示が不充分であった」といわれている。高崗事件ののち、林彪がしばらく軍務からはなれたこと、彭真がこんどの文革でひどくいじめられたことは、おそらくこの対立に関係があるのではなからうか。

それにしても高、劉の闘争になぜ毛沢東や周恩来が劉少奇の側についたのであろうか。

周恩来が劉についたのはおそらく陳毅と饒漱石の關係からであろう。陳毅と饒漱石の間にはげしい対立があったことは事実であり、そして陳毅が周恩来側のほとんど唯一といってよい地方実力者であることは周知の事実である。こうして高・饒グループにたいして劉・彭・周・陳の連合軍ができあがったとみることができよう。かれらは毛沢東に高・饒グループはソ連と組んであなたの地位までねらっていますと吹きこんだ。毛沢東がそれにどこまで動かされたかは疑問だが、少なくとも劉・周の連合軍と争ってまで高・饒グループを擁護しようとしなかったことはたしかである。毛沢東は高についてはよく知っているが、饒についてはあまり知らなかった。

饒漱石は江西の南昌生まれで学生時代上海で共産党に入党し、労働組合運動に関係していた。一九二七年の国共分裂後アメリカにのがれ、のちヨーロッパに留学し、一九三五年に帰国している。その後地下活動に従事し、皖南事件で壊滅した新四軍が復活したあと劉少奇にかわってその政治委員になった。陳毅はその軍長だったのだ。饒はそのときに扶植しておいた勢力で終戦後は「華東王」といわれるほどの実力もち、陳毅との間に自然に対立が生まれるようになった。とくに一九五三年かれ

が中国共産党中央組織部々長に任命され、一千万の中共黨員の配置轉換を支配するようになってからは両者の対立はすでに人びとのうわさののぼっていた。

最近香港の明報月刊(三月号)に高・饒事件について、その当時陳毅が上海の有力者をあつめて報告した演説というのがのっている。それは内容からみて、にせものとは考えられない。この文献はこれまで疑惑につつまれていたこの事件の真相にはじめて光りをあてた重要なものである。全文はながすぎるから、その要点だけでも訳してみよう。

「わが党中央委員会総会がこのたび高・饒反党同盟を摘発したことは、ひとつの重大な勝利であります。みなさんは共産黨員を完全無欠な神のような人間と考へてはいけません。階級社会のなかでは黨員はだれでもかならずマルクス・レーニン主義の薫陶と改造をうけなければならないのであります。黨員の地位がどんなに高くとも時々刻々思想闘争を行なうことが要請されております。鏡の上にはこりがたまってだんだんあつくなれば最後には鏡そのものも変質するものです。

今日お話しする高崗と饒漱石はその典型的な実例であります。高崗も饒漱石もご承知のように非常に有名な人物です。みなさんのなかには『こんな地位のたかい老共産黨員がどうして党に反対するのか、とても考えられない』とお思いになるかたもおありでしょう。ところがこれはちっともおかしいことではないです。共産党内にこういうことがおこらない方が不思議なくらいです。こういう反党事件はこれからおこりましょう。私も共産黨員であり、地位も低くはありません。しかし私がかもし

自分を改造することができなければ、いつか新聞紙上で『陳毅はもう党籍から除名された』という記事をみなさんがご覧になる日がくるかもしれません。

高崗と饒漱石はこれまでわが党に貢献してきました。これは黨員として当然なことで、なにも自分から吹聴するにあたらないうことです。ところが自分でおれこそ一番の功労者だと考えるようになる、そこであやまりをおかします。そのあやまりを自分で認めなかったために結局かれは今日にいたったのであります。

高崗の第一の大罪は『軍を以て党を制する』方針を堅持したことです。高崗の出身は旧軍閥といえます。私たちが長征から延安についたとき、かれは劉子丹の部隊を擁して党中央ととりひきしようとしてきました。かれの部隊は党中央の指揮では動かず、かならず高崗の同意をえてはじめて行動をとりました。かれの軍隊は解放軍ではなく高一家の軍隊でした。一九四六年延安防衛戦で党中央と毛主席があぶなかったとき、党中央が高の部隊を動員しようとしたが、そのときもまず東北にいる高崗の同意をえてはじめてそうすることでできたのです。もしも高崗のやり方が一般化したら中国はどういうことになりましたでしょうか。たとえば東北軍区は高崗のもの、第三野戦軍は陳毅のもの、第二野戦軍は劉伯承のものというようになれば、中国は再び北洋軍閥時代の群雄割拠を再現することになります。高崗の第二の大罪は『党を分裂する』ことです。われわれ黨員はみな毛主席を尊敬し、かれに服従しております。しかし高崗はいつも『おれはロシアに留学した共産黨員だ』とか『われわれは、



洋共（西洋教育をうけた共產党）であるが、毛沢東たち井崗山組は土共（田舎ものの共產党）だ』とかい  
い、主席を『田舎もの』（土包子）だとあざけておりました。これは党員を『洋共』と『土共』に  
わけて闘争させるものです。高崗はいつもはこういって毛主席を馬鹿にしておりました。『あの土共が  
二万五千里の長征から陝北にいたときは骨と皮ばかりで、着たものもぼろぼろで一口にいえば乞食  
のようなものだった。この高崗がかれらを置いてやらなければ、かれらはずっと前に餓死してしまっ  
ていたろう』かれは毛主席以下われわれが今日あるのはすべて自分のおかげだといっております。

高崗の第三の大罪は『東北を特殊化して党中央の指導権を奪おうとした』ことであります。高崗に  
はいろいろ欠点がありますが、経済についてはたしかに手腕をもっておりました。そこで私たちは東  
北をかれにあずけたのです。東北は中国の重工業の中心地で、その建設はもちろん国家のためで、高  
崗個人に属すべきものではありません。ところが高崗は党中央の同意を得ないうちに、ソ連と臨時協  
定をむすび、ソ連の専門家を雇い入れ、ソ連に留学生をおくっていました。またソ連から機械を買い  
入れ、その対価として東北の大豆を直接ソ連に輸出していたのです。そういう貿易について党中央は  
なにも報告をうけていなかったのです。

高崗の第四の罪は『大衆から離脱した』ことです。高崗には『四大天王』といわれる四人の側近が  
ついており、他の幹部や大衆は直接『高主席』に会うことはできませんでした。高主席が大衆に訓話  
するときには、四大天王が事前に民衆の間で工作し、かれらを教育しておき、どういう態度をとるか

をきめておきました。そこで行なわれたすべてはただ彼を主役とする演出だったのです。こうして高崗は大衆との密接な連絡を重視する党の伝統を破壊してしまいました。

高崗の第五の罪は『道徳的墮落』であります。高崗は背がたく笑えば損するともいうような厳然たる風貌をもっておりますが、その内側にはきわめて汚ない心をかくしていたのであります。高崗に接近する婦人幹部はみな若くて美人ぞろいでした。美人で周りをとりまけば『高主席の工作能率』が増すともいうのでしよう。彼女らはみな高崗にせまられて、かれのものになっていたのです。摘発によりますと高崗と不正常な関係をむすんだ婦人幹部は二十余名に達し、そのなかには有夫の婦人もおりました。これがいったい共産党員のありかたでしようか。党の高級幹部がこんなことでは人民がわれわれをどういう目でみるでしようか。かれの罪はまったくゆるしがたいものであります。

高崗の罪行はまだまだたくさんあります。以上はそのなかの比較的重大なものをいくつかあげただけであります。……」

高崗がほんとに、陳毅がここでのべているような人物だったならば、そのかれを黨員の模範として、全党員は高崗同志に学べといった毛沢東にも重大な責任があるう。ほんとには高崗が陳毅の指摘しているような人物でなかったからこそ、毛はかれを処置することに同意したのではなからうか。

ここにのべられていることを読んでいくと、高崗はなかなか気骨のある人物で、他の黨員とはちがって毛沢東を盲目的に崇拜しているふりをしなかったようだ。かれは毛沢東も自分と同じ人間であり、

自分よりもすぐれたところもあるが自分の方がすぐれた点もあると考えていた。それに彼には、毛沢東がこまっていた時に助けてやったという気持があったので、最近の毛がかれを臣下のようにあつかったり、老黨員たちが共産党の「同志」であるはずの毛を君主のようにとりあつかうのを見るのは我慢がならなかったのだ。だからこそかれは自分の周囲のものに毛を軽視しているかのような言動をあえて示したのではあるまいか。

毛にかぎらず、絶対権力者はこういうことには非常に敏感である。自分の権威に挑戦するものはどんな小さなことでも重大視する。かれが高についてこういう報告をうけたとすれば、そのまま放っておけなかったことは十分考えられる。毛沢東はどんな形でも、自分の権力メカニズムにひびのはいるようなことは絶対にゆるさない。こうして高崗は「自殺」という名で粛正されてしまった。

白楽天には人口に膾炙した「太行の路」という長詩があるが、その文句はこういう数行で終わっている

君見ずや左納言右内史

朝に恩を承け

暮に死を賜う

行路難

水に在らず

山に在らず

ただ人情反覆の間にあり

高崗の生涯はまさに革命家の行路難を示すものであろう。

## 六 百家争鳴

高崗事件以後、劉少奇は党組織を、周恩来は國務院を、というように、二人の間で平等に権力を分かちあった。両者のあいだに妥協ができたことは色々な面にあらわれている。一九五五年以降、毛沢東が農業合作化の速度をやめようとしたのにたいして、劉少奇はかなりつよく反対した。この年、鄧子恢は劉の支持によって、合作社を二十万にへらす計画をたてた。毛沢東の農業十二年計画草案も党中央委員会では通過しなかった。

しかし高崗事件がおわった翌年、すなわち一九五六年には、劉少奇と周恩来の間に毛の後継者をねらう暗闘がすでにはじまっていたようだ。この頃までに中国の農業合作化と社会主義改造はだいたい完了していたので、毛沢東は「思想改造」運動でおさえつけてきた知識階級の気持をやわらげ、五年計画にかれらの協力をかちとろうとした。

毛沢東にこれをすすめたのは周恩来だった。五六年の一月十四日党中央委員会は「知識分子問題について」の会議を召集したが、この席上主として発言したのは毛沢東と周恩来で、劉少奇はついにひとことも発言しなかった。周はこのとき知識分子の重要性を強調して、「知識分子はすでに各方面における国家活動の重要要素となった。……その大部分は国家公務員となり、プロレタリア階級の一部分となっている」といい、いまこそかれらを大量に入党させるべきだといった。

もちろんこうした動きの背景には、ソ連の雪どけやハンガリー事件の影響があつたのだ。

一九五六年二月のソ連共産党第二〇回大会において、二月十六日ミコヤンのスターリン批判演説が行なわれた。こえて二十四日の秘密会議でフルシチョフが徹底的にスターリンを批判した。最近において国際共産主義運動にこれほど大きな波瀾を投げた事件はない。これで一番こまった立場におかれたのは毛沢東だった。かれはその権力メカニズムの建設においてまったくスターリンのやり方を学んできたのである。そのスターリンの権威がいまその本国ソ連で打倒されるとなると、それがやがて自分の権威をゆるがすことは明らかだ。そこで中国共産党中央は国内ではミコヤンの演説を二月二十二日までいっさい報道せず、同日夜にいたってはじめて発表した。その後中央政治局で慎重に審議し四月五日はじめて「プロレタリア階級独裁の歴史的経験について」という論文を発表し、スターリン批判にたいする中共の立場を明らかにした。この論文はソ連の党が「スターリンの晩年の非行」を激しく非難した諸点を「なんびともさけられない誤謬」として取り扱い、これを単に「教訓」として重視

する立場をとった。そしてスターリンの多くの著述については一概にこれを否定せず「マルクス主義的方法でこれまでどおり真面目に研究」すべきことを主張した。実はこのとき、すでに中ソ関係は前途のただならぬことを思わせたのだ。

スターリン批判は、これまでソ連におさえつけられていた東ヨーロッパ諸国民を動揺させた。その年の六月にはポーランド暴動がおこり、十月にはハンガリー事件という激動がおこった。毛沢東はソ連のスターリン批判をうけいれなかったものの、こういう情勢をみて、プロレタリアートの独裁をあまりにつよくうち出すと、とんでもないことになるかと考えるようになった。これらがかれをして「百家争鳴」という思いきった政策をとらせた背景だった。

しかしこのとき、政治問題には天才的に敏感な毛沢東も見おとしていた重大な事実がある。かれは、かれとかれの党が建国以来とってきた政策が着々と成功していること、たとえその過程において国民のある層に多少の不快感をあたえたとしても、国民全体としてはかれの政策をよるこんでくれていると信じて疑わなかったのだ。これは毛沢東の樂觀主義も手つだっていたであろうが、それよりもかれの周囲のものが国民の真実の感情をかれに告げることをはばかっていたにちがいない。

この年の中頃からはじまった「百花斉放」政策というのは「百花斉放、百家争鳴」という言葉からでもわかる。百花が色とりどりに開くように、民衆に自由に意見をはかせれば、そこに正しい政治が生まれるというのである。この運動の主要な対象となっている知識階級の多くは、周恩来の主管とな

っている政治協商會議の民主団体に属していたので、知識階級の意見が重要視されるようになれば、それにつれて周の権力も増加するわけである。事実「百花斉放」がはじまるとともに、周の声望は非常にたかまってきた。

しかし思想改造でひどくいためつけられた知識階級はなかなか口をひらかなかった。かれらはほんとのことをいって、あとでせめられることになるのではないかとおそれていたのだ。毛沢東はそこで五年二月二十七日の最高國務會議で、知識階級にこうよびかけた。「知って言わざるなく、言って尽さないことはなく、言うものに罪なく、聞くものは戒めとするに足る」知識階級は次第に大胆になり四月末からようやく意見を出すようになった。ひとたび発言がはじまると心底に鬱積していた共産党にたいする不満が一時にせきをきったようにほとばしり、五月から六月にかけてはまさに反共言論の「百花斉放」となってしまった。

政協會議の知識階級の背後に周恩来がいて劉少奇の主持する党の横暴を攻撃させたともいわれているが、知識階級は周のけしかけや支持がなくても、自分たちだけで充分そうする理由をもっていた。そこにまきおこされた反共言論の渦中では劉と周の勢力あらそいなどは小さなことだった。これを機に爆発した民衆の党にたいする不満は毛の権力メカニズムそのものをゆるがしはじめた。中国の民衆が、中国共産党のこれまでのやりかた、にどういふ感情をもっていたかを示すために、かれらの代表的な声を一、二ここにあげてみよう。

光明日報編集長儲安平（人民日報、五七年六月二日）

「毛主席と周首相に若干意見を申し上げたい。過去数年、党と大衆の関係は決してよくない。私の見解ではこのカギは『党の天下』という考え方にある。……一つの部課、一つの組に至るまで、あらゆる組織の長に党員がおり、事の大小にかかわらず、党員がうなずいてはじめて着手できるというのはあまりにゆき過ぎではあるまいか。この数年多くの党員の才能とかれらの職務とはつり合っていない。かれらは仕事がいまいか、国家に損害を与えているだけでなく、大衆を心服させないために党と大衆との間を緊張させている。この責任は一部の党員にあるのではなく、四角なクイをまるい穴に入れていた党にある。党がこんなことをするのは『王土にあらざるはなし』（天下はすべて党のもの）という考え方をもち、その結果現在の一党天下という様相をつくり出したためではないだろうか。」

中国人民大学講師葛佩琦（人民日報、一九五七年五月三十一日）

「私の見るところ今日党と大衆の間には解放前に比べて十万八千里の隔りがある。学校においてもそうだし、一般大衆においてもそうである。一般大衆は豆粕でつくったいまの豆腐を『日本混合麵』と呼んでいる。……豚肉も品不足で一般大衆の口へはまったく入らない。人民の生活はよくなったと言うものがあるが、生活水準が上ったのはいったいだれか。これまでぼろ靴をはいていたのに、いまでは乗用車にのり、ラシヤの制服を着こんでいる党員と幹部だけである。ほんとうのところ、物資の供給が不足するのは党の政策を執行する連中のあやまりによるものだ。たとえば豚肉はどこへいった



か。決して一般大衆が食べてしまったのではない。糧食の統一買付や統一販売のくるいから、百姓が豚を飼おうとしなくなったためである。一九四九年共産党が都市に入ったとき、一般大衆は手に手に食べものや飲みものをもって王師を迎えるように歓迎したものである。しかし今日では一般大衆は共産党に対し『鬼神を敬してこれを遠ざける』という態度をとっている。……へたをすると大衆はきみたちを打倒し、党人を殺し、政府をひっくりかえすこともありうる。これを愛国でないとは言わせない。なぜなら共産党員が人民に奉仕しないからだ。共産党員は亡んでも中国は亡びない。なぜなら、共産党の指導がなくても、人民が国を売るようなことはありえないからである。」

このような党批判が毎日くりかえされるのを、劉少奇はただまっぴがいはなかった。まず労働組合がさわぎだし、「百花斉放」の停止を要求した。これまで国民が心から自分の支配をよろこんでいるとばかり思っていた毛沢東は、この事態にすっかりおどろかされた。そしてかれとまた劉少奇の側についた。かれ自身はじめた「百花斉放」を打ちきったのである。

七月一日の人民日報社説はこういつている。「五月八日から六月七日まで、人民日報とすべての党機関紙は、中共中央委員会の指示に基づいて、正しい意見をあまり多く掲載せず、誤った意見（反共意見）にも批判を加えなかった。これは毒草をしばらくの間自由にはびこらせ、世の中にはこのような意見もあることを充分知らせ、結局これを排除するためであった。」これでは「言者無罪」と言った毛沢東の言葉ははじめから、そだったということになる。そんなことはない。毛沢東ははじめほん

とに人民になんでも言わせるつもりだったが、いったん発言がゆるされると、事態は思わぬ方向に発展し、このままでは放っておくわけにはいかなくなってしまったのだ。

それにつづいてはじまったのが「反右派」闘争である。儲安平、葛佩琦をはじめ、毛沢東のすすめによって、かれにほんとの国民感情をつたえたものはすべてを右派として排撃された。共産党と民主党の人民政協会議のなかで、非党員の重要人物はすべて退けられた。この機構は頭がカラになってまったく活動力を失い、この方面の統一戦線を牛耳っていた周恩来は羽をもがれてしまった。

周の國務院の機構は縮小され、権力の一部は地方へ移された。これに反し、劉の党中央直属の部会はかえって拡大された。五七年十一月から五八年十月に各省市党機構の大粛清が行なわれたが、粛清されたのは省長、副省長など政務系統のものが大部分だった。そのなかの浙江省長沙文漢、副省長楊思一の罪状は「わが国の人民制度を軽んじ、政権工作に対する党の指導に反対した」となっている。（人民日報、一九五七年十二月二十七日）また広西省副省長陳再励は「党内には民主主義がなく、書記一人が天をさえぎっている」といった言葉がとがめられたのだ。

こうして劉少奇と周恩来の間の権力闘争は、一応は劉少奇の勝利におわった。それゆえ翌一九五八年から大躍進時代にはいったのだが、それには周恩来は主役はつとめてはいない。「百花齊放」のながい経験から、知識階級はこの計画がみすみす実行できないものとわかって、だれひとり献言しなうとしなかった。

大躍進政策は、毛沢東と劉少奇の二人を主役として行なわれた。イニシアティブをとったものは毛沢東であり、実行の最高責任者は劉少奇だった。しかしもともと毛沢東のロマンティズムからはじまり、計画性と科学性を欠いていたこの政策は、着手して半年もたないうちに、毛の意図した本来の形では実行不可能なことがわかった。このときから毛と劉の間がおかしくなりだした。毛沢東の影が日一日とうすくなっていったのはそれ以後である。

第六章 文化大革命

## 一 中国のネツプ時代

大躍進と人民公社の失敗は一九五九年の末にはもう餓死者があらわれるところまできた。農民は生産意欲を失い、食糧生産はいつこうにあがらなかつた。配給量は食糧事情のよいところで、大人が一月二十五斤（一斤は半キロであるから一二キロ半）で、そのうち米麦は四〇％、あとは高粱や馬鈴薯等の雑糧だった。肉は上海でさえ一カ月四分の一キロ、しかしこれは都会地で、農村にいくともっとひどくなり、農民は甘薯のつるや雑草の根なども食べていた。国民の間には深刻な悲観的気分がながれ、軍隊のなかでは一部に叛乱さえおこった。この食糧不足を公式にみとめたものは一九六一年イギリスのモントゴメリー元帥が中国を訪問したとき、毛沢東が元帥にかたつた次の言葉である。

「中国の穀物の収穫量は平年作で一億八千万トンである。一九六〇年は一億五千万トンだった。六

一年には一億六千万トンの生産が見込まれている。この三年間に貯蔵食糧を使い果たしたので、いま新しくたくわえなければならなくなっている。」

このとき劉少奇や鄧小平らが一番こまったことは、これほど失敗の明らかになった政策を、なお成功しているかのように言わなければならなかったことだ。大躍進、人民公社の失敗は毛沢東の権威の失墜にむすびつく。国民が中国共産党をうらんでいるときに、毛沢東が権威をおとすことは、自ら共産党の支柱をとりはずすようなものだ。そこでかれらは現在の政策を根本的に改めることを決意したが、それには古い家の柱を一本ずつ新しいものに取りかえてゆくような方法をとらなければならぬと考えた。つまり外から見れば以前と同じ古い家のように見えるが、いつの間にか中身は新しいものに変っているというようにしたのだ。

いまこの工作を一、二実例をもって示そう。

毛沢東思想でいちばんの問題点は、一切の私心を絶滅して、国民は「公」すなわち社会に奉仕しなければならぬということである。これは社会道徳の理想であって実際には一切の私心を絶滅できる人はほとんどない。それにもかかわらず大躍進のときには政治指導第一主義（「政治掛帥」）でそれが可能であると考えた。つまり労働者・農民は政治教育によってどんな報酬にも文句をいわず、ひたすら社会主義建設のために働く共産主義的性格に変じうると考えたのだ。ところが労働者・農民はそれでは働かなかった。そこで実際には「労働の分量に応じて報酬を払う」賃銀法則を採用した。しかしそ

うすることは明らかに政治指導第一主義を否定することだ。それは毛沢東思想に抵触する。そこでこの政策に切りかえるときには、政治指導第一主義と物質的刺激主義とは矛盾しないという、不思議な論理があみだされた。一九六一年一月十九日の人民日報にのっている江渭清の論文「毛沢東思想を学習し、充分自覚的能動性を発揚せよ」をみると、その関係がよくわかる。

「政治指導第一主義を堅持することと人民大衆に物質的利益の関心をもたせることとは一致している。われわれはいつも政治が第一位であり、物質的奨励は第二位だと考えている。われわれはつねに人民大衆のなかで社会主義、共産主義教育を進め、共産主義的風格を発揚し、共産主義的労働態度を提唱しなければならぬ。同時にわれわれは社会主義段階の分配制度として『労働に応じて分配すること』を主とする原則を堅持しなければならぬ。そして人民大衆の社会主義、共産主義の自覚が不斷に高まるにつれ、また社会の生産品が不斷に潤沢になるにつれて、分配における共産主義的要素を不斷に増加していかなければならぬ。」

この論文はいかにももつとらしいことをいっているが、よくみると大きなごまかしをやっている。はじめの一段では、政治指導が第一で物質的刺激主義が第二だといっているかと思うと、すぐそのあとの段では、社会主義段階の分配では「労働に応じて分配すること」を主とせよといっている。重点は明らかにあとの一段だ。中国は現在社会主義段階であるから、物質的刺激主義を主とすべきだということになる。これは明らかにフルシチョフ主義であり、毛沢東思想の否定である。

もうひとつの実例は、「工場規則制度」の採用についてである。工場があれば従業員規則があるのは当然だという人もあろう。だが現在の「文化大革命」ではこれが大きな問題となっている。現在紅衛兵たちは工場の規約は「官僚主義」の温床だと批判している。

大躍進のときには、工場長や技師など専門家の発言権はほとんどなかった。工場に無理な生産命令がだされたとき、もしも工場長や技師などがその工場の設備や技術水準ではそれはできないなどと口をはさめば大へんなことになった。かれらはたちまち、政治指導第一主義を拒否する経済法則第一主義者として批判された。中国語では前者は「政治掛帥フエンチンクワスエイ」、後者は「経済掛帥チンチンクワスエイ」といわれる。そして「経済掛帥チンチンクワスエイ」は党の主張する「政治掛帥」に対立するものであり、「右傾派」の考え方だとされた。毛沢東思想では主観が客観を変えることを強調しているから、客観条件がわるいのでできませんなどはいえないのだ。それゆえ工場長や技師たち管理職は工場内の党代表の生産指導にほとんど口をささしはさむことができなくなり、たいいていの工場は党代表と労働組合員だけで動かされていた。その結果使えない製品がでたり、工程のながれが悪く操業停止部門がでたりした。

劉少奇の党中央はこの弊害を改めるために、再び工場規則を嚴重にし、工場長、班長、職工とそれぞれ責任分担を明確にし、嚴重な工場規則のもとに生産を管理させようとした。一九六一年「紅旗」第二十期の許辛学の論文は工場規則の意義をつぎのように強調している。

「ある人びとは責任制と工場規則は大衆の積極性と創造性の發揮と相容れない、そんなものをつく



れば大衆の積極性と創造性を発動することはできないと考えている。だが、それは明らかにまちがいだ。合理的責任制その他の工場規則は職工大衆の多年の生産経験の結論であり、客観法則の要求を反映したものだ。」(許辛学「さらに一步を進めて工業企業の責任制を健全にせよ」)

大躍進のときに、各工場の規則を無視し、労働者を直接指揮して生産命令を実行させようとしたのは各工場の党代表ではないか。そしてその最高責任者は毛沢東だった。ところが許辛学はこのあとでこうつけ加えている。「党中央および毛沢東同志は企業における責任制の樹立と健全化について、これまで多くの重要な指示をあたえてきた。」つまり毛沢東の責任がはずされたばかりでなく、かれはこのような弊害にたいしてずっと前から警告していた先覚者だというのである。こうして一切は毛沢東の注意を無視して勝手なことをやった下級黨員の責任に帰せられてしまった。

劉・鄧派はこのように毛沢東の名誉をまもることに気をつかいながら、徐々に経済政策を人間の経済本能を基礎とするものにしたてなおしていった。まず人民公社は事実上解体し、生産小隊(農家三、四十戸)が中心となって、その村の範囲内で生産計画をたてるようになった。しかも耕地の共同管理では生産があらならないというので、耕地を各戸にわりあて、それぞれその区画の生産と管理に責任をもたせる「包産到戸」(生産を一括して一戸の農家にゆだねる)という制度が採用されたところもでてきた。同じ村に住んでいる農民がその土地土地の地味、状況などを考慮しながら生産計画をたてるようになった。こうなると党はいままでのように命令によって生産小隊を動かすことができない。そこで「三

包一獎制」というものが採用された。これは生産小隊がこれこれの生産を、これこれの費用、これこれの労力で完成しますと約束し、約束通りそれを実現した場合、または約束以上に超過実現した場合には一定の率で奨励金がもらえる制度である。実際にはその超過生産分を分配するケースが多い。そのかわり実現できなかった場合には、生産小隊は政府にたいし罰金を、損害を負担するという形で払わなければならない。したがって農村ではマルクス主義の思想水準はたかいが、農業技術はちつとも知らない党幹部の発言権が縮小され、反対に、年をとった篤農の発言権がよくなってきた。つまり「紅」(思想)よりも「專」(専門知識)が重んじられてきた。

工業界では農村の「三包一獎制」に相当する「独立採算制」が採用された。ある企業が国家から命ぜられた生産を完成した場合、またはそれ以上に超過生産を行なって、超過利益をあげた場合には、一定の比率で従業員にボーナスがでる。とくに超過利益のある一定の部分はその企業内で特別にボーナス(分紅<sup>フエンホン</sup>)として従業員間に分配することができた。そのうえ国家からあたえられた生産目標は生産高ではなく、利潤目標に変ってきた。こうなると経営、技術のエキスパートの力のみせどころである。よい経営者は生産量が少なくても生産コストをひきさげ、よく売れる品物をつくるから利潤は大きい。こうなると毛沢東思想だけで経営学を知らない幹部では企業の指導はむずかしくなってきた。やはりここでも専門教育を受けたマネージャー、技師などの知識階級の発言権が増大してきた。ソ連ではこういう階級を「テクノクラット」といい、テクノクラットが経済界ばかりでなく政治にも進出

しているが、中国でも、この階級が抬頭するきざしが見えた。一九六一年一月の九中全会は、企業の経営には党代表はタッチするなという決議を行なった。これはあきらかにこの事態を公式に承認したものである。いうなれば中国でもソ連のリーベルマン方式がみとめられたことになる。そんなわけでカリフォルニア大学のフランツ・シアーマン博士などは、中国は一九六一年頃から「ネップ」時代にはいったといっている。

中国ではこの「ネップ」政策が当面の食糧饑饉から中国を救った功績は大きい。中国は「自力更生」という言葉通り、アメリカその他からの援助のなかったのはいうまでもなく、ソ連からも援助をうけなかった。中国はそれにもかかわらず食糧問題を一応解決し、ソ連から借りたこれまでの借金まで返してしまったのだからおどろきである。毛沢東とその周辺は、これこそ人民公社制のあったおかげだと宣伝したが、それをそのまま信じたのは一部の人間で、中国人の大半は血のにじむような経験から、毛沢東方式の人民公社が崩壊したからこそ、中国の農業は救われたのだと信じている。この過程において知識階級が劉少奇の党中央を支持するようになってきたことは否定できない。

中国ではこれまでマルクス思想が第一で、専門知識は第二というのが常識となっていた。学校教育でも「紅」(あかい思想)は「專」(専門知識)に優先する方針がとられ、大学では学長よりも党代表の権限がよかつたのである。この「紅專問題」(思想か専門技術か)で陳毅が「専すなわち紅なり」と演説したのもこの頃である。

このとき党中央を事実上支配していた劉少奇は得意の絶頂だった。これに反し毛沢東は権力を持ちながら失意のどん底にあったようだ。ここで一応当時の党中央を構成するメンバーの顔ぶれを紹介しておこう。

八中全会では政治局に常務委員会をおいたが、その顔ぶれは毛沢東、劉少奇、朱徳、周恩来、陳雲、林彪、鄧小平の七名だった。この七名は常時合して党の政策を討議し、決定した。中央委員会全体会議は減多に開かれないし、開かれても形式的なものにおわったので、中国の政策はたいいていの七人によって決定された。しかしかれらはそれぞれに主管任務をもっており、政策の立案などはとてもできなかったから、その下に有能な参謀部または幕僚部をおかなければならなかった。それが中央書記処なのである。八中全会以後、この中央書記処は実際の政策立案やその命令の執行機関として大きな役割りをはたすようになった。鄧小平がその主任だった。

一九六二年の十中全会で決定した中央書記処のメンバーの顔ぶれと順位はこうなっている。

鄧小平（総書記）、彭真、李富春、李先念、譚震林、王稼祥、李雪峰、陸定一（新）、羅瑞卿（新）、康生（新）、候補書記 劉潤濤、胡喬木。

こうならべてみると、このなかに、こんど紅衛兵からひどい批判をうけたものが八名もいることがわかる。

総書記鄧小平は七中全会のときは中共中央中央員会秘書長だった。中央秘書長は事実上毛沢東の幕僚長

である。その後秘書長の職が廃止され、かれは書記処総書記として前と同じ性格の任務についた。総書記は、書記処全体の意見を総括して毛沢東に報告する立場にある。そのかれが一九五九年以来毛沢東に一回も報告にきたことがないというのであるから、毛沢東もずいぶん腹にすえかねていたにちがいない。鄧とすれば国家主席の劉少奇に報告しているからよいと思っていたのかもしれない。あるいはまた毛に会って相もかわらぬ「破私立公」の精神論をきかされて、心にもない「あいづち」を打たなければならぬと思うと、会う気になれなかったのかもしれない。しかしこれは鄧と劉とのむすびつきから考えれば、毛沢東に妙な邪推をおこさせるのに充分だった。毛はいっしか劉までが自分をないがしろにしていると信じこむようになってしまった。

劉少奇としては、国民の間になお声望がたかく、しかも軍人をしっかりとぎっている毛沢東をどうしようという考えは毛頭なかった。それどころか、毛は中国共産党の威厳のためにもなくてはならぬ人物だと思っていたが、同時にまたかれの精神主義では、もはや中国経済の現在の発展にはついていけないと思っていたのもたしかである。

中国の新しい発展には、新しい共産党が必要なのだ。毛沢東はこれまで、党が正規の手続きをへて決定した事項でも、自分の意見と合わないものは自分が勝手にえらんだ手続きで、勝手に改変してしまった。中国共産党はいつまでもこういう独裁を許しておくことはできない。中国はいまではすでに党支配のメカニズムが完成し、安定した建設時代にはいつている。毛沢東はこの国にはまだブルジョ

ア、地主階級がのこっているから、「階級闘争」が必要だ、あらしのような大衆運動も必要だという。だがブルジョア階級はすでにわれわれの統制下にある。かれらはもはや復活する余力はない。この時代の「階級闘争」はたとえその必要があったとしても、「三反五反」「大躍進」のような大衆運動をくりかえす必要はない。そのために共産党があるのだから、共産党がこの任務に耐えるためには党の体質を改善し、ほんとうのプロレタリア政党に脱皮する必要がある。それにはまず党内民主主義と党の規律をまもる精神を喚起しなければならない。

劉少奇のこうした考えは、実際はかれよりも、かれのつぎの時代を担当するグループの間につよかったのだ。かれらもさすがに毛沢東を直接には攻撃しなかった。それは党の規則を無視し、ただ毛沢東のタクトにおどるような黨員に徹底的攻撃を加えるという形で行なわれた。党の第八回全国代表大会で鄧小平が行なった演説は、この見地から見ると非常に面白い。

「少なからぬ黨員は組織の上では入党しているが、思想の上では入党していない。いや完全に入党していないのだ。かれらは共産黨員になりたいと願っているが、いまだに真の共産主義者ではない。いな完全にそれになりきっていないのだ。かれらは無産階級の先鋒隊のなかに身をおきながら、イデオロギーの上では非無産階級の成分をかなり濃厚にもっている。かれらは党章を学習し、なかには党章の箇条を暗誦するものさえいる。しかしかれらがその社会的関係からもってきた非無産階級イデオロギーのきたない根性は、共産黨員の党性のようにには党章の精神と融和しない。それゆえ党章に違反す

る各種各様の事件をしでかすことはやむをえない。」

この演説をきいた毛沢東はさぞ耳がいたかったことであろう。

一九六〇年から六一年にかけて「党内民主主義」喚起の声はいっそうはげしくなった。そのうちのひとつはこういつている。

「若干の同志は自覚的に大衆の監督をうけることの重要性を了解せず、あるものは自分こそ指導者であり、大衆よりもえらいものであるから、その監督をうけないでもよいと考えている。」（人民日報、六〇年九月九日付「自覚的に大衆の監督を接受せよ」）

こうして党の中・下級幹部がそれぞれの管轄区域内で「小独裁者」であった時代は次第にくずれていった。かれらの小独裁は毛沢東の大独裁をつくりあげる基礎であったが、いまやその基礎がくずれさったのである。

しかし毛沢東はこういう発展をだまってみていられるであろうか。

その頃毛沢東は政治からはなれ、健康にも自信を失っていた。しかしこういう発展をだまってみていられる彼ではない。かれの心境はおそらくこんなところだったろう。

## 行路難

## 行路難

岐路多し

今安やすくにか在ある

長風浪を破やぶる会かたず時あり

直ちに雲帆を挂かけて滄海を濟わたらん（李白）

## 二 文化大革命

その頃毛沢東は自分でももう神に召されても不服はいえない年だと思っていた。ふとりすぎて心臓が弱く、ちょっと早く歩いてもいきがきれた。だがいま、ひとたびかれが育てあげた中国共産党の現状を思うと、このままでは死ぬに死なれぬ気持だった。

「現状のままならば中国共産党は、フルシチョフのソ連共産党とすこしもかわらないブルジョア政党になってしまう。ことによるとファシスト党にさえ墮落しかねない。」 事実一九六三年頃、かれは実際にそれを口にしていた。

何度か煮え湯をのまされ、歯ぎしりをさせられたが、スターリンのもっていた権勢は、若いころから彼のあこがれの的だった。かれにはスターリンの名は、人類の歴史のつづくかぎり不滅の栄光にか



がやくものだと思われた。その栄光の人が、死後数年にして、かれの走り使いにすぎない、フルシチヨフによって辱しめられ、その墓さえ、いつのまにかクレムリンからどこかほかのところへうつされてしまったのだ。自分の死後がしきりに頭にうかぶ毛沢東にとって、それはかなりのショックだった。

かれにとって死は、不滅への脱出でなければならなかった。たとえ肉体はほろびても、国民の心のなかにあるかれの記憶まで、消えさってしまうような死は、これまで不滅の太陽になぞらえられることに慣れていたかれには、考えるさえそれおそろしいことだった。だがそれはけっして杞憂ではない。すでにその危険は現実のなかにみえていた。スターリンは死ぬまで政権をばなさなかったが、かれはすでに政府主席の地位を劉少奇にゆずってしまった。それ以来のかれは、祭壇に祭りあげられた生きた偶像であった。かれには党主席の名はありながら、党総書記の鄧小平などは五九年以来八年間というものなにとつ相談しようとしなかった。もちろん党務の報告にさえこなかったのだ。

自分が公式後継者に任命した劉少奇は、こと経済に関するかぎり結構うまく国政をきりまわし、自分分なくしても、充分やってゆける能力を示しているし、一九五九年以来四カ年間の食糧饑饉も、六三年で一応解消した。国民もまたかれの経済政策に、すっかり満足しきっているようだった。国民は、毛沢東がアメリカ帝国主義の侵略の危険をどんなに宣伝しても、それはただ、自分たちをひきし

め生産に努力せよということだとうけとっていた。これではフルシチョフの修正主義とまるで同じではないか、とかれは深刻にかんがえた。

いったい自分が全世界にむかって宣言した「世界革命」の方はどうなったのか。アメリカ帝国主義の打倒はどうなったのか。ソ連のスターリン後継者が、すでにレーニンの教えにそむいて、資本主義の走狗になりさがった今日、中国がこんなことで、だれがいったい、レーニン主義にかけて誓った「世界革命」の大任務を担当するのか。

そればかりではない。こんなことでは、経済主義に墮落したソ連のフルシチョフどもがスターリンの墓をあばいたように、中国でも、新しいフルシチョフどもが、自分の死後、墓をあばくかもしれない。いや、すでにかれの名は、以前のように栄光にかがやいてはいない。党の文章でも「党中央と毛沢東」というように、つねに劉少奇のひきいる党中央が、かれの名の先にでているではないか。事態がこのまま進行すれば、死後、かれの名はスターリンと同じように、個人主義的独裁者の代名詞にされるかもしれないのだ。

毛には十年前の一九四九年十月、北京で「中華人民共和国中央人民政府」を宣言した頃の忘れられない記憶がある。そのとき老詩人柳亜子はかれに――

たいよういでまたりまんはくれない  
太陽出来満地紅

われらにこのもうたくとくあり  
我等有個毛沢東

という詩をささげた。爾来今日までかれは国民から、不滅の太陽にたとえられてきた。だがそのころの太陽と、いまの太陽のあいだには、朝陽と夕陽のちがいがあつた。それに気づかない彼ではなかつた。彼は骨のずいまで革命家なのだ。

「現状をなんとかしなければなるまい。『党中央』のフルシチョフども、かれらこそ中国人民と世界革命の前にたちふさがり、自分の不滅への脱出をはばむ最大の障害なのだ。どんな手段をもつても、自分の生きているあいだに、かれらを処置しなければならない。」

だがかれが「奪権」（権力奪取）を企てるにしても、もう党組織はつかえなかつた。労働組合も、中国青年団も劉少奇の党中央ににぎられていふから使ひものにならない。これまでのように党によって動員された大衆運動もつかえない。ではどうしたらよからうか。

かれにはまだひとつの手がのこつていた。かれには二万八千里の長征をともしした紅軍、いな人民解放軍があつた。しかもその指揮系統の半分をしっかりと握つていふのは彼の生涯の副官林彪だつた。

林彪は毛沢東学校の優等生である。かれは中学をでて、あとは黄埔軍官学校から軍隊生活にはいつてしまつた。彼の場合には「紅軍は学校である」といふ言葉はまさにそのものずばりだつた。紅軍には林彪ばかりでなく陶铸、羅榮桓その他こういう人が非常に多い。かれらにとっては毛沢東は校長で

あり、家父長でもあった。かれらは毛沢東思想あるを知ってほんとのマルクス主義を知らない。つまり毛沢東主義のほかのマルクス主義などは考えることもできないのだ。

毛沢東はこの林彪と党の現状について、「奪権」についてかたり合った。もちろん林彪にいなやはない。かれらの間で奪権の具体的プランがどうきまってきたかわからないが、ともかく一九六一年頃から人民解放軍兵士の間に毛沢東個人崇拜運動が展開されたことはたしかである。林の意をうけてこの運動を主管したのは羅榮桓（すでに死亡）と蕭華だった。

この運動は「毛主席の書を全軍のあらゆる工作の最高指示とする」というスローガンのもとに兵士の間にひろがり、全国民兵運動の普及とともに外部の社会に向かって流れた。それはとくに生産から遊離した学生層に滲透し、「雷锋学習運動」、「王杰学習運動」というように、毛沢東思想のために身を犠牲にした兵士の名をつけた学習運動が青少年の心をとらえた。かれらの間には、「毛沢東のことならどんなことでもやりぬく」というスローガンが流行した。こうして学生の間にも毛沢東ユースが育成されていった。

毛・林派の劉・鄧派にたいする反撃の準備は他の方面でも着々すすめられた。毛沢東は一九六二年九月の十中全会に「いかなる場合にも階級闘争を忘れるな」（「千萬不要忘记階級闘争」というテーマを提出した。これは劉・鄧派としては文句のいいようのない当然なことだからだれひとり反対しなかった。十中全会のコミニケにはつぎのような言葉が挿入された。

「国外の帝国主義の圧力と国内のブルジョア階級の影響は党内に修正主義思想を生み出す社会的根源である。国内外の階級の敵と闘争するとともに、われわれは党内の各種の日和見主義の思想傾向に警戒し、あくまでこれに反対しなければならぬ。」

これもまた中国共産党としては当然のことである。ただ「党内の日和見主義思想傾向」とはなにをさすか、それをきめるものはだれかということである。そのいかんによつてはこれは非常な危険を内包している。劉少奇の主張する「党内民主主義」が確立していればともかく、「毛主席のいうことはどんなことも正しく、どんな命令にも服する」という人びとが党を支配すればどうであろう。毛沢東が党内のブルジョア主義者はだれだれだといえ、それでかれらの運命は封じられてしまう。つまり中国のすべての人の運命が、毛沢東ひとりの判断にゆだねられるのだ。考えようによつてはこんな危険なことはない。（文化大革命はそれを証明した）

毛は社会主義時代党内にもぐりこんでいるブルジョア分子との闘争のために、「社会主義時代の階級と階級闘争」を研究した。この面でかれを助けたのは陳伯達だった。陳は毛の研究を外部に宣伝した。かれらはまず比較的抵抗のよわい文芸界のブルジョア思想、修正主義思想を摘発し、これに攻撃を加えようとした。この工作は毛の夫人江青が担当し、文芸界からかれらの味方となるものをつつた。この方面で毛沢東夫婦をたすけたものは、華東局第一書記柯慶施（すでに死亡）、康生、張春橋、姚文元だった。彼女が京劇の「現代化」工作という形で、毛沢東の階級闘争理論を文芸工作者の頭

に注入しようとしたのは、一九六三年末からである。江青が関係してつくりあげたかような京劇は「沙家浜」「紅燈記」「智取威虎山」等数種がある。

同じく一九六三年から毛・林派は労働者、農民の間に「社会主義教育運動」「四清運動」を展開した。とくに農村で行なわれた「四清運動」は重大な意味をもっている。農村は「文革」運動における毛・林派と劉・鄧派の決戦場となる見通しがつよいから、すこしくわしく説明しておこう。

「四清運動」の「四清」とは、「政治を清め、経済を清め、組織を清め、思想を清めよ」ということである。これは一見なんのへんてつもない運動のようだが、実は「三反五反」よりもずっと血腥ぐさい肅清運動なのだ。毛沢東の計画は、だいたい六年間で全国のあらゆる地区党委員会、人民公社、生産隊のなかの地主、富豪、反革命分子や、「搾取階級の党内における代理人」を肅清するつもりだった。もつと具体的にいえば六年間で全国の劉・鄧派を根こそぎ処分してしまうことなのだ。このことの意味は、中国農村の発展とてらし合わせてみないとよくわからない。

劉・鄧派の農業政策では、うまく自留地を利用し、自由市場でよく売れるものをつくる農家は繁栄し、なまけものは没落する。したがって農村には貧富の懸隔がはげしくなった。それはやがて人民公社制度の上にも反映してきた。一九五九年頃の人民公社制度では、賃金は労働力と出勤日数によって支給され、公社設立のときに提出した耕地や家畜等、個人の投資についてはなにも顧慮されていなかった。創立当時の個人投資が比較的多かった中、上・富農は、それに不平をいだいていたが、劉・

鄧派はそういう不平が生産意欲に関係することをおそれて、人民公社制を改めたときに（いわゆる「整社」運動）賃金制に手直しを加え、投資分の多いものには、賃金以外にその分にはたいし多少の金をはらうようにした。この措置が公社内の貧・下・中農の不平をまねいたであらうことは充分考えられる。

毛・林派はこの現象を見のがさなかった。一九六三年「四清」運動をおこすとともに、貧・下・中農協会をおこし、貧・下・中農を中心として農村の「階級闘争」を展開したのだ。これにたいして中・上・富農は、実際には合作社とすこしもちがわなくなった現在の人民公社制をまもるために、公社幹部や民兵隊長の農村実権派と団結して貧・下・中農と対立した。

この闘争は地方の党部が劉・鄧派の穩健路線をとっているかぎり、そして貧・下・中農協会が革命によって地方党部と中・上富農の連合体、つまり農村の「実権派」を倒さないかぎり、貧・下・中農側に勝利の見通しはなかった。なぜならば貧・下・中農側には現状を革命するほどの必要がなかったからである。農村はつい二、三年前まで毎日の食糧にも困っていたのを、劉・鄧路線で生産がもと通りになったばかりだ。この現状を「造反むだん」によってくつがえせばもつとよい「現状」が生まれるというのか。とんでもない、現状をくつがえして毛・林路線にかえせば「大躍進」時代が再現することはわかりきっている。自留地はかえせ、報酬が少なくても文句はいうな、一切の私心をなくして世界革命路線を邁進せよ。これでは現状の方がはるかにましである。貧・下・中農の大部分はこういう考えだったから、「四清運動」が一向に進展しなかったのも無理はない。

毛・林派ははじめ三年間で全国の三分の一の地区を自派でかためる予定だった。それはまず省の党委員会からあらためて地区委員会、県委員会を自派の手におさめようと考えていたが、そんなことをしていたら「奪権」成功の可能性はほとんどないことがわかった。

こういういろいろな問題をめぐって、毛沢東と劉少奇の間はかなり険悪になってきた。

このとき周恩来はすでに劉少奇からはなれ、毛沢東の側に移行していたようである。おそらくかれは毛沢東個人崇拜の全国的たかまりからみて、毛・劉間の勢力のバランスがくずれたことを感づいたのであろう。しかし北京では毛・林派はいぜんとして少数派だった。北京でかれの「奪権」工作が成功する見通しのないことを知った毛沢東は、十一月上海に移って、そこから闘争を指導しようとした。

劉少奇は毛の意図をうたがって、はじめその上海行きを許そうとしなかった。江青夫人は劉夫人王光美にたのんでみたが、劉の意向はかわらなかつた。江青は周恩来にすがって、ようやく許可をとることができた。劉少奇は毛の上海行きを許したものの、心配でたまらなかつた。かれは羅瑞卿総参謀長に命じて、南京軍区司令許世友に毛を監視させることにした。しかし康生が許世友を説得して、毛・林派に寝返らせたために、毛は政治活動をはじめることができるようになった。もつともこれは壁新聞のつたえるところで、確証はない。だが毛が上海にくるとまもなく解放日報に、彭真——吳晗を批判した姚文元の論文があらわれたことからみておそらく真実にちかいかであろう。

このころ毛の周辺には林彪、上海市党部、周恩来、陳毅らがあつまり、劉・鄧派にたいする反撃計



画がねられていた。まず最初劉少奇の側の宣伝機関に集中攻撃をあげることになった。北京市委員会の呉晗、鄧拓、廖沫沙などがつぎつぎに批判され、紅旗編集部、人民日報編集部、新華社等の改造が行なわれた。それからの発展のすさまじさは目がくらむばかりだった。だがニュース源が限られている現在の時点においては、確信をもってこうだといえる真相はなかなかつかみがない。北京政局の動きについてはいまのところ、ユーゴスラビアの「タンユグ」通信北京駐在員ボグノビッチがスクープしたものの、日本の新聞がたんねんにあつめた壁新聞などによるほかはない。いまそれらによつて毛・林派クーデターの経過をたどってみよう。

一九六六年五月十五日の午後、國務院外交部からの連絡でボグノビッチ氏は、毛沢東が同夜汽車で上海から北京に帰ってくるということをきいて、数人の外国記者とともに停車場にかけつけ、四時間待ったがついに毛沢東は姿をあらわさなかった。後になってかれは済南で毛が汽車からおりてしまったことを知った。

毛沢東が北京入りを中止したのは、おそらく北京市の政情がまだ混沌としていて、完全に毛・林派の制圧下にあるとはいえなかったからであろう。

この頃劉少奇、鄧小平は文化革命工作組を各地方に派遣していた。この工作組派遣はのちに文化革命を促進させるためではなく、鎮圧するためだったと毛・林派から批判されている。劉少奇は文革を軌道にのせるためだったといい、「工作組派遣はあやまりではない」と自己批判を拒絶している。だ

が劉が「文革」の暴走をおさえようとしたことは否定できない。劉少奇や鄧小平は毛沢東の考えているようには「文革」を理解していなかった。かれらばかりでなく、中央委員の大多数には、「文革」はわけがわからなかったのではなからうか。五月十六日の党中央の通知も「絶対多数の党委員会はこの偉大な闘争の指導についてほとんど理解していない」といつている。

六月のはじめ林彪は、かれの腹心、総参謀長代理楊成武（羅瑞卿はすでに失脚）と、北京軍区司令楊勇を北京に派遣して、北京市委員会の改組を強行し、同時に人民日報、北京放送等を接収した。劉少奇はまだ北京によぶことのできる軍隊をもつてはいたが、宣伝機関はのこらずかれの手をはなれてしまった。しかし劉少奇は負けてはいなかった。ソ連党指導部が緊急中央委員会総会をひらいて、フルシチョフを失脚させた例にならない、中央委緊急会議を招集して毛沢東の権力をうばい、林彪の行動を阻止しようとした。

劉少奇や彭真は党中央委員会で、はたして多数派を獲得することができるかどうか自信がなかった。そのためには鄧小平を完全に味方にしておくことが必要だった。劉と彭の意をうけて、その工作を担当したのは、新たに北京市党委員会第一書記になった李雪峰だった。

彭真は六月下旬楊尚昆とともに西北局管内各省をまわった。かれは楊を西北局にのこしたまま、自分はさらに西南局管内の各省に向かった。帰京のときは、彭は西南局第一書記李井泉を、楊尚昆は西北局第一書記劉瀾濤をつれてかえった。

劉と彭はこれでどうやら多数派工作に自信をもつことができた。党中央委員会総会は七月二十一日開催と決定し、鄧小平総書記から全国各地の中央委員にあてて招電が発せられた。中央委員は続々上京した。七月十五日までに北京に集まった中央委員は五一名、同候補委員は三八名に達していた。この数字は各国通信員によって確認されたものである。

集まった中央委員の顔ぶれをみると、全国六地方局のうち西北局と西南局の中央委員はひとり残らず集まったが、中南、華東の両地方局からはほとんどきていなかった。地元華北局の中央委員は全員、東北局から半数程度が来ていた。

毛沢東はもちろん北京のこういう動きを知らながら、六月の初旬から七月初旬まで武漢地方を旅行していた。おそらくは中南局の王任重の勢力を味方に確保しておくためだったろう。このときかれは武漢で楊子江の水につかった。このニュースはかれが楊子江を泳いでわたったというように世界に伝わった。しかもその遊泳速度は世界の記録をやぶるものだった。かれが泳いだという日とそれが発表された日の間に一週間以上間があったばかりでなく、遊泳中といわれる毛沢東の写真には作爲のあとが歴然としていた。だがそれは民衆の間に毛沢東人気をおおるには充分だった。毛・林派はこれぞ自信をとりもどしたらしく、七月十一日中央委員全員にメッセージをおくり、中央委員会緊急会議にはかならず出席するから、自分がいくまでは会議を開催してはいけないといった。

劉少奇はそのときになれば、林彪の軍隊の威圧によって会議が開けなくなるのではないかと懸念

し、すでに七月二十一日開催の準備ができるから延期はできないと毛・林派に通告した。同時に法と秩序の維持を名目として自派の軍隊を北京に招致することにした。羅瑞卿から王恩茂新疆军区司令官にたいして部隊派遣の緊急命令が発せられた。

しかし七月十八日のひる頃には、上海地区からのぼってきた林彪の大部隊が北京に到着しつつあった。かれらはすでに北京にたいして包囲体制をとっていた。林彪の大部隊はさすがに北京市中にはいってこなかったが、この間一小隊が都心部に派遣されて羅瑞卿総参謀長を逮捕した。林彪軍はその翌日にはもう山西省境にむかっていた。

一方王恩茂の命令をうけた陝西省駐屯の一師団も北京にむかって行軍していた。かれらがもしもそのまま進めば林彪軍との衝突はまちがいになかった。だがそのときこの指揮官の手もとは毛沢東、林彪および楊成武参謀長代理から三通の電報が到達した。かれは王恩茂の軍命令よりもこれらの電報の方を重くみて、全軍に行動中止の命令を出した。こうして内戦の危機は最後の瞬間に回避されたのだ。

北京では、いよいよ明日毛沢東の上京をまたずに中央委員会緊急会議を開こうという七月二十日の晩、鄧小平が突然態度を豹変した。かれは劉少奇に毛沢東の上京を待つて総会を開いた方がよいといだした。もちろん林彪の軍事的圧力に威圧されたのだ。それに対抗する武力をもっていない劉少奇や彭真はそれに従うほかはなかった。かれらは中国では国民の理性に訴えるだけでは武力に勝てない

ことをあらためて思い知らされた。

七月二十八日午後毛沢東、林彪およびかれらの側の中央委員たちは、すでに北京の風向きが変わったことを知り、四台の飛行機に分乗して北京に到着した。こうして八月八日第十一回中央委員会総会が開催されることになった。会議はそれから十二日間つづいた。劉少奇派は意外に根強かった。毛沢東は劉少奇派から完全に政治権力をうばうことができなかつたばかりか、一時は毛沢東側が守勢にたされたほどだった。そのために毛沢東は党組織の手続きによる奪権闘争には自信を失った。

紅衛兵が舞台に登場し、開催中の中央委員会に外部から威嚇を加え出したのはこの頃からである。北京市中を練りあるく紅衛兵の数はだんだんふえてきた。かれらは人間のだけれどもがもっている破壊本能のままに行動することを許されて、うれしくてたまらないとでもいうように行動した。ただ「古い」というだけの理由で偶像の首をおり、神社の唐獅子がたおされた。それぞれに美しい音調と歴史をもった北京の街の名前ははぎれの悪い名前にかえられた。

それまで毛・林派と完全に合作していた周恩来の態度が、この頃からおかしくなりだした。八月の下旬、周恩来は北京の清華大学で演説し、大胆にも党中央から全国に派遣した「工作組」の九〇%が失敗したのは、毛沢東の責任であることをほのめかした。八月から九月にかけて挙行された紅衛兵大集会におけるかれの指示は、林彪のそれとはまったく違ったニュアンスをもっていた。かれは紅衛兵の北京への集中を、できるだけ減少させようとしていた。かれは紅衛兵が巨大な政治力に発展すれ

ば、毛・林派はそれを利用して、どんなことをしてかすかわからないと思ったのだ。実をいうと、かれ自身もすでに自分の行動を反省しはじめていた。

紅衛兵運動はいまでは牛の暴走のように、かれらが疲れきるまではだれもとめることはできなかつた。だが各地方局にのこされていた劉少奇派、つまり「実権派」は、北京からやってくる紅衛兵を弾圧し、毛・林派の「奪権」に執拗に反対しつづけた。地方局はそれぞれ軍権をにぎっている。毛・林派も自派の解放軍を派遣することをためらっていた。いきおい地方局はそれぞれ「独立王国」の様相を呈してきた。

このままでゆけば中国はばらばらになるほかはない。唯一の救いは、党の全国代表会議を開いて、すべての諸問題をそこで協議し、事態を收拾することだ。周はそれを考えた。

毛沢東は現状では周のいうような方法で「奪権」はむずかしいと思った。もちろん党大会を開いて自分の行動を認めさせたい。だがその前に各地区の党组织の奪権を完了しておかなければならない。そのためには紅衛兵を全国からもっと動員し、たえずデモや大集会で「実権派」を威脅しておかなければならない。だがその紅衛兵はすでにいろいろこまった問題をおこしていた。

北京全市は紅衛兵さわぎにはもううんざりしていた。周恩来は、地方紅衛兵だけでも北京から出ていってもらおうと考えて、治安維持の責任者たちにはたらきかけた。陶鑄がまずかれに賛成した。公安部長謝富治、京津軍区司令、北京市委員会の李雪峰も同じ意見だった。

こうして十二月はじめ中共中央、國務院北京市委員会の連名で、地方紅衛兵は十二月二十日まで北京から退去せよという、つよい指令がだされたのだ。北京の風むきがふたたび変わってきた。

しかし毛沢東はどんなときにも反撃を思いきるような男ではない。こんどの反撃はかれにかわって夫人江青が計画した。十一月二十八日彼女に「解放軍文化工作顧問」という肩書があたえられたことを祝う祝賀大会（「文芸界プロレタリア文化大革命大集会」）が催された。この大会に江青やその指導下にある四つの芸術団体員はみな解放軍の軍服をきて参列した。かれらは解放軍に編入されたのであるから、当然軍服をきる事ができる。だがかれらの実体は解放軍ではなく紅衛兵だったのである。この一団は十二月三日の夜それぞれ手わけして彭真、劉仁、田漢その他多くの人びとの邸宅をおそった。もちろんかれらの邸宅には紅衛兵の乱暴をふせぐために公安局から護衛が派遣されていたが、かれらは「解放軍」と戦ってまで、かれらを保護するほど守法精神はもっていなかった。

このとき拉致された人びとは、やがて一月四、五の両日、北京工人体育場で開かれた大衆批判会の会場に、それぞれの名前の頭文字を十字で消された大きな札を首にかけられたままひきすえられた。紅衛兵たちは「反革命」「修正主義者」「ブルジョア分子」とありとあらゆる悪口雑言をかれらにあげかけた。その半生を革命のためにささげたこれらの老幹部たちは、これも「後進国」革命家がうけなければならぬ当然な運命だともいうような、あきらめきった表情で、若者たちのなすがままに身をまかせていた。

そのうちのひとりの羅瑞卿は、たくましい若者にジェット機の翼のように両手をおりまげられ、自殺未遂のよわりきった体で屈辱に耐えていた。かれの目は周囲のわかものたちにこう語っているかのように見えた。

「私もかつて君たちと同じように毛主席のような偉大な事業をなしとげた人がまちがいをおかすはずはない、毛主席こそ永遠の太陽だと思っていた。だがいまやっとわかってきた。この世には永遠に偉大なものはありえない。年月がたてば太陽さえも光りを失うことを知ることが、どんなに大切なことであるかを。

毛主席のおかげで我が民族の発展をとざしてきた大石はとりのけられた。だが、いまやかれの偉大さがそれにかわる障害になろうとしている。毛主席はすべて造反（造反有理）には道理がある（造反有理）といわれた。全くその通りだ。かれだけはいつとも正しく造反（造反）の対象にならないということはありません。中華民族はいつも進歩のとまったものに造反（造反）したからこそ今日があるのだ。

君たちはまもなくかれにたいする造反にも道理があることを知るようになるだろう。」



---

中国・朝鮮問題に肉薄する至誠堂

---

- 毛沢東 その青年時代 李 鋭著  
毛沢東の生いたち、精神形成、初期革命活動を客観的な資料で紹介  
玉川・松井訳  
B 6 判 750 円
- 中国で経験したこと ロ ヲ著  
西欧の進歩的知性が期待して訪れた新中国の現実と東西思想の対決  
篠田ほか訳  
B 6 判 680 円
- 中国革命の悲劇(上, 下) アイザックス著  
1920年代の国共合作と分裂の第二革命を冷徹に分析。トロツキー序  
鹿島宗二郎訳  
B 6 箱入、各 950 円
- 中国現代史入門 至誠堂新書 28  
中国現代革命発展の潮流を知るための通史。日中両国の関係を解明  
岩村三千夫著  
480 円
- 私は日本人しか殺さない 金 九著  
日本国民の肺腑を鋭くえぐる、朝鮮独立の英雄テロリストの生涯。  
近 刊
- 物語 朝鮮現代史(仮題) 林 建彦著  
解放から動乱を経て朴政権成立まで。愛国の血に燃える革命家群像  
近 刊
-

動乱の毛沢東

昭和42年4月30日 第1刷発行

¥ 550

著 者 鹿 島 宗 二 郎

発 行 者 出 光 宏

発行所 東京都千代田区 株式会社 至 誠 堂  
神田錦治町1-9 会社

電話 (256) 8121 (代) 振替東京 97579

太平印刷・伊東製本



550円